

奈良市埋蔵文化財調査概要報告書

平成 8 年度

1997年

奈良市教育委員会

奈良古跡文化財調査概要報告書 平成8年度 正露裏

I. 文獻・文字

ページ	行・位置	調	正
本文目次	26行	放射線	放射性
	30行	宇喜田宮主殿堂十二・十三室、御前堂等	宇喜田宮主殿堂十二・十三室、御前堂等
■■■(88)	35行 左	十三坪	十三坪
	37行 左	十四坪	十四坪
■■■(88)	19行 左	宇喜田宮主殿三一~三二~三三~三四~三五~	宇喜田宮主殿三一~三二~三三~三四~三五~
	21行 左	松林苑	松林苑
	15行 右	松林苑	松林苑
	16行 右	宇喜田宮主殿三一~三二~三三~	宇喜田宮主殿三一~三二~三三~
■■■(88)	7344018	475m	175m
	735018	宇喜田宮主殿三一~三二~	宇喜田宮主殿三一~三二~
	773318	大安寺 2丁目	大安寺 2丁目 1149
		日 9. 0. 3.	日 9. 0. 3. 31
P	1 4 行	第 351 次 調査	第 351 次 調査
P	2 表「488318	日 7. 1. 2. 3. 0 育母町 42-1. 43-1	日 7. 1. 0. 3. 0 育母町 42-1. 43-1他
P	3 行	第 2. 7. 3 次 調査	第 3. 2. 7 次 調査
P	4 行	第 2. 7. 3 次 調査	第 3. 2. 7 次 調査
P	5 表「SES52018	及方年通鑑	及方年通鑑
P	1 5 行	馬神功物作土	馬神功物作土
P	1 7 表「SES50118	曲物瓦收	曲物瓦收
P	1 8 東北壁上刻四 北壁上刻四	(排土上) (排土上)	(作土) (作土)
P	1 9 813-5(288)	1.0m	1.0m
P	2 1 1行	1 点 6255E 1 点、6255L 1 点	1 点、6225E 1 点、6225L 1 点
	5 行	26~37	26~47
P	5 ~ 6 行	38が板。39が	48が板。49が
P	5 行	萬年造	萬年造
P	5 ~ 6 行	神功開寶	神功開寶
P	7 行	至同元寶	至同元寶
P	2 9 13行	318. 325	第 318. 324. 325
P	4 5 2行	市第 164. 168次 調査	市第 164. 168次 調査
P	5 1 12行	宅地 1/32	宅地 1/32
P	5 8 四	駆みかげ 部	駆みかげ 部
P	5 9 表	東京平安新規	東京平安以降
P	6 0 20行	I. 期 新規階 (9世紀前半)	I. 期 新規階 (9世紀前半)
P	6 5 17行	新規九	新規九
P	6 9 13行	瓦	瓦
P	7 2 10行	内	内
P	7 5 表	體	體
P	9 7 22行	新規收存	新規收存
P	1 0 4 1行	1. 144	1. 144
P	1 0 6 15行	一色	一色
P	1 0 9 11行	新規收存	新規收存
P	1 1 3 24行	上	上
	27行	沙青灰	沙青灰
P	1 1 4 四	色	色
P	1 1 7 四	基	基
P	1 3 8 ケイトル	中	中
P	1 4 2 11行	K 2111 ~ 214	S C 2111 ~ 214
P	1 4 3 4行	X 4 0 2	S D 4 2 2
P	1 4 4 15行	S 3 ~ 5 号	第 4 ~ 6 号
	18行	場	場
P	4 2 クイ	4. 5 号	4. 5 号
P	4 9 イトル	小路 東側	小路 東側
P	7 6 見出	坊 間 大路	坊 間 大路
		69次	69 ~ 71次
		CD.	CD.
		第 71次	(3)

2. 地図

ページ	正部分
P 1 1	P 1 2 の神 四とと差しししそええ
P 1 2	P 1 1 の神 四とと差しししそええ
P 3 4	四中中央の文字 S D 3 2 1 を削除

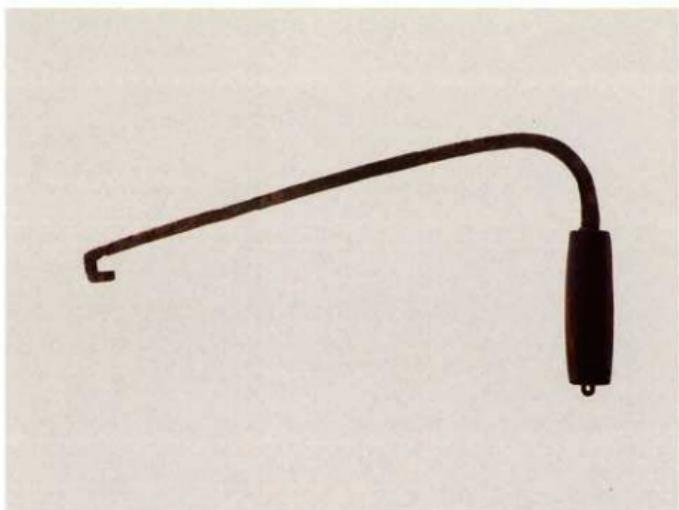
奈良市埋蔵文化財調査概要報告書

平成 8 年度



1997年

奈良市教育委員会



1 簾（やく）



2 奈良三彩壺Aミニチュア

はじめに

奈良市は、古代の都であった平城京をはじめ、様々な遺跡が数多く残され、今日まで連継と受け継がれています。

遺跡は、私たちの遠い祖先たちが残してくれた貴重な遺産で、開発事業などが行なわれるにあたり、遺跡の発掘調査は必要で、現在調査を積極的に取り組んでいます。

平城京跡を中心とした遺跡の発掘調査が中心であります。その調査結果を既に史跡整備事業なども行ない、埋蔵文化財の保存と活用を図っています。

また、こうした発掘調査で明らかになった過去の生きた証を過去の遺産としてとどめることだけでなく、現在を生きる私たちはこれを大切にし、子孫に誤りなく伝える責務があると考えております。

この報告書は、主に平成8年度に実施しました発掘調査の結果をまとめたもので、多くの人々に広く活用していただくことを願っております。

最後になりましたが、発掘調査の円滑な実施にご理解とご協力をいただきました地元の方々、関係機関の皆様に対して厚くお礼申し上げます。

平成9年3月

奈良市教育委員会

教育長 河合 利一

例　　言

1 本書は、平成8年度に奈良市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の概要報告を集録したものである。また、一昨年度及び昨年度に実施した下記の発掘調査の概要報告を併せて掲載した。

平成6年度 平城京第318・324次調査

平成7年度 平城京第325・327・331・334・335・339・344～346次調査、

史跡大安寺旧境内第69・71次調査

なお、本年度の発掘調査のうち、平城京第363～366・368・370・373次調査、西大寺旧境内第10次調査は次年度に報告する。また、平城京第356次調査（史跡平城京朱雀大路跡保存整備事業に関わる発掘調査）、平城京第358次調査（特別史跡・特別名勝平城京三条二坊宮跡庭園整備事業に関わる発掘調査）、菅原東道跡埴輪蒸跡群整備に関わる発掘調査（平城京第371次調査）、史跡大安寺旧境内第73次調査（史跡大安寺旧境内保存整備事業に関わる発掘調査）については整備事業完了時に、五ツ塚占墳群第3次調査、正暦寺境内第1次調査については継続調査終了時にそれぞれ報告する予定である。平城京東市跡推定地第19次調査は別に概要報告書を刊行した。

2 発掘調査は下記の体制で実施し、各調査の担当者は発掘調査一覧に示した。

社会教育部文化財課 課長 安田龍太郎 主幹 森川倫秀

埋蔵文化財調査センター 所長 高谷明男

庶務係 係長 杉村武史

調査第一係 係長 西崎卓哉

技術吏員 立石堅志 鏡方正樹 松浦五輪美 安井宣也

久保邦江 池田裕英 原田憲二郎

技術員 大庭淳司 田林香織 細川富貴子

調査第二係 係長 篠原豊一

技術吏員 三好美穂 森下浩行 武田和哉 秋山成人

中島和彦 久保清子 宮崎正裕

技術員 山前智敬

3 発掘調査と本書の作成にあたって奈良国立文化財研究所、奈良県教育委員会、奈良市文化財保護審議会など関係諸機関からご指導とご協力をいただいた。記して感謝いたします。

4 本年度の発掘調査や出土遺物整理作業等には、下記の方々の協力があった。

荒川 茂 今中 勇 植木武義 梅木繁一 奥田秀吉 北村 進

木村喜代之 木村嘉宏 小西綾子 小西貢造 塩野谷八十布 高橋敬輔

瀬田 勘 多久裕三 田口奈美江 長川吉弘 辻 俊浩 辻中 灵

辻本武雄 仲村繁夫 二宮信隆 林健太郎 原田章英 福田光米

藤沢辰夫	増田義郎	松川十三日	松村茂治	松本 威	吉村 章
市川剛司	岩崎大介	高力美和	小林佐知子	坂倉清彦	島軒 満
益田真友子	山矢杏子	堂下尚生	徳野裕明	仲川裕美子	久富正登
藤井健太	松田知之	森谷貴弘	森木成絵	森木裕美	山形香保里
山口 均	伊東由美	岩下和江	浦元由紀子	大友明美	小川布子
角谷和美	金戸康子	北井有代	北尾史真	近藤富貴子	齐藤和子
佐伯全子	新谷弘美	芹川順子	芹野恒代	田島千津子	立石京子
手塚真理	中島嵩寿江	濱井美和	板東剛子	松嶋克樹	松山徑子
山村光子	吉川二子	辻 寛子	猪井里佳	虫明富美	

- 5 各発掘調査の次数は、奈良市教育委員会が実施した調査に付した、遺跡ごとの通算次数である。
- 6 本書の執筆は埋蔵文化財調査センター職員が分担して行い、文末に文責を明らかにした。
- 7 平城京第325次調査、第349次調査の採取試料については、下記の方々による理化学分析を行いその報告をいただいた。記して感謝いたします。
- 放射性炭素年代測定 鎌古環境研究所
- 花粉分析 金原正明（天理大学附属天理参考館）、金原正子（環境考古研究所）
- 珪藻遺骸分析 清水 兼（奈良女子大学）
- 8 平城京第327次調査出土の樹については、日本計量史学会 篠原俊次氏のご教示をいただいた。平城京第327・349次調査出土の石製品の石材については、京都府立山城郷上資料館 橋本清一氏に鑑定していただいた。平城京第327・349次調査出土の木簡及び本度実施した発掘調査で出土した墨書き器の軽読にあたっては、奈良国立文化財研究所 鈴野和己氏・古尾谷知哉氏・山下信一郎氏・渡辺晃宏氏のご教示をいただいた。平城京第354次調査出土の動物骨については、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター 松井 章氏に鑑定していただいた。平城京第355次調査出土の土器の年代については、(財) 京都市埋蔵文化財研究所 小森俊寛氏のご教示をいただいた。平城京第335・339次調査にあたっては、奈良国立文化財研究所 白井 敦氏、奈良女子大学 高田将志氏のご教示をいただいた。以上、記して感謝いたします。
- 9 本書で使用した遺構の分類記号や遺物の名称、型式は奈良国立文化財研究所および奈良市教育委員会の刊行物に準拠している。ただし、遺構番号は各調査ごとに付した仮番号である。
- 10 本書の遺構図、土層図に示した座標値は国土調査法に定める国土方眼第VI座標系によっている。標高は海拔高である。
- 11 本書の編集は、安田龍太郎の指導のもとに埋蔵文化財調査センター職員の協力を得て篠原豊・安井宣也が担当した。

本文目次

1 平城京跡・松林苑跡の調査	
1 近鉄西大寺駅南地区土地区画整理事業に伴う調査	1
(1) 平城京右京二条三坊二坪の調査	第327-1・351-2次 3
(2) 平城京右京二条三坊六坪の調査	第327-5次 13
(3) 平城京右京二条三坊九坪の調査	第327-2・4次 16
(4) 平城京右京二条三坊十坪の調査	第327-3次 18
(5) 平城京右京二条三坊十一坪の調査	第327-5・351-1次 25
2 JR奈良駅周辺地区土地区画整理事業に伴う調査	29
(1) 平城京左京四条四坊十二・十三坪の調査	第164-208・324・331・335・339次 31
(2) 平城京左京四条四坊十四坪の調査	第347-2・353-1次 45
(3) 平城京左京四条四坊十五坪の調査	第318-1-3・325-2~7・347-1次 53
(4) 平城京左京四条四坊十六坪の調査	第334・345次 65
(5) 平城京左京四条五坊三坪の調査	第353-2次 70
3 平城京左京四条一坊十・十一坪の調査	第344次 73
4 平城京左京四条二坊二坪の調査	第346次 76
5 平城京右京一条二坊十一坪の調査	第348次 78
6 平城京右京七条一坊十五坪の調査	第349次 84
7 平城京左京五条四坊九坪の調査	第350次 89
8 平城京左京五条六坊八坪の調査	第352次 93
9 平城京左京二条五坊十三坪の調査	第354次 94
10 平城京左京四条三坊六坪の調査	第355次 98
11 平城京左京三条四坊一坪の調査	第357次 102
12 平城京左京二条六坊十坪の調査	第359次 104
13 平城京左京五条二坊十五・十六坪の調査	第361次 106
14 平城京左京四条五坊十三坪の調査	第360次 107
15 平城京左京八条二坊三坪の調査	第362次 108
16 松林苑跡の調査	第367・369次 110
17 平城京左京四条五坊十二坪の調査	第372次 112
18 平城京左京七条一坊五坪の調査	第374次 113

II 平城京内寺院跡の調査

1 史跡大安寺旧境内の調査	115
(1) 講堂・回廊・僧房の調査 第69次	116
(2) 西面大垣推定地の調査 第71次	119
(3) 食堂推定地の調査 第72次	120
2 元興寺旧境内の調査	125
(1) 東塔院推定地の調査 第42次	126
(2) 東面回廊推定地の調査 第43次	127
(3) 西面回廊推定地の調査 第44次	128
3 史跡東大寺旧境内の調査	129
(1) 西面大垣の調査 第9次	130

III その他の調査

1 鹿野園石器散布地の調査 第1次	133
2 東紀寺遺跡の調査 第4次	135
3 古市遺跡の調査	136
(1) 第3次調査	137
(2) 第4次調査	140
4 七ツ塚古墳群の調査 第1次	144

IV 小規模確認調査・試掘調査・工事立会

1 小規模確認調査・試掘調査	145
2 工事立会一覧	147

付録 自然科学分析

1 平城京第325-7・349次調査採取試料の放射線炭素年代測定	151
2 平城京第325-7・349次調査における花粉分析	153

付図

平城京左京四条四坊十二・十三坪 検出遺構平面図

図版目次

卷首図版 平城京右京二条三坊十坪 第327次 S E504出土遺物

図版1 平城京右京二条三坊二坪 第327・351次	(1)	図版20 平城京左京四条四坊十二坪 第335次	(4)
図版2 平城京右京二条三坊二坪 第327・351次	(2)	図版21 平城京左京四条四坊十三坪 第335次	(5)
図版3 平城京右京二条三坊二坪 第327・351次	(3)	図版22 平城京左京四条四坊十三坪 第335・339次	(6)
図版4 平城京右京二条三坊二坪 第327・351次	(4)	図版23 平城京左京四条四坊十三坪 第339次	(7)
図版5 平城京右京二条三坊二坪 第327・351次	(5)	図版24 平城京左京四条四坊十二坪 第335・339次	(8)
図版6 平城京右京二条三坊六坪 第327次	(1)	図版25 平城京左京四条四坊十四坪 第347・353次	(1)
図版7 平城京右京二条三坊六坪 第327次	(2)	図版26 平城京左京四条四坊十四坪 第347・353次	(2)
図版8 平城京右京二条三坊九坪 第327次		図版27 平城京左京四条四坊十四坪 第347・353次	(3)
図版9 平城京右京二条三坊十坪 第327次	(1)	図版28 平城京左京四条四坊十四坪 第347・353次	(4)
図版10 平城京右京二条三坊十坪 第327次	(2)	図版29 平城京左京四条四坊十四坪 第347・353次	(5)
図版11 平城京右京二条三坊十坪 第327次	(3)	図版30 平城京左京四条四坊十四坪 第347・353次	(6)
図版12 平城京右京二条三坊十坪 第327次	(4)	図版31 平城京左京四条四坊十四坪 第347・353次	(7)
図版13 平城京右京二条三坊十一坪 第327・351次	(1)	図版32 平城京左京四条四坊十五坪 第318・325・347次	(1)
図版14 平城京右京二条三坊十一坪 第327・351次	(2)	図版33 平城京左京四条四坊十五坪 第318・325・347次	(2)
図版15 平城京右京二条三坊十一坪 第327・351次	(3)	図版34 平城京左京四条四坊十五坪 第318・325・347次	(3)
図版16 平城京右京二条三坊十一坪 第327・351次	(4)	図版35 平城京左京四条四坊十五坪 第318・325・347次	(4)
図版17 平城京左京四条四坊十二坪 第331・335・339次	(1)	図版36 平城京左京四条四坊十五坪 第325次	(5)
図版18 平城京左京四条四坊十二坪 第331次	(2)	図版37 平城京左京四条四坊十五坪 第325次	(6)
図版19 平城京左京四条四坊十三坪 第331・335次	(3)	図版38 平城京左京四条四坊十五坪 第325・347次	(7)

図版39	平城京左京四条四坊十五坪 第318・325次	(8)	図版61	平城京左京三条五坊十三坪 第354次	(2)
図版40	平城京左京四条四坊十五坪 第325次	(9)	図版62	平城京左京四条三坊六坪 第355次	(1)
図版41	平城京左京四条四坊十六坪 第334・345次	(1)	図版63	平城京左京四条一坊六坪 第355次	(2)
図版42	平城京左京四条四坊十六坪 第334・345次	(2)	図版64	平城京左京三条四坊一坪 第357次	
図版43	平城京左京四条四坊十六坪 第334・345次	(3)	図版65	平城京左京二条六坊一坪 第359次	
図版44	平城京左京四条四坊十六坪 第334・345次	(4)	図版66	平城京左京四条五坊十三坪 第360次	
図版45	平城京左京四条四坊十六坪 第334・345次	(5)	図版67	平城京左京五条二坊十五・十六坪 第361次	(1)
図版46	平城京左京四条五坊三坪 第353次	(1)	図版68	平城京左京五条二坊十五・十六坪 第361次	(2)
図版47	平城京左京四条五坊三坪 第353次	(2)	図版69	平城京左京八条二坊三坪 第362次	
図版48	平城京左京三条一坊十一坪 第344次	(1)	図版70	松林苑 第367・369次	(1)
図版49	平城京左京三条一坊十一坪 第344次	(2)	図版71	松林苑 第369次	(2)
図版50	平城京左京四条二坊三坪 第346次	(1)	図版72	平城京左京四条五坊十二坪 第372次	
図版51	平城京左京四条二坊三坪 第346次	(2)	図版73	平城京左京七条一坊五坪 第374次	
図版52	平城京右京一条二坊十一坪 第348次	(1)	図版74	史跡大安寺旧境内 第69次	(1)
図版53	平城京右京一条二坊十一坪 第348次	(2)	図版75	史跡大安寺旧境内 第69次	(2)
図版54	平城京右京一条二坊十一坪 第348次	(3)	図版76	史跡大安寺旧境内 第69・71次	(3)
図版55	平城京右京七条一坊十五坪 第349次	(1)	図版77	史跡大安寺旧境内 第72次	
図版56	平城京右京七条一坊十五坪 第349次	(2)	図版78	元興寺旧境内 第42次	
図版57	平城京右京七条一坊十五坪 第349次	(3)	図版79	元興寺旧境内 第43次	
図版58	平城京左京五条四坊九坪 第350次		図版80	元興寺旧境内 第44次	
図版59	平城京左京五条六坊八坪 第352次		図版81	史跡東大寺旧境内 第9次	
図版60	平城京左京三条五坊十三坪 第354次	(1)	図版82	鹿野園石器散布地 第1次	(1)
			図版83	鹿野園石器散布地 第1次	(2)
			図版84	鹿野園石器散布地 第1次	(3)
			図版85	東紀寺遺跡 第4次	
			図版86	古市遺跡 第3次	(1)
			図版87	古市遺跡 第3次	(2)
			図版88	古市遺跡 第4次	(1)
			図版89	古市遺跡 第4次	(2)
			図版90	古市遺跡 第4次	(3)
			図版91	古市遺跡 第4次	(4)
			図版92	七ツ塚古墳群 第1次	
			図版93	第325・349次 花粉遺体	



平成 8 年度 調査地位置図 (1 /50,000)

I 平城京跡・松林苑跡の調査

1 近鉄西大寺駅南地区土地区画整理事業に伴う調査

奈良市教育委員会では、奈良市が進める近鉄西大寺駅南地区土地区画整理事業（総面積約32万m²）に伴って、昭和63年度から事業地内の発掘調査を継続している。本年度は表に示した5件、計4,940m²の調査を実施し、初年度からの合計調査面積は76,738m²に達した。

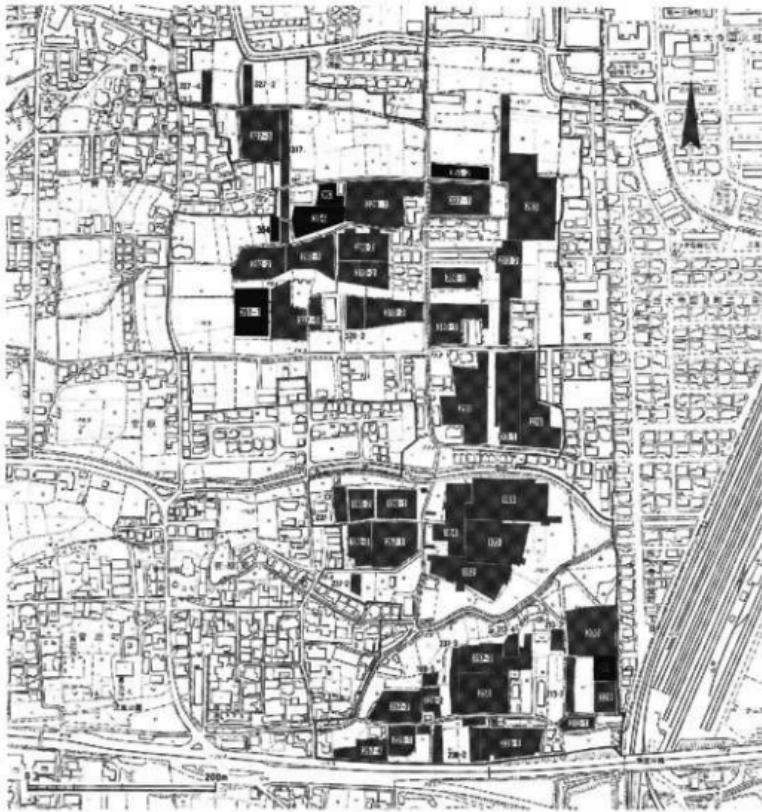
第351調査は、平城京右京二条三坊二・十一坪における調査である。第1発掘区は二坪にあたり、昨年度実施した第327次調査第1発掘区の北隣接地で設定した。第2発掘区は十一坪にあたり、昨年度実施した第327次調査第5発掘区の西隣接地で設定した。第363・364次調査は同七坪における調査で、昨年度実施した第326次調査第1発掘区の西隣接地にあたる。第371次調査は菅原東遺跡埴輪窯跡群の整備に伴う調査である。

●本年度報告する調査について

本書に収録した調査は、本年度実施した第351次調査と、昨年度未報告であった第327次調査である。これらの調査地は、平城京右京二条三坊二・六・七・九・十・十一坪にわたる。ここでは、上記の調査を坪ごとにまとめて報告する。なお、第363・364・371次調査については来年度以降に報告する予定である。



平成8年度の調査地と周辺の町坊 (1/20,000 地図の範囲が土地区画整理事業予定地)



発掘調査地位置図（1／6,000　数字は調査次数）

調査年度	調査次数・ 発掘区	遺跡名	調査地	調査期間	調査面積	備考
平成7年度	327-1発掘区	平城京右京二条三坊二坪	吉野町10-1・11	H7.07.07～H8.02.26	2,200㎡	
	-2発掘区	平城京右京二条三坊六坪	西大寺町2132	H7.06.18～H7.10.12	416㎡	
	-3発掘区	平城京右京二条三坊九坪	青野町43-1、45-1、47、49	H7.10.05～H7.12.22	1,836㎡	
	-4発掘区	平城京右京二条三坊九坪	西大寺町2130	H7.12.20～H7.11.27	300㎡	
	-5発掘区	平城京右京二条三坊六・十一坪	曾根町210・213～227	H7.12.07～H8.03.22	2,506㎡	
平成5年度	351-1発掘区	平城京右京二条三坊十一坪	曾根町214他	H8.06.03～H8.08.22	1,580㎡	
	-2発掘区	平城京右京二条三坊二坪	吉野町12	H8.06.23～H8.12.24	800㎡	
	353	平城京右京二条三坊七坪	青野町22-1、23-1・2・4	H8.10.22～H8.12.24	716㎡	平成5年度報告予定
	354	平城京右京二条三坊七坪	青野町42-1、43-1	H8.11.06～H9.01.29	1,536㎡	平成5年度報告予定 削除報告
	371	青野東道跡構築跡群	横筋町400他	H9.01.07～H9.03.31	160㎡	

平成8年度発掘調査および本概要報告書掲載調査一覧

(1) 平城京右京二条三坊二坪の調査 第327-1・351-2次

I 調査の目的

右京二条三坊二坪では、これまでに坪の南東部で平成5年度に第283次調査、南西部で平成7年度に第273次調査第1発掘区を実施している。今年度は昨年度に引き続き、坪の南西部の様相を明らかにする目的で、第273次調査第1発掘区の北側に近接して発掘区を設定し、第351次調査第2発掘区を実施した。今回は第327次・第351次調査の概要を合わせて報告する。

II 調査地の地形と層相

調査地は西から東へなだらかに下る微高地上に位置し、発掘区内はさらに南から北に向かってゆるやかに傾斜している。基本的な層序は、黒灰色土（作土）以下、灰色砂質土、灰褐色土と続き、地表下0.3～0.5mで黄灰色粘土あるいは黄褐色土、茶灰色砂の地山に達する。その標高は、70.1～70.7mである。なお、遺構はすべてこの地山上面で検出した。

III 検出遺構

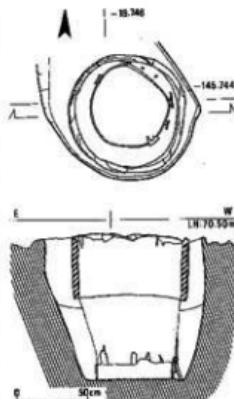
検出した遺構は、奈良時代の掘立柱建物、掘立柱塀、井戸、土坑、土器埋納土坑、平安時代以降の掘立柱建物、掘立柱塀、井戸、土坑、溝がある。これらの遺構は重複関係から少なくとも5時期以上の変遷がある。以下、主なものについて記す。

なお、掘立柱建物、掘立柱塀、井戸については一覧表にまとめた。

奈良時代の遺構 掘立柱建物41棟、掘立柱塀2条、井戸30基、土坑1基、土器埋納土坑2基がある。これらの遺構は、重複関係や配置などから少なくとも3時期以上の変遷がある。

S B221～247・250・251・260～270・S A248・249 概要
は一覧表にまとめた。建物に伴って出土する遺物が少ないので、時期区分を明確にすることはできなかった。

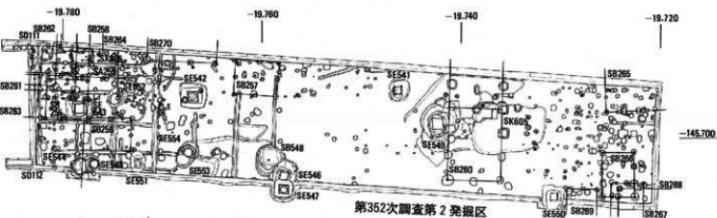
S E517～536・540～543・546～551 概要 は一覧表にまとめた。棒が残存していたものは12基ある。S E520とS E524は一枚板を使用した小型の長方形縦板組の井戸である。S E523は径約0.83mの瓦製円筒管を井戸枠として使用している。掘形の底には凸出物を一段据え、その外側に縦板を瓦製円筒管の内側に沿って立て並べている。この瓦製円筒管の上端部には半円形の切り欠きがあり、上下水施設等の他で用途に使われていたものを転用している可能性が高い。15世紀以降では瓦製土管を井戸枠に使用している例はあるが、奈良時代では



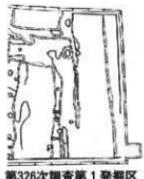
井戸 S E523 平面・立面図(1/40)

通 番 号	様 方 向	規 格 (桁行×架間)	桁行全長 m (尺)	梁行全長 m (尺)	梁行柱間 寸法 (m)	梁行行間 寸法 (m)	前の出 (m)	備 考
S B221	南北	3 × 2 ?	5.7(19)	3.6(12)	妙江-Ⅱ-19	1.8等間		S B222と柱筋彌う、妻柱未検出
S B222	南北	3 × 2	5.4(18)	3.6(12)	1.8等間	1.8等間		S B221と柱筋彌う、S B223より新しい
S B223	南北	3 × 2	5.4(18)	3.6(12)	1.8等間	1.8等間		S B222より古い
S B224	東西	3 × 2 以上	4.95(16.5)	3.3(11)	1.65等間	1.65等間		S E531より古く、S E530より新しい
S B225	東西	4 × 2	5.4(18)	1.8(6)	1.8等間	1.8等間	西1.8	西廻付建物
S B226	東西	3 × 2	4.65(15.5)	3.9(13)	和田-Ⅱ-13	1.95等間		
S B227	南北	3 × 2	4.95(16.5)	3.6(12)	1.65等間	1.8等間		
S B228	縦柱	2 × 2	3.6(12)	3.6(12)	1.8等間	1.8等間		
S B229	東西	3 × 2	5.4(18)	3.0(10)	1.8等間	1.5等間		
S B230	南北	3 × 2	6.3(21)	3.3(11)	2.1等間	1.65等間		
S B231	東西	3 × 2	5.4(18)	4.2(14)	1.8等間	2.1等間		
S B232	南北	4 × 2	7.35(24.5)	4.2(14)	2.1等間	2.1等間		
S B233	南北	3 × 2	5.85(19.5)	4.5(15)	1.95等間	2.25等間		S B237より新しい、6763A出土
S B234	南北	3 × 2	6.3(21)	3.6(12)	2.1等間	1.8等間		
S B235	南北	3 × 2	4.95(16.5)	3.6(12)	1.65等間	1.8等間		S E530より古い
S B236	東西	3 × 2	5.85(19.5)	6.3(21)	1.95等間	2.1等間	南2.1	南廻付建物
S B237	東西	3 × 2	5.85(19.5)	4.8(16)	1.95等間	2.4等間		S B231・238・239より古い、6691A出土
S B278	東西	3 × 2	5.4(18)	3.3(11)	1.8等間	1.65等間		S B237より新しい
S B239	東西	3 × 2	6.3(21)	3.6(12)	2.1等間	1.8等間		S B236より新しい
S B240	東西	3 × 2	5.1(17)	3.6(12)	妙江-Ⅱ-17	1.8等間		S B239より古い
S B241	南北	3 × 2	4.5(16)	3.0(10)	1.6等間	1.5等間		S B231から、S B239・240より新しい、6691A出土
S B242	南北	3 × 2	4.8(16)	3.6(12)	妙江-Ⅱ-18	1.8等間		法隆寺式37E新丸山出土、S B241より古い
S B243	南北	3以上×2?	3.6(12)以上	3.3(11)	1.8等間			S E522より古い、妻柱未検出
S B244	縦柱	2 × 2	3.3(11)	3.0(10)	1.65等間	1.5等間		
S B245	南北	3 × 2	5.85(19.5)	4.2(14)	1.95等間	2.1等間		
S B246	南北	5 × 2	10.5(35)	4.5(15)	2.1等間	2.25等間		S K601・602より古く、S E530より新しい
S B247	3以上×1以上	4.8(16)以上	4.2(10)以上	2.4等間	2.1等間		S D110より古い	
S A248	東西	5	11.4(38)		妙江-Ⅱ-24	24 24 24		S E532より新しい
S A249	東西	4	9(30)		2.25等間			
S B250	南北	3 × 2	6.3(21)	4.5(15)	2.1等間	2.25等間		
S B251	南北	3 × 2	5.7(19)	3.9(13)	妙江-Ⅱ-19	1.95等間		S B253より古い
S B252	東西	4 × 3	8.1(27)	6.75(22.5)	2.25等間	2.25等間		根石あり、SK604・S E536より古い、平安
S B253	南北	3 × 2	6.75(22.5)	4.2(14)	2.25等間	2.1等間		S B237・251より新しい、平安
S B254	東西	4 × 2 以上	9.3(31)	1.0	妙江-Ⅱ-14	24 24 24	南1.0	南廻付建物、平安
S B255		2 × 2	4.2(14)	4.2(14)	2.1等間	2.1等間		S B263・S E543より新しい、平安
S B256	東西	2 × 2	4.2(14)	3.6(12)	2.1等間	1.8等間		S E543より新しい、根石あり、平安
S B257	東西	2 × 2	4.2(14)	3.6(12)	2.1等間	1.8等間		根石あり、平安
S B258	東西	3以上×2以上	6.3(21)以上	3.0(10)以上	2.1等間	1.5等間		根石あり、平安
S A259	東西	4 以上	4.4		1.1等間			平安
S B260	南北	4 以上×2	9.6(38)以上	5.4(18)以上	2.4等間	2.7等間		妙江-Ⅱ-14等間、S E50・506より新しい、6691A出土
S B261		2以上×3以上	3.6(12)以上	4.8(16)以上	1.8等間	2.4等間		S B262より新しい
S B262		1以上×3以上	1.8(6)以上	4.2(14)以上	1.8	2.1等間		S B261・271より古い
S B263		3以上×2以上	6.3(21)以上	4.8(16)以上	2.1等間	2.4等間		S B255・S E543・544より古い
S B264	南北	1以上×2		4.2(14)以上		2.1等間		
S B265	東西	3以上×1以上	4.8(16)以上	1.6以上	1.6等間	1.6		
S B266	南北	3 × 2	4.5(15)以上	3.0(10)	1.5等間	1.5等間		
S B267	南北	1以上×2	1.6以上	3.2	1.6	1.6等間		
S B268		2以上×1以上	3.6(18)以上		1.8等間			
S B269	南北	1以上×2		3.0(10)		1.5等間		
S B270		3以上×1以上	7.2(34)以上		2.4等間			

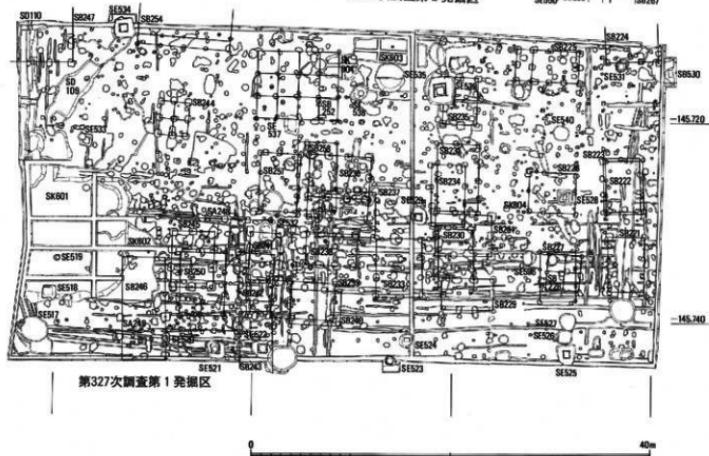
-19.600



第352次調査第2発掘区



第326次調査第1発掘区



第327次調査第1発掘区

第351次調査第2発掘区造様平面図 (1/400)

遺構番号	掘形			縁 内法 (m)	水槽・溝道 箇所等	主要出土遺物	備考
	平面形	平而深模 (m)	深さ (m)				
S E517 不整円形	長径2.7 短径2.5	1.45				曲物底板	棒は抜き取られてい る
S E518 圓丸方形	東西1.45 南北1.45	0.9 以上	方形ということ のみ判明		木炭敷とその下 に繩敷	桃核	棒は抜き取られてい る。SK601より古い
S E519 不整円形	長径0.56 短径0.44	0.5 以上			曲物(深0.35)、曲 物内木炭・繩敷	曲物	曲物2段分のみ残存、 SK601より古い
S E520 長円形	長径0.8 短径0.7以上	0.9	長方形横板組	0.35 ×0.6			柱とも柱頭部、側壁を みて、S E518・E519より古 い
S E521 圓丸方形	東西2.0 南北1.85	1.4			曲物(深0.55)、 曲物内繩敷	苔塗、曲物底板、 窓、漆塗版、桃核	棒は抜き取られて、 曲物のみ残存
S E522 圓丸方形	東西2.0以上 南北1.8以上	1.5	方形横板組	0.85	曲物(深0.73)、 曲物内木炭・繩敷	桃核、6732A	棒は2段分残存
S E523 不整円形	長径1.3 短径0.9以下	1.1 以上			曲物(深0.6)と、その外 側に土層を並べている	瓦質導水管を転用し している可能性あり	
S E524 不整円形	長径1.45 短径1.35	1.0	長方形横板組	0.53 ×0.35			東西のみ2段で、他 は1枚板を使用
S E525 圓丸方形	東西1.9 南北1.7以上	1.0	方形横板組横棟	0.6	繩、木炭敷	繩、有孔円盤 刷毛、桃核	
S E526 圓丸方形	東西1.4 南北1.4	0.7			木炭敷		棒は抜き取られてい る。S E527より新しい
S E527 不整円形	長径1.7以上 短径1.7	0.7					棒は抜き取られてい る。S E526より古い
S E528 圓丸方形	東西1.55 南北1.58	1.4	方形横板組	0.93 ×0.85	名古屋市営地下 鉄道1段分繩敷、深0. 0.53	漆塗板、漆工、 漆刷毛、刷毛、6228、 6229、6230、6231	棒3段分残存
S E529 不整円形	長径1.9 短径1.6	1.2	上段方形横板組 下段長方形横板組	0.7 0.6×0.5	繩敷	桃核	上部は棒1段分残存
S E530 不整円形	東西1.0以上 南北1.7	1.8					棒は抜き取られてい る
S E531 円形	径1.0	1.2	円形曲物積み上 げ型	0.6		漆塗、鐵釘、 桃核、6228A	曲物4段分(輪郭)を複 数。SB246より新しい
S E532 圓丸方形	東西1.7 南北2.3	1.2			曲物(深0.6)	漆塗、桃核	棒は抜き取られてい る。S A226より古い
S E533 圓丸方形	東西1.4 南北1.3	1.1	方形横板組の可 能性	1.1	曲物(深0.65)	漆塗、桃核、ひよ うたん	棒は大部分抜き取ら れている
S E534 圓丸方形	東西2.3 南北2.3	1.9	上段 方形横板組 下段 方形横板組	0.85 0.7	木炭敷	漆塗、丸る、漆、 6228、6229、6230	上段2段、下段4段
S E535 円形	径3.0	1.3					棒は抜き取られてい る
S E536 圓丸方形	東西1.3 南北1.4	1.0					棒は抜き取られてい る
S E537 圓丸方形	東西1.65 南北2.1	1.4	方形横板組 既往横板組	1.1 ×0.8		黒色土器	SB252より新しい 平安以降
S E538 円形	径1.5	1.3			曲物(深0.5)	瓦質糊	棒は抜き取られてい る、平安以降
S E539 圓丸方形	東西2.6 南北2.85	4.5	方形横板組	1.1	方形横板組(0.7) 2段	漆塗、毛、木炭、 苔塗、6133、6225	棒11段分残存、棒板に 繩敷あり。平安以降
S E540 圓丸方形	東西1.5 南北1.5	1.2			繩敷	曲物底板	棒は抜き取られてい る
S E541 圓丸方形	東西2.15 南北2.2	1.8	方形横板組 既往横板組	0.8 ×0.75		漆塗、毛、木炭、 苔塗、6133、6225	
S E542 圓丸方形	東西2.75 南北2.7	1.67	方形横板組 既往横板組	0.96 ×0.99		桃核、6133、 6225	漆塗、既往と重ねて二重にな っており、刷毛、6225の可能性あり
S E543 圓丸方形	東西2.8 南北2.55	1.45	方形横板組 既往横板組	0.92 ×0.93	繩敷	漆塗、曲物底 板	漆塗増土中より転丸 瓦631A出土
S E544 不整円形	東西1.4以上 南北1.8	1.75					漆塗が剥離されている。現 在の状態では、漆塗の可能性 あり。SB246より新しい

井戸一覧表(1)

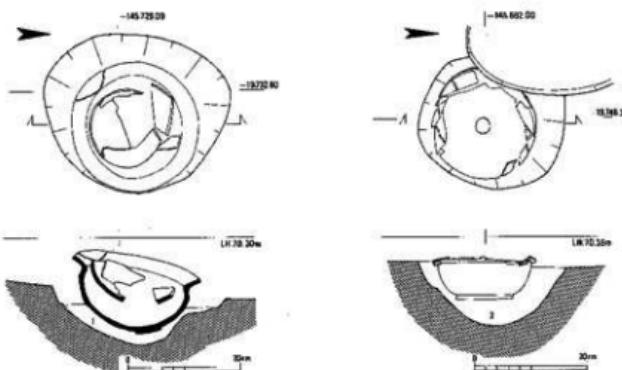
造構番号	掘形		縦 内法 (m)	水溜・溝通 装置等	主要出土遺物	備考
	平面形	半面削模 深さ (m)				
S E 545	不整円形 短径1.5	東西1.85 南北1.6	2.44	円形瓦組	0.78 ~0.87	曲物蓋、枠材 に利印平瓦 火器
S E 546	不整円形 南北1.5	東西2.3	1.6	方形檻板組 横柱接線密	0.7 ×0.71	曲物底板、枠 枠
S E 547	隅丸方形 南北1.9	東西2.25	2.07	方形檻板組	0.9	曲物（深0.6） 馬、鐵、瓦、銅、鐵 錫鋳物
S E 548	隅丸方形 南北2.4	東西3.05	1.7			2.5m型張、鉛 錫鋳物
S E 549	不整円形 南北1.88	東西1.7	1.6		礎敷	鉛錫鋳物
S E 550	隅丸方形 南北2.5	東西2.31	2.09	方形檻板組 横柱留	0.67 ×0.7	鉛錫鋳物、銅 銅錫、銅、鐵、銅 錫鋳物、銅錫、銅 錫
S E 551	不整円形 南北1.5	東西2.16	1.6			鉛は抜き取られてい る
S E 552	不整円形 南北2.0	東西2.0	1.36		鬼瓦	鉛は抜き取られてい る。平安切跡
S E 553	不整円形 南北1.44	東西1.37	1.41			554は抜いて、西側を葺かれて いる。羽根
S E 554	楕円形 短径1.69	南北1.69	1.93		蓋	SE554は蓋が抜き取られてい る。鉛錫

井戸一覧表(2)

今のところ他に例を見ない。

S K 605 東西7.3m、南北4.8m、深さ0.2mの平面が隅丸長方形の土坑である。埋土から奈良時代の土器が多量に出土した。重複関係からS B 260より古い。

S X 804・805 S X 804はS B 248の南西角すぐ内で検出した土器埋納土坑である。掘形は東西0.28m、南北0.33mの平面不整円形で、検出面からの深さは0.1mである。坑内には土師器鍋Bが埋置され、鍋の中には土師器杯Aが入れられている。鍋の内部には土が充満



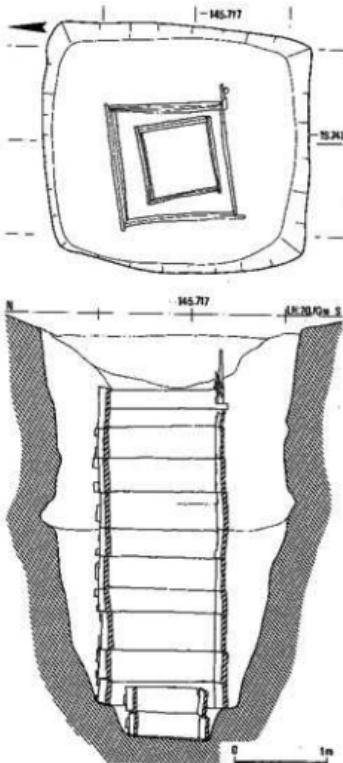
土器埋納土坑S X 804 平面・立面図 (1/10) 十孫埋納土坑S X 805 平面・立面図 (1/10)

しており、内容物はなかった。位置的にみて、SB248に伴う胞衣壺もしくは地鎮に関するものであると考えられる。SX805はSB264の南東で検出した土器埋納土坑である。掘形は、径0.25mの平面円形で、検出面からの深さは0.13mである。坑内には須恵器杯Bが須恵器杯蓋をかぶせた状態で埋置されている。内部には土が充満しており、内容物はなかった。位置的にみて、SB264に伴う胞衣壺もしくは地鎮に関するものであると考えられる。

平安時代以降の遺構 挖立柱建物9棟、掘立柱塀1条、井戸8基、土坑4基、溝4条ある。重複関係や配置から少なくとも2時期以上の変遷がある。

SB250～258・SA259 建物9棟、塀1条ある。概要は一覧表にまとめた。それぞれの建物の柱掘形からは瓦器片が出土した。また、SB252～256～258は掘形底に人頭大の石を柱の根石として据えている。

SE537～539・544～545・552～554 井戸8基ある。そのうち枠が残存していたものは3基ある。SE537は方形縦板組隅柱横桟留の井戸で、枠内からは黒色土器が出土した。SB252よりも新しい。SE538は枠が抜き取られており、掘形底の水溜部分には曲物が残っていた。抜き取り埋土から瓦器碗が出土した。SE539は東西2.6m、南北2.85m、検出面からの深さ4.5mの平面隅丸形の掘形で、掘形底に内法一辺0.7mの方形横板組の枠を二段組み、その上段には内法一辺1.1mの方形横板組の枠を11段据えている。さらにその上部には方形縦板組隅柱横桟留の枠が構築されていたことが、南東隅に残存する隅柱と縦板から推察できる。井戸の掘形からは12世紀末の瓦器が出土している。枠内は一気に埋まっており、埋土からは12世紀末の瓦器、土師器皿、木錐、斎巾、刀子柄、箸、小型の馬鍔が出土している。さらに、枠内埋土上層からは長径0.52m、短径0.33m、高さ0.19mの長円形の曲物が木製の蓋を釘で止めた上、さらに縄で縛った状態で出土した。曲物の中には木製樹1点と、平瓦4枚、軒丸瓦の瓦当1枚、15cm



井戸SE539 平面・立面図 (1/60)

火の三笠安山岩が1点納められていた。木製枠以外の瓦礫は出物を沈めるための重りとして入れた可能性が高い。木製枠は内法寸 $14.7 \times 14.7 \times 7.5$ cm、容量は 1620.675cm^3 で、その容量は近世に制定された京枠の1升に近い数値となっている。ただ、平安時代後半には律令体制の崩壊に伴い、公定枠だけでなく、私枠もかなり出回っていることから、今回出土した枠がどちらに該当するかは明らかではない。SE545は円形瓦積の井戸で、掘形底に円形に 15cm 前後の石を並べ、その上に平瓦を積み上げている。枠材に用いられた平瓦には文字瓦や焼けひずんだものが含まれていた。

SD109～112 SD109は幅 $1.0 \sim 2.5$ m、深さ 0.3 m、長さ 20m 以上の北東方向から土坑SK601に流れこむ素掘りの溝である。埋土からは瓦器、羽釜が出土した。SD110は幅 $1.8 \sim 2.8$ m、深さ 0.8 m、長さ 15.5m 以上のSK601に流れこむ南北方向の素掘りの溝で、埋土からは瓦器、羽釜が出土した。SD111は幅 0.4m 以上、深さ 0.23m 、長さ 7.2m 以上の南北方向の素掘りの溝である。埋土から多量の瓦器と瓦が出土した。SD112は幅 0.5m 以上、深さ 0.48m 、長さ 13.3m 以上の南北方向の素掘りの溝である。SD111よりも古い。これらの溝はSK601と一連の造構である可能性がある。

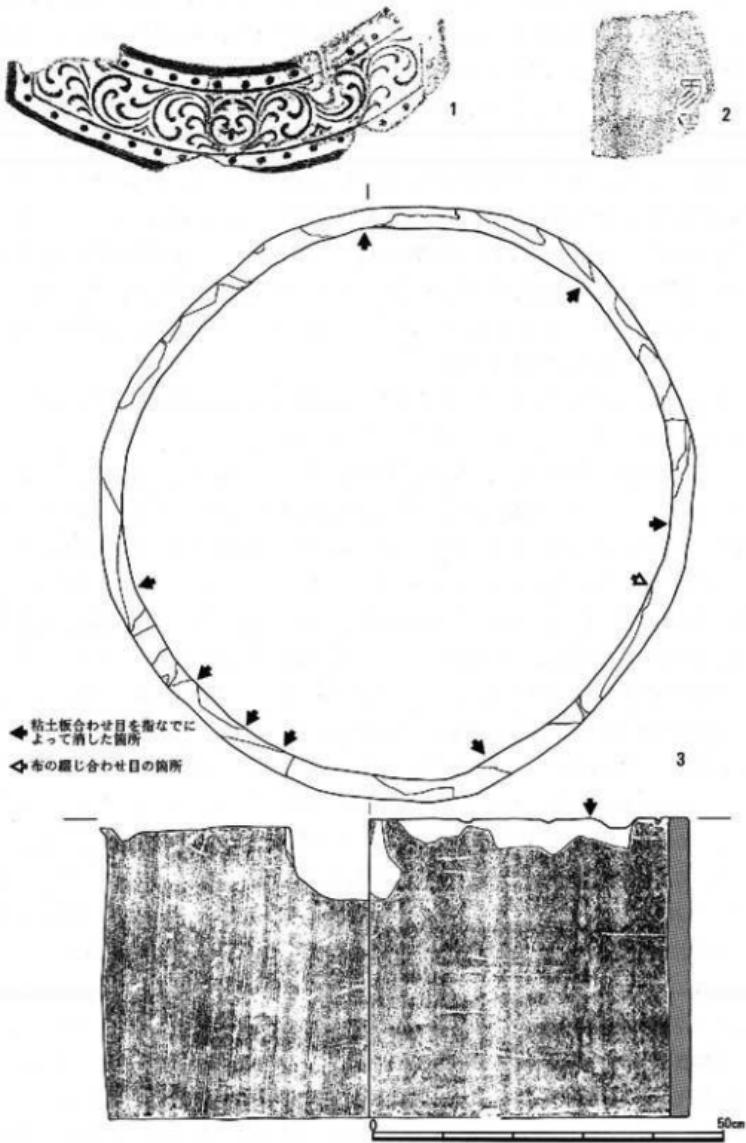
SK601～604 SK601は東西 11.0m 以上、南北 12.5m 、深さ 1.0m の平面が隅丸長方形の池状土坑である。掘形内には灰色粘土が厚く堆積しており、土坑内には常に水が溜まっていると考えられる。また、掘形底では、植物の葉脈や根の痕跡を多数確認した。SD109・110から水が土坑内に流れこむようになっており、ここで水耕栽培をしていた可能性もある。造構は発掘区よりさらに西に拡がっているが、発掘区のすぐ西には二・七坪坪境小路が想定できることから、この時代にも坪境小路が存続していたならば、小路西側溝につながっていた可能性が高い。もし、さらに七坪まで拡がっていたとするならば、その時期には坪境小路は存続していなかったということになろう。SK602は東西 6.0m 以上、南北 8.5m 以上、深さ 0.85m の土坑でSK601よりも古い。埋土の堆積状況がSK601と非常に似ていることから、同様の性格の土坑であると考えられる。SK603は東西 7.5m 、南北 3.0m 以上、深さ 0.2m の平面が隅丸長方形の土坑で、埋土からは平安時代後期の瓦器が出土した。SK604は東西 3.5m 、南北 2.5m 、深さ 0.2m の平面が隅丸長方形の土坑で、埋土からは平安時代後期の瓦器が出土した。SK603よりも古い。

(久保清子)

IV 出土遺物

出土した遺物には、奈良時代の瓦類、土器類、木製品、石製品、金属製品、平安時代の瓦類、土器類、木製品がある。以下、主なものについてのみ記す。

瓦類 瓦類は遺物整理箱で125箱分出土した。丸瓦・平瓦が大半であるが、軒丸瓦30点、軒平瓦30点、鬼瓦1点、施釉瓦2点、文字瓦1点、瓦製円筒1点、博40点がある。ここでは軒丸瓦、軒平瓦、文字瓦、施釉瓦、瓦製円筒について述べる。



出土瓦類（軒瓦、文字瓦1/4、瓦製円筒1/8）

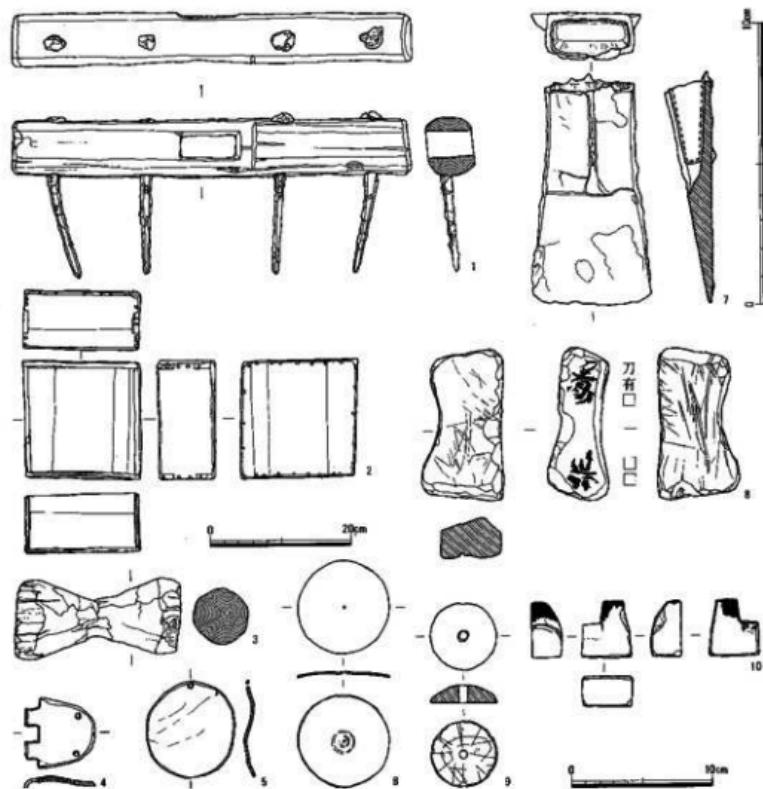
出土した軒丸瓦の内訳は、6132A 1点、6133種別不明 1点、6225A 1点、6225種別不明 1点、6282B 1点、6307B 1点、6311A 1点、法隆寺37E 1点、平安時代以降 2点、型式不明 20点である。出土した軒平瓦の内訳は、6641E 1点、6663C 1点、6663M 1点、6664D 1点、6664F 1点、6664G 1点、6664H 1点、6665A 1点、6667A 2点、6689Aa 1点、6691A 1点、6691B 1点、6711B 1点、6721C 5点、6721G 1点、6730A 1点、6732A 1点、6732K 1点、6763A 1点、平安時代以降 1点、型式不明 5点である。1は6730Aの左側半分の破片だが、從来報告されている紋様の欠損部分を補うものなので図示しておく。2は文字瓦「男□」の陽刻で、平瓦凹面の端面に近い位置に縦に並べて押捺されている。西隆寺出土資料に「男男」と横に並べて押捺されたものがあることが知られていることから、「□」の文字も「男」と思われる。なお刻印「男」はa～cの3種類あることが知られており³⁾いるが、今回のものは新資料である。

施釉瓦は2点出土した。2点共に綠釉單彩のものである。いずれも小破片であるが内1点は平瓦凹面部分に施釉したものであることがわかる。

瓦製円筒3は、径約83cm、高さ約42cm、厚さ約3cmで、一方の端部の1箇所に半円形の切り欠きがある。外面には繩叩き目が連続し、内面には布目が残る。内面には端面と垂直方向の布の縫合せ目が1箇所、端面と垂直方向の指ナデ痕が8箇所、糸切痕が確認できる。内面の指ナデ痕は布口のうえから施されている。以上の観察から、この瓦製円筒は、粘土角材から切り取った、少なくとも8枚の粘土板を、布をかぶせた円筒状器具に巻きつけ、外面を叩きしめた後、円筒状器具からはずし、内面の粘土板合わせ口を指ナデによって消して成形されたものと考えられる。半円形の切り欠きがある方の端部では歪みがみられ、外面端部付近には繩叩き目は無い。対称的に反対側では繩叩き目が端部にもあり、内面端部付近には丁寧なヨコナデが施されている。このことから成形時は、切り欠きのある方を下にしたものと考えられる。この瓦製円筒はSE523の井戸枠への転用品として出土したため、当初の用途は不明である。瓦製ではあるが、その形態から屋根上に置かれたものとは考え難い。中国の例ではあるが、丽山駄官遺跡では、本例と同様の形、大きさのものを8段積み重ね、集水槽として使用されていたと報告されている³⁾。おそらく本例も単体で使用されたものとは考え難く、同様のものを縦にいくつか積み重ねて使用されていたと思われる。その際、半円形の切り欠きを上下合わせ、そこに土管、木樋などを差し込み、集水施設として利用したものとも考えられる。

(原田憲二郎)

土器類 今回の調査で出土した土器類は、遺物整理箱で約50箱分ある。そのほとんどが奈良時代から中世にかけてのものである。ここではそのうち、SE538とSE539出土土器について記す。SE539出土土器には土師器皿(1～19)、白色土器皿(20)、瓦器皿(21～23)、瓦器小碗(24)、瓦器碗(25～27)、東播系須恵器押鉢(28)、白磁下緑釉(28)がある。いずれ

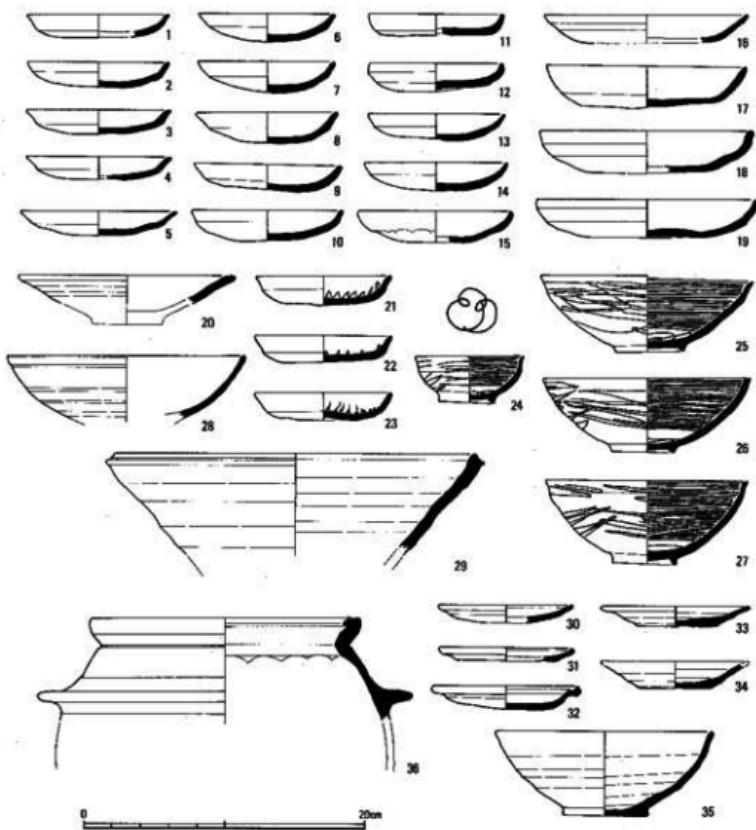


S E 538・539出土土器(1/4)

も12世紀後半から末葉のものである。S E 538出土土器には、土師器皿(30~34)、黒色土器B類椀、瓦器椀(35)、土師器釜(36)がある。これらのうち、33・34の土師器皿と35の瓦器椀の底部には糸切り痕が残る。35は丹波地方を中心に出土例が多く知られるもので、大和北部での出土例は希有である。内外面ともにヘラミガキを施さないもの。11世紀後半から末頃のものと考えられる。

(立石堅志)

その他の遺物 1は鍔の一種である。馬鍔と同形態であるが、馬に引かせるのではなく中央の柄孔に柄を通して、人が使用したと思われる。2は楕円形曲物内にあった升である。側板は厚さ4mmの板目材を井籠組みし、底板は厚さ3mmの板目材4片からなる。各片は木釘で留める。3は木鍤である。4は銅製鉗具の表金具である。5は佐理の瓔珞である。



出土木製品・金属製品・石製品（2は1／8、4・5・7は1／2、他は1／4）

6は佐波理の円盤状製品である。中央に小孔があり、その裏の両側に針金状のものを掛けた痕跡がある。蓋か何かであったものの縁を切り落としたものと思われる。7は鉄斧である。袋部内に木柄の一部が残る。8は流紋岩製砾石である。側面に習書がある。9は紡錘車の滑石製紡輪である。裏面に放射状の線刻がある。10は流紋岩製の用途不明品である。突部にはタールが薄く付着している。以上、1～3はSE539、4・8はSE534、5はSE531、6はSE525、7はSE541、9は包含層、10は柱穴から出土した。

（田林香織）

註1) 日本計量史学会編原復次氏よりご教示頂いた。

註2) 小澤毅「第3章遺物3瓦塊」「西大寺防災施設工事・発掘報告書」西大寺1990

註3) 王学理「第五章 歴史的物証(3)漆井匂井欄」「秦始皇帝陵研究」1994

(2) 平城京右京二条三坊六坪の調査 第327-5次

I 調査の目的

調査地の右京二条三坊六坪ではこれまでに第286-2次、第292-1次、第310-2・3次、第326-2次の計5次にわたる発掘調査を行なっている。今回報告するのは、六坪西端中央部から十一坪中央部にかけて調査を行なったものであるが、それぞれの坪内の様相を知ることの他、六坪と十一坪を限る西三坊坊間路の検出や、これに関連する築地の有無の確認を目的に調査を行なった。この調査のうち、西三坊坊間路と十一坪内の発掘調査の概要は、第35-1-1次調査とともに別項で報告する。

II 調査地の層相

層序は、灰黒色砂質土(旧作土)、灰白色砂質土(床土)、灰茶色砂質土、暗赤茶色砂質土、灰褐色土と続き、地表下約0.6mで、黄灰色土の地山にいたる。暗赤茶色砂質土上面から掘りこまれている溝もあるが、奈良・平安時代の遺構やこれより古い時期の遺構は、すべて黄灰色土の地山上面で検出した。地山上面の標高は概ね72.8mである。

III 検出遺構

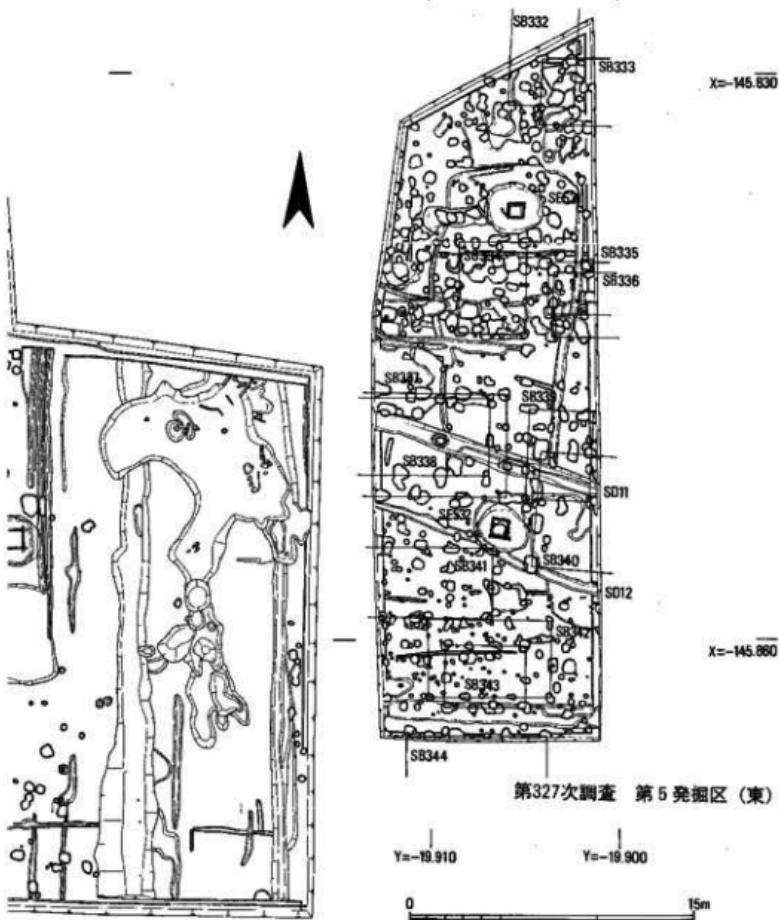
検出した遺構には、古墳時代以前の溝、奈良・平安時代の掘立柱建物、土坑、井戸がある。

古墳時代以前の遺構 素掘りの溝2条を検出した。いずれも国土方眼方位北で西に振れる斜行溝である。SD12は南東から北西方向の長さ24m以上の斜行溝である。幅1.8~2.1m、深さ0.25mである。一部、二段掘りになっている部分がある。SD13は南東から北西方向の長さ24m以上の斜行溝である。幅1.0~1.2m、深さ0.3mである。どちらの溝も遺物は出土しているものの、小片であるため時期を特定することはできないが、周辺の調査例からみて、弥生時代から古墳時代の溝であると考えられる。

奈良・平安時代の遺構 奈良・平安時代の掘立柱建物、井戸、土坑を検出している。この発掘区内では西三坊坊間路の側溝や築地の雨落ち溝はみつからなかった。後述する十一坪の成果ともあわせて、今回の発掘区内では西三坊坊間路には築地がなかったと考えられ



第327次調査 第5発掘区(東)北壁土層図 (1/100)



第327次調査 第5発掘区(東)遺構平面図 (1/300)

る。掘立柱建物は13棟検出したが、概要については一覧表にまとめた。建物の位置や重複関係から3時期以上の変遷があると考えられる。SB341・342・343からは瓦器が出土しており、平安時代の建物であることがわかる。井戸2基についても概要是一覧表にまとめている。いずれも井戸枠が残存している。SE531は方形縦板組横桟留めの井戸で、隅柱

造番	構号	棟方向	規格(桁行×梁間)	桁行全長m(尺)	梁行全長m(尺)	梁行柱間寸法(m)	梁行柱間寸法(m)	奥の出(m)	備考
S B332		南北	3以上×2	3.3	3.6(12)	1.6~1.7	1.8等間		
S B333		東西	2以上×2	2.1(7)	3.6(12)	2.1	1.8等間		
S B334		南北	3×2	4.8(16)	3.6(12)	1.5~1.6~1.7	1.8等間		
S B335		東西	2以上×2	2.1(7)	3(10)	2.1	1.6等間		
S B336		東西	2以上×2	1.8(6)	3.6(12)	1.8	1.8等間		
S B337		東西	4以上×3	6.3(21)	5.4(18)	2.1等間	1.8等間		
S B338		南北	3×2	4.8(16)	3.6(12)	1.6等間	1.8等間		
S B339		東西	4以上×2	5.4(28)	3.6(12)	1.8等間	1.8等間		
S B340		東西	3×2	6.6(22)	4.2(14)	2.1~2.4~2.1	2.1等間		
S B341		東西	3×2	4.2(14)	3.3(11)	1.2~1.5~1.5	1.5~1.8		
S B342		東西	3×2	6.3(21)	4.2(14)	2.1等間	2.1等間		平安時代
S B343		東西	3×2	4.5(15)	3.0(10)	1.5等間	1.5等間		平安時代
S B344		東西3間		7.3		2.1~2.7~2.7			平安時代

建物一観表

造番 番号	掘形			跡				上要出土遺物	備考
	平面形	平面縦横 幅(m)	深さ (m)	平面形・構造	内法 (m)	水面・底面 位置			
S E531	不整円形	東西3.1	2.4	方形縦板組構 造	0.83 ×0.83			銭貨(萬年通 宝1枚神功開 苑4枚)	Ⅲ期新段階(10世紀 前半)
S E532	不整円形	東西2.6	2.1	方形縦板組構 造	1.3× 9.4	曲物		黒色土器B類	Ⅲ期古段階(9世紀 中頃)

井戸一観表

がないものである。縦板はそれぞれの面に14~17枚使われている。枠材の長さは0.6~1.8mである。横桟は3段残存していた。S E532は方形縦板組隅柱横桟留めの井戸で、縦板は西が最も少なく13枚で、東が21枚、南が24枚、北が18枚使用している。枠材の長さは0.3~0.9mである。横桟は3段残存していた。底には径0.63m、深さ0.42mの曲物を掘えていて、井戸の底はすり鉢状になっている。この2つの井戸は山上遺物から平安時代初頭から前半のものであることがわかる。

IV 出土遺物

瓦類には丸瓦・平瓦・軒丸瓦・軒平瓦・埠がある。埠瓦は14点出土した。軒丸瓦の内訳は6284C 1点、6282B b 1点、6301B 1点、6282B 1点、型式不明 2点である。軒平瓦の内訳は6641E 2点、6685A 2点、6647D 1点、6691A 1点、6721E 1点、型式不明 1点である。この内S E531掘形から6284C・6641Eが、S E532掘形から6641Eが、S B337東妻の柱掘形から6271Eが出土した。土器類でまとまつたものに、S E531、532から出土したものがある。S E531の枠内からは上師器、黒色土器、須恵器が出土し、南都Ⅱ期新段階(10世紀前半)に位置付けられる。S E532の掘形から上師器、黒色土器、須恵器が、枠内から上師器、須恵器、縄輪陶器が出土した。掘形の土器は南都Ⅰ期新段階(9世紀前半)、枠内の土器は南都Ⅱ期古段階(9世紀中頃)に位置付けられる。錢貨としてはS E531の井戸枠内から、萬年通宝1枚と神功開寶4枚が出土した。
(池田裕英・原田憲二郎)

(3) 平城京右京二条三坊九坪の調査 第327-2・4次

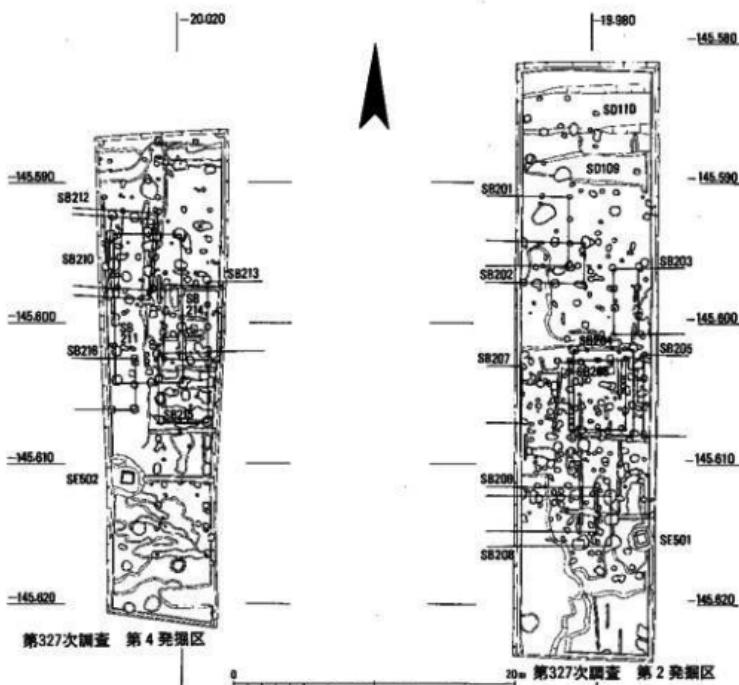
I 調査の目的

右京二条三坊九坪では、坪南辺の様相の確認を目的として、第327次第2・4発掘区の2ヶ所の発掘区を設定し調査を実施した。

II 調査地の地形と層相

調査地は西から東へ延びる微高地の北斜面に位置する。基本的な層序は、黒灰色土（作上）、灰色砂質土、黄灰褐色土と続き、現地表下0.3~0.5mで淡黄灰色粘土もしくは、黄灰色砂の地山に達する。奈良時代の遺構面はこの地山上面で、その標高は、第2発掘区で70.6~70.9m、第4発掘区で71.4~71.6mである。なお、遺構はすべてこの地山上面で検出した。

III 検出遺構



第327次調査 第2・4発掘区 遺構平面図 (1/400)

奈良時代の掘立柱建物16棟（S B201～216）、井戸2基（S E501・502）、溝1条（S D109）と旧河道（S D110）がある。これらの遺構は、重複関係から3時期以上の変遷がある。なお、掘立柱建物、井戸の概要については一覧表にまとめた。

S D109・110 S D109は幅3.0～1.0m、深さ0.2mの東西方向の素掘りの溝である。埋土から奈良時代の土器が出土した。S D110は幅5.2m以上、深さ2.2m以上の北西方向から南東へ流れる旧河道の南岸である。埋土からは、奈良時代の土器と近世の陶磁器や瓦片が少量出土した。

九・十坪坪塙小路は、発掘区内では確認されなかった。恐らく、今回の発掘区と第327次第3発掘区との間に位置するものと想定できる。
(久保清子)

IV 出土遺物

奈良時代の瓦類、土器類、木製品等があるが、今回は瓦類についてのみ報告する。

出土瓦類の大半は丸瓦、平瓦で、軒丸瓦8点、軒平瓦3点、埠1点を含む。その内訳は軒丸瓦6225種別不明1点、6278種別不明1点、6281B2点、6307B1点、形式不明3点である。軒平瓦の内訳は6641A1点、6663E1点、形式不明1点である。この内、6307BはS E502から、6663EはS B202から出土した。
(原田憲二郎)

遺構番号	棟方向	規格(桁行×梁間)	桁行全長m(尺)	梁行全長m(尺)	突行柱間寸法(m)	梁行柱間寸法(m)	南北の出(m)	備考
S B201	南北	3×2	5.85(19.5)	3.9(13)	1.95	1.95		
S B202	東西	3以上×1以上	3.9(13)	3.0(12)	1.95			妻柱未検出、軒瓦6663E出土
S B203	南北	3×2以上	4.65(15.5)	1.8(6)以上	1.5-1.65		1.8	西廻付建物か?
S B204	南北	3×2	5.85(19.5)	4.2(21)	1.95	2.1		S B206より新しい
S B205	南北	3×1以上	5.85(19.5)		1.95			
S B206	南北	3×2	4.95(16.5)	3.9(13)	1.65	1.95		S B204より古い
S B207	東西	1以上×2		3.9(13)		1.95		
S B208	東西	3以上×2	5.1(17)以上	3.3(11)	2.55	1.65		
S B209	東西	3以上×2	4.7(17)以上	3.3(11)	2.1	1.65		
S B210	南北	3×2以上	5.85(19.5)	2.7(9)以上			2.7	東廻付建物、S B211より古い
S B211	南北	5×2	10.5(35)	4.8(16)	2.1	2.4		S B210・212より新しい
S B212	南北	3×2以上	5.55(18.5)	2.4(8)以上			2.4	東廻付建物か? S B211より古い
S B213	南北	3×1以上	4.95(16.5)		1.65			S B215より古い
S B214	南北	3×2	4.95(16.5)	4.2(21)	1.65	2.1		
S B215	南北	3×2	4.95(16.5)	3.3(11)	1.65	1.65		S B213より新しい
S B216	東西	2以上×2	1.8(6)以上	3.6(12)	1.8	1.8		

建物一覧表

遺構番号	断面形		柱			主要出土遺物	備考	
	平面形	平面規模(m)	深さ(m)	平面形・構造	内法(m)	水槽・溝通装置等		
S E501	丸方形	東西1.85以上 南北1.8	1.5	方形縦板組構柱	0.6	繩敷	縄、曲物底枚、梯形、墨書き土器	隣柱2本は長押の転用の可能性あり
	東西2.5cm	南北2.8	3.0		0.7		刀子、番傘、籌、曲物、防錆剤、軒丸瓦6307B	
S E502	不整方形	東西2.5cm	3.0	方形縦板組構柱	0.7		埋土中に棒錆、ヒョウタン、クルミ殻含む	
	南北2.8			横残柱				

井戸一覧表

(4) 平城京右京二条三坊十坪の調査 第327-3次

I 調査の目的

調査地は右京二条三坊十坪の北東部に位置し、第317次調査北発掘区の西側に隣接している。十坪としては2度目の調査である。今回の調査は、前回の調査結果とあわせ、十坪内の遺構の把握を目的として実施した。

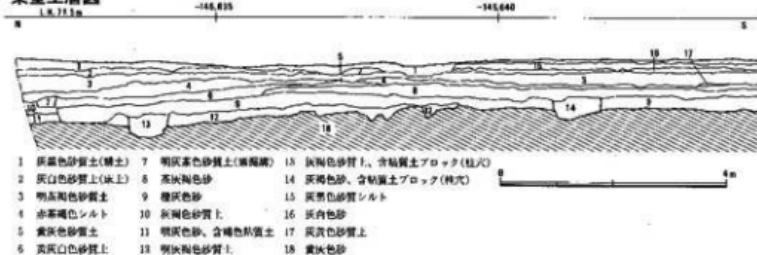
II 調査地の地形と層相

調査地は東へ少しづつ低くなる微高地にある。発掘区南西部の層序は作土(0.3m)の下に部分的に床土(0.1m)、茶灰色土(0.1m)をはさみ、黄灰色砂の地山に至る。地山上面の標高は71.4mである。北東部の層序は作土と床土の下に約0.9mの堆積土があり、明灰色砂または暗灰茶色土の地山に達する。地山上面の標高は70.4mで、南西部との差は1.0mである。奈良時代の遺構面は地山上面である。

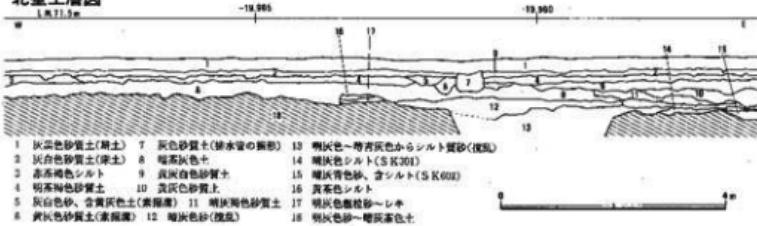
III 検出遺構

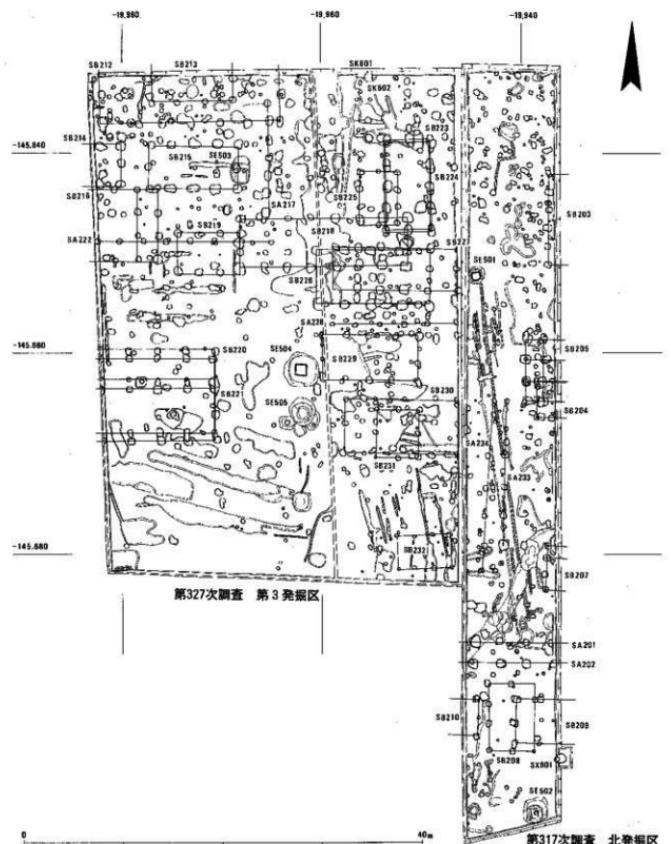
検出した遺構には奈良～平安時代初頭の掘立柱建物18棟、掘立柱塀5条、井戸3基、土坑2基がある。以下、主なものについて記す。なお掘立柱建物、掘立柱塀、井戸の概要は観表にまとめた。

東壁土層図



北壁土層図





第327次調査 第3発振区 调査平面図 (1/400)

S A217 発掘区北側のほぼ中央で検出した南北6間の掘立柱塀である。第292-1次調査で検出した六・十一坪境小路（S F0611）道路心から西へ約42mのところにあるので、坪で東西に三分割した場合の、東から約1/3に位置すると想われる。

S A222 発掘区北西部で検出した東西8間以上の掘立柱塀である。S A217と接続してS B214、215の周囲をL字形に区画していた可能性がある。

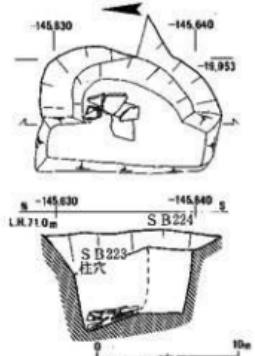
S A228 発掘区西側中央で検出した東西5間の掘立柱塀である。S B227と柱筋がそろうので南廁の可能性もある。しかし、S B227の南側柱列との距離が開きすぎるので、掘立柱塀として考える。

S A233・234 第317次調査地北発掘区で、東廁付南北棟建物S B206の廁として報告していたが、今回の発掘区内で身舎部分を検出できなかったので、掘立柱塀2条に改める。

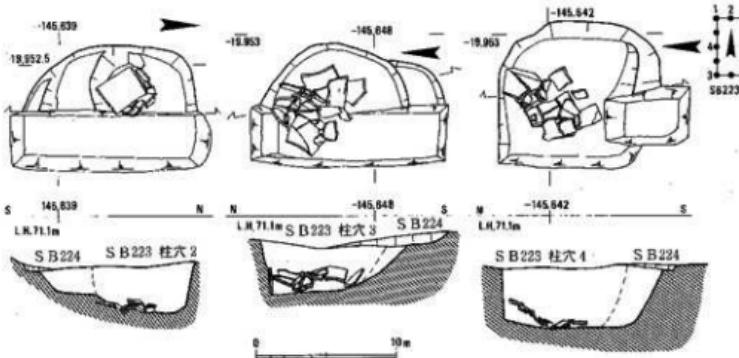
S B215 衍行4間、梁間2間の東西棟建物である。西側のS B214とは北側柱列の筋が揃うので同じ時期の建物である可能性がある。

S B220・221 発掘区南西部で重複して検出した衍行4間以上、梁間3間の北廁付東西棟建物である。2棟は衍行と梁間、それぞれの柱間もほぼ等しい。重複関係からS B220はS B221の廃絶後、少し北にずれた位置で建て替えた建物である。S B220の北側柱列の東から1番目の柱掘形から、軒丸瓦6301Bが1点出土している。

S B223・224 発掘区北東部で重複して検出した衍行4間、梁間2間の南北棟建物である。ほぼ同じ位置で建



建物S B223柱穴1平面図・立面図(1/40)



建物S B223 柱穴2・3・4 平面・立面図(1/40)

て替えをしている。北側のSB 224は北側妻柱の掘形と、西側柱列の北から1、3、4、5番目の柱掘形から柱の礎板にしたと思われる平瓦、丸瓦が出土した。出土状況を図示した柱穴は模式図と番号で示した。

S E 503 発掘区
北東部で検出した井戸である。井戸枠は抜き取られていてその構造は不明であるが、掘削中に薄い板材が出土しているので縦板組の井戸であった可能性がある。検出時の平面形は楕円形であるが、井戸枠を抜き取るときに北側から掘った掘形のため本来の井戸掘形は円形に近い形をしていたと思われる。奈良時代前半の須恵器平瓶、土師器杯などが出土している。

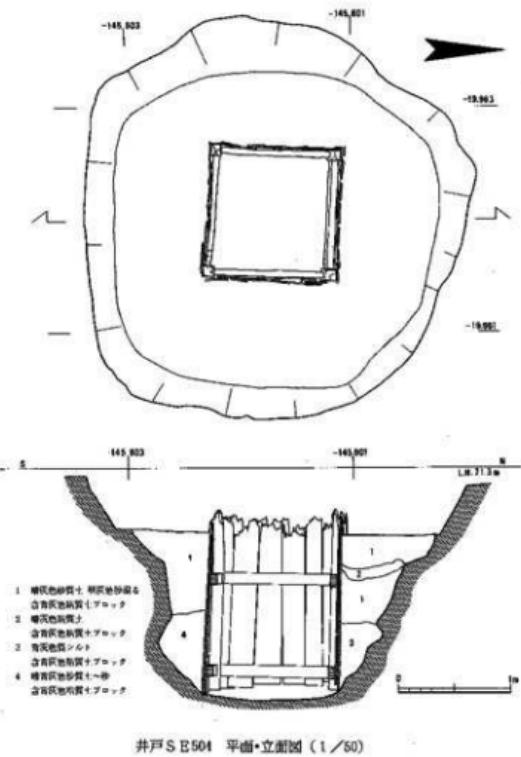
S E 504 発掘区のほぼ中央で検出した方形縦板組隅柱横桟留めの井戸である。枠内から南部I期中段階（8世紀末～9世紀初頭）の土師器、須恵器と軒丸瓦6313A、6252E、6133Oが各1点出土した。

S E 505 S E 504のすぐ南で検出した井戸である。S E 503同様に抜き取られていてその構造は不明である。出土遺物は少なかったが、軒丸瓦6225Lが1点出土している。

(細川富貴子)

IV 出土遺物

瓦類 出土瓦類の総量は遺物整理箱15箱である。大半は丸瓦・平瓦であるが軒丸瓦8点、軒平瓦1点、埠1点を含む。ここでは軒瓦について報告する。軒丸瓦の内訳は6133O



井戸S E 504 平面・立面図 (1/50)

通 番 号	株 方 向	基 礎 形 状	行 列 数	行 列 間 (行 列 × 列 間)	行 列 全 長 m (尺)	梁 行 全 長 m (尺)	梁 行 柱 間 寸 法 (m)	梁 行 柱 間 寸 法 (m)	廊 の 出 (m)	備 考
S B212	東西	5 × 2 以上	18(60)	5.4以上	3.0等間	2.7等間				
S B213	東西	3 × 1 以上	8.1(27)	2.4以上	24-27-30	2.4				
S B214	東西	1 以上 × 2	2.1以上	4.2(14)	2.1	2.1等間				S E203より新しい、S B216より古い
S B215	東西	4 × 2	9.0(30)	4.2(14)	11-14-11-24	2.1等間				S E203より新しい、S B216より古い
S B216	東西	2 以上 × 2	4.2以上	7.2(24)	2.1等間	2.4等間	東2.1			東面付
S A217	南北	6	11.4(38)	3.6(12)	18-23-18-18					S B218より新しい
S B218	東西	7 × 2	16.8(56)	4.8(16)	2.4等間	2.4等間				北面付、柱頭部に墨書き
S B219	東西	3 × 2	6.3(21)	4.2(14)	2.1等間	2.1等間				S B218より古い
S B220	東西	4 以上 × 3	11.4以上	8.4(28)	17-18-17-18	3.0-24-3.0	北3.0			北面付
S B221	東西	4 以上 × 3	11.4以上	8.1(27)	18-22-13-27	3.0-27-24	北3.0			北面付、S B220より古い
S A222	東西	8 以上	17.4(58)	5.4(18)	24-24-24-24					S B218より古い
S B223	南北	4 × 2	9.0(30)	4.5(15)	17-21-21-21	2.4-2.1				S B218より新しい、瓦を被覆する柱穴がある
S B224	南北	4 × 2	9.0(30)	4.5(15)	21-24-18-21	2.1-2.4				S B223より古い
S B225	南北	3 × 2	5.4(18)	3.9(13)	1.8等間	1.8-2.1				S B218・S B226より古い
S B226	東西	4 × 2	11.4(38)	5.4(18)	10-14-10-10	3.0-2.4				S B227より新しい
S B227	東西	5 × 3	12.3(41)	4.2(14)	21444432	2.1等間	南計			S B218より古い、東西両面付
S A228	東西	5	12.6(42)	4.2(14)	21444432					
S B229	東西	4 × 2	9.6(32)	4.5(15)	2.4等間	2.7-1.8				
S B230	東西	5 × 2	11.4(38)	5.4(18)	21444432	2.7等間				
S B231	南北	2 × 2	4.8(16)	4.2(14)	2.4等間	2.1等間				
S B232	東西	4 × 1 以上	5.4(18)	3.3(11)	1.8等間	3.3				
S A233	南北	6	14.7(49)	5.4(18)	21444432					第1次北側(S B208を表めて、第2条とする)
S A234	南北	5	17.1(57)	5.4(18)	21444432					

建物一覧表

造構 番 号	概 形		枠				主要出土遺物	備 考
	半面形	平面規模 (m)	深さ (m)	平面形・構造	内法 (m)	水槽・煙道 装置等		
S E503	円形か 南北1.6	1.94	2.15	砾板組か				柱は北側から抜き取 られていた。薄い板 材のみ残る
S E504	不整円形 南北3.42	3.55	1.97	方形縦板組柱 横残留	0.95 × 0.95		高足三足高足 人形、猪頭、人頭、 人頭、軒丸瓦	
S E505	不整円形 南北2.86	2.6	3.19	不明			軒丸瓦	柱は抜き取られてい る

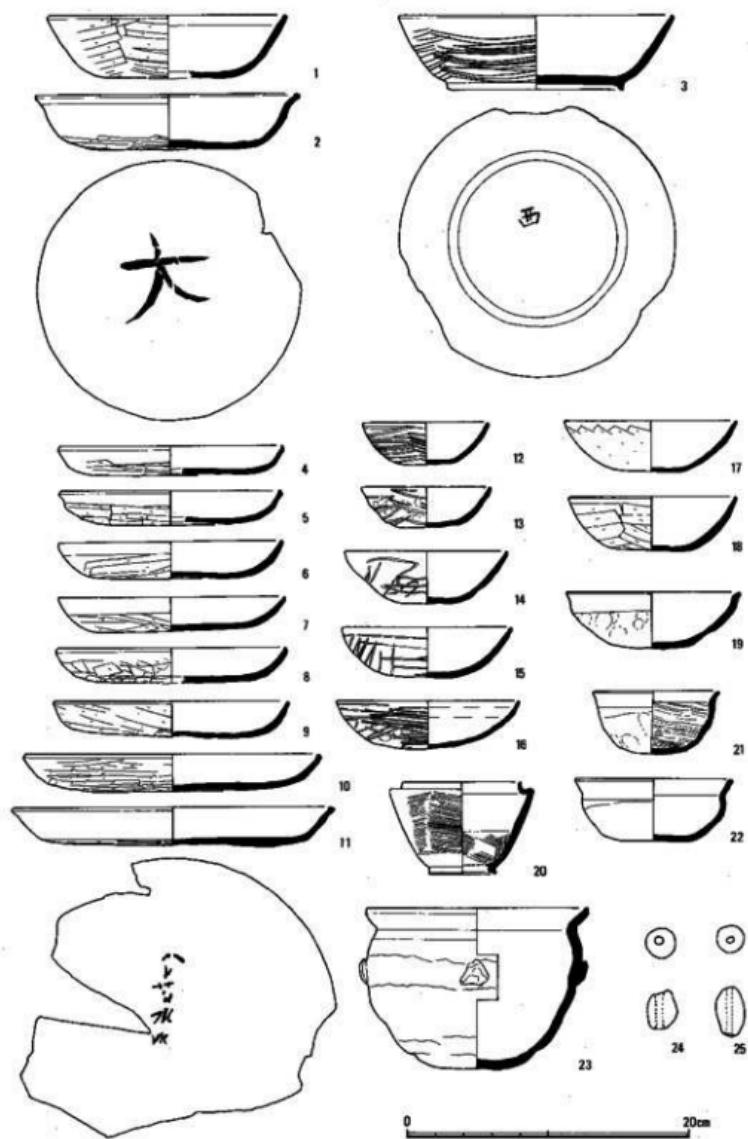
井戸一覧表

1点6255E 1点、6255L 1点、6301B 2点、6313A 1点、型式不明 1点である。軒平瓦は6732Oである。なお、遺構から出土したものは検出遺構本文中に明記してある。

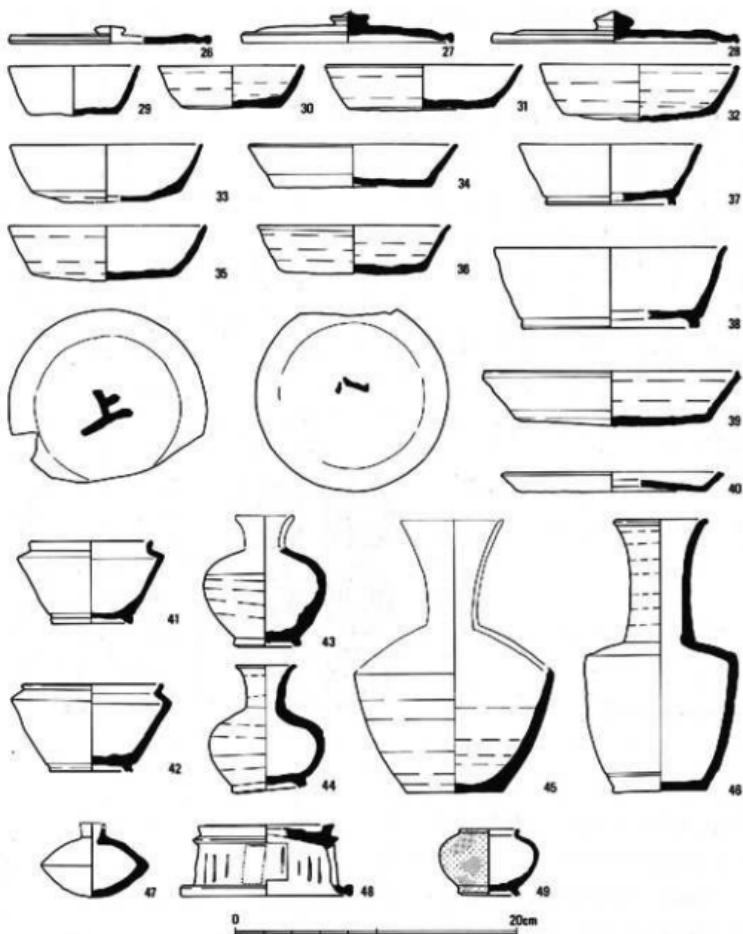
(原田憲二郎)

土器類 遺物整理箱で41箱分の遺物が出土した。今回は S E504枠内出土のものについて報告する。図示したものは1~23が土師器、24~25が土鍋、26~37が須恵器、38が硯、39が奈良三彩壺A(巻頭図版)である。上師器食器類の調整はC手法のものが多いがミガキのみられるもの(12~16)がある。須恵器食器類の調整はいずれも底部外面がヘラカリの後、不定方向のナデ、口縁部が回転ナデである。底部外面に墨書きのあるものがあり、2が「大」、3が「西」、11が「□□□□」、35が「上」、36が「八」である。これらの上器は、南部1期中段階(8世紀末~9世紀初)のものと考えられる。(池田裕英)

その他の遺物 S E504から出土した木製品、錢貨、木簡の主なものについて述べる。特にことわりのないものは井戸枠内から出土した。1~8はAⅢ型式の検扁である。要で

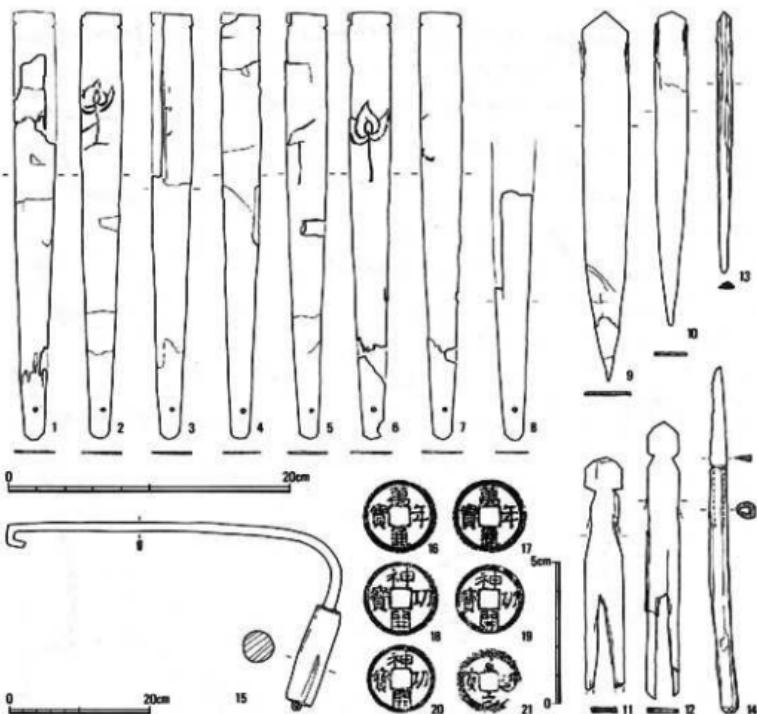


井戸S-504出土土器・土製品(1) (1/4)



井戸S E501出土土器・土製品② (1/4)

1つに綴じ、綴り目孔を開けて綴じ紐を通すのではなく、末の両側をV字に切り欠いて綴じ紐をかけ、綴り合わせるものである。8枚とも同一個体のものと思われる。片面に蓮華の墨画がある。9・10はC III型式の斎串である。11・12は人形である。11はA 1 a型式で、股をV字形に切り欠く。12はA 1 b型式で、足先から切れ目を入れ、股で折ってコの字形にする。ともに墨書はない。13は留針か、針耳はないが木針であると思われる。先へ向けてやや扁平に削り、先端は丸くする。14は刀子である。木柄と刀身とは別々の状態で、出



井戸S E504出土木製品・金属製品・銭貨（1～14は1／4、15は1／8、16～21は1／2）

土した。15は鍔（やく）である。倉庫などで同様のものも使用しているところがある。木柄は、鉄製の勾状部から外れて出土した。銭貨は萬年通寶2枚（16・17）、神功開寶7枚（18～20）、井戸の埋土上部から北宋錢の至同元寶（21）が出土した。木筒は墨書きのあるものは全部で7点出土している。ほとんどが破片であるが、その中で文字が判読できるもの3点について篆文を記す。一の「紫菜」とは海苔のことである。二は摺形から出土した。

（田林香織）

一 〔紫菜一斗中〕	卷口(口)六	(174)×(18)×4 180
三	長方形	□
二	□	□
・	□	□
・	□	□
・	□	□
真国	□	□
卷口(口)六	□	□
長方形	□	□

(5) 平城京右京二条三坊十一坪の調査 第327-5・351-1次

I 調査の目的

十一坪では平成6年度に坪の北東隅にあたる位置で第292-1・2次調査を行なって、古墳時代の溝や六坪と十一坪を限る西三坊坊間路とその両側溝、奈良・平安時代の掘立柱建物、井戸などを検出している。今回の調査地は十一坪の東辺部から中央部にあたり、調査地東端には西二坊坊間路が想定され、これと両側溝の検出、坪内の宅地利用の解明を主目的に調査を行なった。

II 調査地の地形と層相

調査地は、西から東に緩やかに下る微高地上に位置している。また、調査地は水田化のための段差がみられ、南から北に向かって低くなっている。発掘区の基本的な層序は黒灰色土(旧作土)、灰白色土、褐灰色土と続き、黄褐色粘土の地山となる。発掘区内の標高は南西部が最も高く、73.9mで、最も低い北東部で72.7mである。遺構は全てこの地上面で検出した。

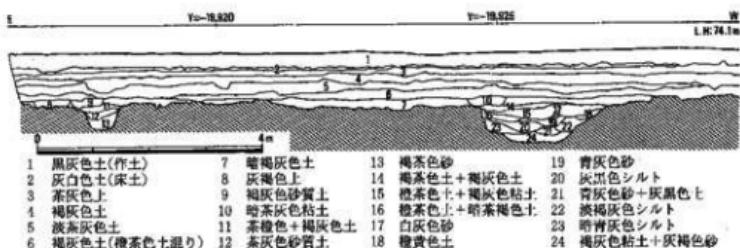
III 検出遺構

主な検出遺構には古墳時代以前の溝、奈良～平安時代の道路、溝、掘立柱建物、掘立柱塀、井戸、土坑がある。

古墳時代以前の遺構 溝4条(S D02～05)を検出した。S D02は幅0.3～0.6mで、深さ0.2mの断面がU字形の素掘りの溝である。六坪で検出したS D11から続くもので、第292-2次調査で検出したS D01とつながることが明らかとなった。S D04は幅0.5～1.0m、深さ0.2～0.3mの素掘りの溝である。埋土から川西宏幸編年V期の円筒埴輪が出土した。

奈良・平安時代の遺構 道路2条、道路側溝4条、掘立柱建物41棟、掘立柱塀3条、井戸7基、土坑がある。なお、掘立柱建物・塀、井戸については一覧表にまとめた。

S F0611 西三坊坊間路である。路面幅は約6mで、側溝心心間では約8mである。第



第327次調査 第5発掘区南壁上層図 (1/100)

292-1・2次調査で、この道路は丘陵を南北に切り通して造ったものであることが明らかとなつたが、本調査でもこのことを追認できた。また、北半部には灰褐色砂の堆積がみられ、道路が廃絶した後に流路になっていたことも確認できた。路心の國土座標はX = -145,870.000、Y = -19,921.600である。

S D 103 西三坊間路西側溝である。幅1.4~3.0m、深さ0.2~0.7mである。溝底は南から北に向かって下り勾配である。埋土から奈良時代から平安時代にかけての土器、錢貨などが出土した。溝心の國土座標はX = -145,870.000、Y = -19,926.100である。

S D 104 西一坊間路東側溝である。幅0.5~0.8m、深さ0.1~0.5mである。北半部では流路時の侵食によるものか、溝は削平されてしまっていた。溝底は南から北に向かって下り勾配である。埋土から奈良時代から平安時代にかけての土器が出土した。溝心の國土座標はX = -145,870.000、Y = -19,918.200である。

S F 901・S D 107・108・109 S D 107は幅0.3~1.0m、深さ0.2m、S D 108は幅0.3~1.5m、深さ0.2mである。いずれの溝からも奈良時代の土器が出土し、この溝間が坪内道路S F 901（幅1.5~1.8m）となり、S D 107・108はその南北両側溝の可能性が考えられるが、327-5次調査区では検出できなかった。S D 107心は第317次調査で確認した二条条間路南側溝S D 102心から南に約80mで、ほぼ270尺の位置にある。S D 109は幅0.4m、深さ0.1mで、S D 108と一連の溝と思われる。西三坊間路西側溝S D 103心から東に約60mで、ほぼ200尺の位置にあるが、本調査区内ではこれと対になる溝は検出できなかった。

S A 266~268 掘立柱跡3条を検出した。S A 267は部分的にS B 242と柱筋を彫る。

S B 225~265 掘立柱建物41棟を検出した。これらのうち、S B 258・261・262からは瓦器が出土していて、平安時代の建物と考えられる。建物は調査区中央からやや南側にかけて、廂付東西棟を配し、南端部に南北棟を配する傾向がみられる。建物の位置や重複関係から5時期以上の変遷があると思われる。

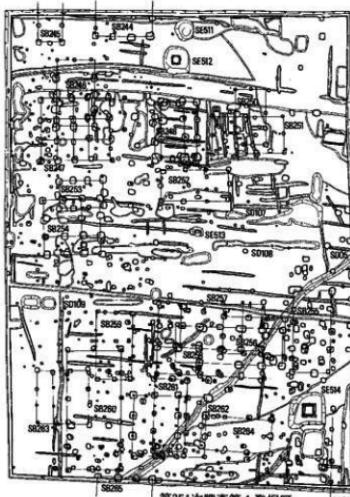
S E 508~514 井戸7基を検出した。S E 508・509・512・513・514は、S E 512が隅柱を欠く他は、方形縦板組隅柱横枠留めの井戸枠である。S E 510は二重の井戸枠で、外側は方形縦板組隅柱横枠留め、内側が方形横板組である。内側の枠は最下段に角材を井桁状に組み、その上に横板をのせている。S E 511・513の井戸枠は抜き取られていたが、S E 511は、まことに曲物のみが残存した。これらの井戸の時期は一覧表に記した。（池田裕英）

IV 出土遺物

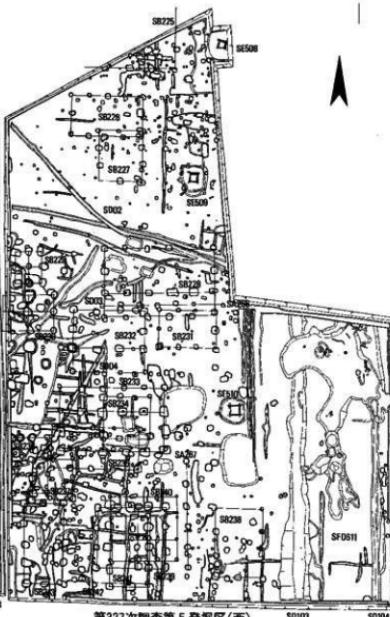
瓦罐類 出土した瓦類には丸瓦・平瓦・軒丸瓦・軒平瓦・埠・文字瓦がある。ここでは軒瓦・文字瓦について述べる。軒瓦は59点出土した。大半は西三坊間路両側溝から出土した。軒丸瓦の内訳は6012B 1点、6132B 1点、6133D b 1点、6133D 1点、6133Q 1点、6133R 1点、6133種別不明1点、6134A 2点、6225種別不明1点、6236D 1点、6273種別



X=145.830



X=145.870



Y=10.990

0

Y=10.920

40m

第327次調査第5発掘区 第351次調査第1発掘区遺構平面図 (1/400)

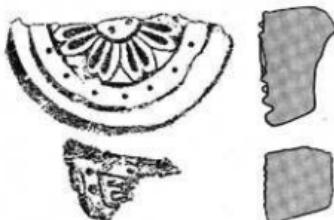
造構番号	壁構成方向	梁構成方向	桁行全長m(尺)	梁行全長m(尺)	梁間柱間寸法(m)	梁行柱間寸法(m)	南北山高(m)	備考
S-B225	東西南	3以上×1以上	7.8(24)	2.1(7)	2.4等間	4.7等間		
S-B226	東西	4×2	7.2(24)	4.2(14)	1.6等間	2.1等間		
S-B227	南北	3×2	5.4(18)	4.2(14)	1.8等間	2.1等間		
S-B228	東西	5×3	10.5(35)	6.3(21)	2.1等間	2.1等間	2.1	南面付
S-B229	西北	2×2	2.4(8)	3.0(10)	1.2等間	1.8等間		経柱建物
S-B230	東西	2×2	4.5(15)	3.6(12)	1.8-2.7	1.8等間		経柱建物
S-B231	東西	3×2	5.4(18)	3.6(12)	1.8等間	1.8等間		
S-B232	東西	3×3	7.2(24)	3.6(12)	2.1等間	1.8等間	2.4	北側付、開口切りあり
S-B233	東西	5×3	10.5(35)	6.0(20)	2.1等間	1.8等間		
S-B234	東西	4×2	6.0(20)	6.3(21)	1.5等間	2.1等間	2.1	北面付
S-B235	東西	4×2	9.0(30)	4.2(14)	2.1等間	2.1等間		
S-B236	南北	3×2	5.4(18)	3.6(12)	1.8等間	1.8等間		
S-B237		2×2	4.2(14)	4.2(14)	2.1等間	2.1等間		経柱建物
S-B238	南北	3×2	7.2(24)	4.8(16)	2.4等間	2.4等間		
S-B239	南北	3×3	6.3(21)	6.4(23)	2.1等間	2.1	2.7	東面付
S-B240	南北	3×3	6.6(22)	6.3(21)	2.1等間	2.1	2.1	西面付
S-B241	南北	4×2	8.4(28)	4.2(12)	2.1等間	2.1等間		S-B242と南北妻を擴える
S-B242	南北	4×2	8.4(28)	4.2(12)	2.1等間	2.1等間		S-B241と南北妻を擴える
S-B243	南北	3×3	6.6(22)	5.1(18)	2.1等間	1.8	東面付	
S-B244	南北	3×2以上	5.1(18)	1.6(6)	1.5等間	1.5等間		
S-B245	南北	2以上×2	3.0(10)	2.4(8)	1.5等間	1.2等間		
S-B246	南北	4×2	5.1(18)	4.2(14)	1.8等間	2.1等間		
S-B247	南北	3×4	6.3(21)	6.6(22)	2.1等間	1.5等間	2.1	東面付妻柱建物、床梁か
S-B248	南北	3×2	5.1(18)	3.6(12)	1.8等間	1.8等間		S-B249より古い
S-B249	南北	3×2	5.3(21)	3.0(10)	2.1等間	1.5等間		S-B248の途に替えか
S-B250	南北	3×2	5.4(18)	3.6(12)	2.1等間	1.8等間		
S-B251	東西	3×2	8.1(27)	3.6(12)	2.7等間	1.8等間		
S-B252	東西	3×2	6.3(21)	3.0(10)	2.1等間	1.5等間		
S-B253	東西	3×2	4.5(15)	3.0(10)	1.5等間	1.5等間		
S-B254		3×3	5.4(18)	5.4(18)	1.8等間	1.8等間	1.8	南もしくは東面付、両仕切りあり
S-B255	南北	4×2	8.4(28)	3.6(18)	2.1等間	1.8等間		
S-B256	東西	3×2	5.7(19)	3.6(18)	2.1等間	1.8等間		
S-B257	東西	3×2	10.5(35)	7.2(24)	2.1等間	2.4等間		南北面付、東・西・南北付
S-B258	東西	5×2	10.5(35)	3.6(18)	2.1等間	1.8等間	2.1	西面付、平安時代
S-B259	南北	3×2	6.6(22)	3.6(18)	2.1等間	1.8等間		
S-B260	南北	5×2	12(40)	5.4(19)	2.4等間	2.7等間		
S-B261	南北	4×2	7.2(24)	3.0(10)	1.8等間	1.6等間		平安時代
S-B262	南北	3×3	6.3(21)	7.2(26)	2.1等間	東・西・南北付	2.7	東面付、平安時代
S-B263	南北	3×3	5.4(18)	5.4(18)	1.8等間	1.8等間	1.8	西面付
S-B264	東西	2×2	4.8(16)	3.6(12)	2.1等間	1.8等間		
S-B265	東西	3間		5.4(18)	(1.8等間)			
S-A266	東西	5	9.0(30)		1.8等間			
S-A267	南北	5	10.5(35)		2.1等間			
S-A268	南北	4以上	7.4(28)		2-L-1-L-2-L			

建物・屏一覧表

造構番号	概形		枠			主要出土遺物	備考	
	平面形	平面樹高(m)	深さ(m)	平面形・構造	内法(m)	水槽・透造装置等		
S-E508	隅丸方形	東西2.2以上 南北3.2以上	3.1	方形縦板組隅柱 横线条	0.6		土師器、須恵器、瓦、磁石	I期新設階(9世紀中頃)
S-E509	隅丸方形	東西2.6 南北2.5	3.4	方形縦板組隅柱 横线条	0.8		土師器、須恵器、瓦、刀子	II期新設階(10世紀前半)
S-E510	不整四形	東西3.1 南北2.7	3.6	外側 方形縦板組 内側 方形横板組	0.9		土師器、須恵器、器	垂下段に角柱を外側に張り、 その上に横板を置く、I期中 設階(9世紀～10世紀後半)
S-E511	円形	東西1.7 南北2.0	0.8	柱は抜き取られ ている。まなこ の曲物のみ残存	曲物(深さ0.8 深さ0.1)		土師器、須恵器	奈良時代
S-E512	不整円形	東西2.6 南北2.8	1.2	方形縦板組横板 組	0.8	曲物(柱0.65 深さ0.4)	土師器、須恵器、瓦	I期新設階～II期古 設階(9世紀前～中 後)
S-E513	隅丸方形	東西1.3 南北0.9	1.5	方形縦板組(柱 の大部分は抜き 取られている)			土師器、須恵器	清水回天で透せず、 奈良時代
S-E514	隅丸方形	東西3.6 南北3.1	2.2	内・外とも方形 縦板組隅柱横板 組	外 1.2 内 0.85		土師器、須恵器、 瓦	II期古設階(9世紀 中頃)、井戸柱は原 木材の転用

井戸一覧表

不明1点、6275A 1点、6281A 1点、6282G 2点、6284D 1点、6285B 1点、6307B 1点、6313H 1点、6316D c 1点、6316G 1点、軒丸瓦新型式(1)1点、平安以降1点、型式不明11点である。1は、複弁蓮華紋軒丸瓦で、6316Fに似るが、蓮子、蓮弁、珠紋の位置関係が合わず異範である。軒平瓦の内訳は6641E 2点、6664D 1点、6664



出土軒瓦新型式(1/4)

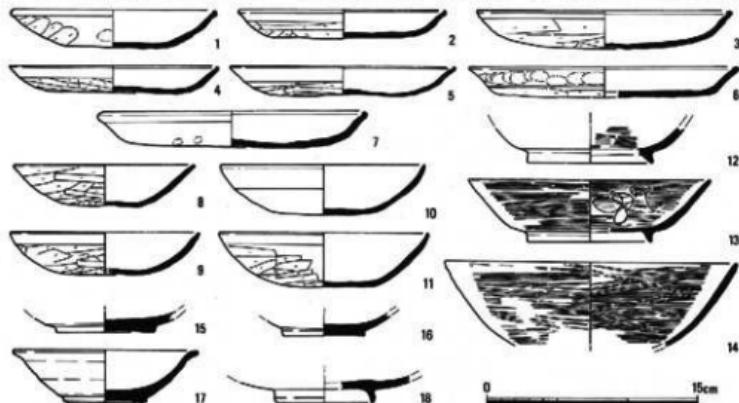
F 1点、6682A 1点、6685A 2点、6689A a 1点、6689A 2点、6691A 2点、6710C 3点、6721C 1点、6721E 1点、6721G b 1点、6775C 1点、軒平瓦新型式(2)1点、型式不明3点である。2は左端部の小破片である。左側最後の単位の唐草二本がともに上方に巻く点が特徴的である。文字瓦は2点出土した。2点とも平瓦凹面に刻印「理」が押捺されたものである。刻印「理」はa～1の12種類が知られている。今回出土したものは、1点は小片のため不明、もう1点は1である。

(原田憲二郎)

土器類 本調査では坊間路両側溝や井戸を中心にして整理箱にして150箱の土器が出土した。図示したものはSE509出土土器で、南都II期新段階(10世紀前半)のものである。3・5・10には墨書きがみられ、3が「□」、5が「北家」、10が「口調」である。

(池田裕英)

その他の遺物 坊間路西側溝SD103から出土した主なものについて述べる。木製品には箸、斎串、石製品は砥石がある。金属製品には鉄具、丸鞘、巡方、鉈尾の銅製帶金具、佐波理の環珞がある。以上は全て溝の最下層から出土した。錢貨は上層から神功開寶1点、中層から和同開珎1点、最下層から和同開珎4点、神功開寶7点が出土した。(田林香織)



井戸SE509出土土器(1～11・土師器、12～14・黒色土器、15～17・緑釉陶器、18・灰釉陶器)

2 J R 奈良駅周辺地区土地区画整理事業に伴う調査

奈良市教育委員会では、奈良市が進めるJ R 奈良駅周辺地区土地区画整理事業に伴い、昭和63年度から事業地内の発掘調査を継続している。本年度は表に示した計5,840m²の調査を実施し、初年度からの調査面積は合計34,516m²に達した。

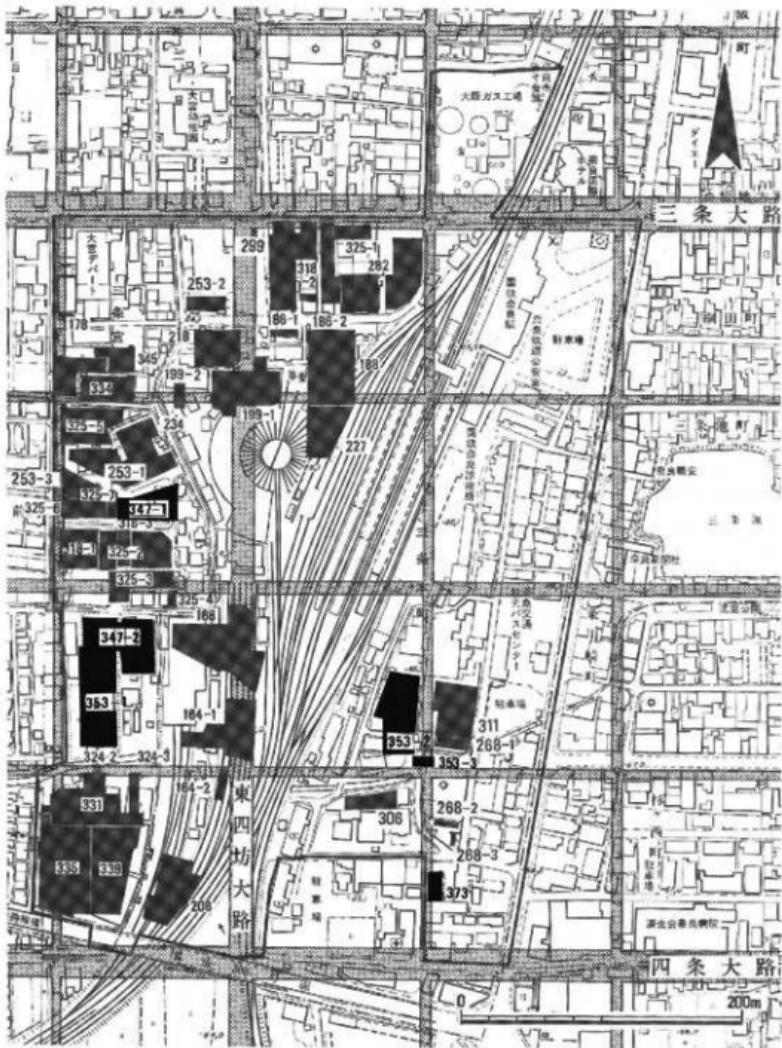
第347次調査は、左京四条四坊十四・十五坪における調査である。第1発掘区は十五坪にあたり、昨年度実施した第325次調査第7発掘区の東隣接地で設定した。第2発掘区は十四坪の西1/3の地域で設定した。第353次調査は、左京四条四坊十四坪・四条五坊一坪における調査である。第1発掘区は十五坪にあたり、第347次調査第2発掘区の南隣接地で設定した。第2・3発掘区は三坪の南東1/4の地域にあたる。第373次調査は左京四条五坊五坪の西辺中央付近にあたる部分の調査である。

●本年度収録した調査について

本書に収録した調査は、本年度実施した第347・353次調査と、平成6～7年度に実施した第318・325・331・334・335・339・345次調査である。これらの調査地は、左京四条四坊十三・十四・十五・十六坪にあたる。ここでは、上記の調査を坪ごとにまとめて報告する。なお、第373次調査については来年度に報告する予定である。

調査年度	調査次数・発掘区	遺跡名	調査地	調査期間	調査面積	備考
平成6年度	31A～1・3発掘区	左京四条四坊十五坪	三条宮前町306	H6.12.05～H7.03.07	969m ²	
	314	左京四条四坊三坪	三条本町236～1地	H7.03.06～H7.05.27	544m ²	試掘
	325～2発掘区	左京四条四坊十五坪	三条宮前町214～1地	H7.04.25～H7.06.11	1,284m ²	
	～2発掘区	左京四条四坊十五坪	三条宮前町211～1地	H7.04.25～H7.06.11	533m ²	
	～4発掘区	左京四条四坊二坪	三条宮前町238～8地	H7.04.25～H7.06.11	25m ²	
	～5発掘区	左京四条四坊十五坪	三条宮前町238～1地	H7.07.18～H7.09.27	797m ²	
	～6発掘区	左京四条四坊十五坪	三条宮前町238～3	H7.10.20～H7.12.06	522m ²	
平成7年度	～7発掘区	左京四条四坊二坪	三条宮前町238～3	H7.12.07～H8.02.13	309m ²	
	311	左京四条四坊十二・十三坪	二条本町236～1地	H7.08.18～H7.09.12	1,350m ²	
	334	左京四条四坊十八坪	三条宮前町41～1地	H7.08.08～H7.10.18	1,079m ²	
	335	左京四条四坊十一・十三坪	三条本町233～1地	H7.09.01～H7.12.13	1,400m ²	
	339	左京四条四坊十二坪	二条大宮町236～1地	H7.12.14～H8.03.39	2,450m ²	
	345	左京四条四坊十六坪	三条宮前町37～3地	H8.01.19～H8.03.29	396m ²	
	347～1発掘区	左京四条四坊十五坪	三条宮前町31～3、314～2	H8.04.23～H8.06.26	870m ²	
平成8年度	～2発掘区	左京四条四坊十四坪	三条大宮町344～1	H8.04.29～H8.06.06	1,400m ²	
	353～1発掘区	左京四条四坊十四坪	三条大宮町344～1	H8.07.07～H8.11.14	2,000m ²	
	～2発掘区	左京四条五坊二坪	三条本町335、337～1	H8.08.08～H8.10.30	1,400m ²	
	373	左京四条五坊五坪	三条本町7～11	H8.01.20～H8.02.15	150m ²	平成9年度報告予定

平成8年度発掘調査及び本概要報告書掲載調査一覧



J R 奈良駅周辺地区西側町家用地内の発錫調査位置図 (1/4,000)

(1) 平城京左京四条四坊十二・十三坪の調査 第164・208・324・331・335・339次

I 調査の目的

平城京左京四条四坊十二・十三坪およびその周辺では、平成7年度までに下表の6件計8,844m²の調査を実施した。下記の調査では主として弥生時代・奈良時代の遺構を検出したが、特に十三坪については宅地部分の約四割に相当する約5,700m²について調査区を設定し、奈良時代における同坪内の様相を探る上で多くの成果を得た。また条坊闕連造構では、十二・十三坪境小路を約90mにわたって検出したが、一方で存在が予想されていた十二・十四坪境小路については今回の調査では検出することができなかった。ただ今年度に調査地近隣で実施した平城京第350次調査(本報告89頁参照)では同坪の南辺を区切る四条大路の南側溝を検出しており、この他近隣の調査で得られた成果等を参考にすれば、国土方眼方位上の同坪の位置については、計算上ほぼ確定可能な状況にある。

なお、下記調査のうち第324次調査については地下構造の状況を確認するために第331・335・339次調査に先行して実施したものである。また第331・335次の調査区については、十二坪に該当する部分も含まれているが、十二坪と十三坪は本来的には奈良時代の宅地としては個別の存在であるので、当概要報告内では坪単位で報告することにする。

調査次数	調査地	面積(m ²)	調査期間	既存の概要報告書
第164次	三条木町1番地ほか	1,500	S 63/9/26~S 63/11/30	『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』昭和63年
第208次	三条木町31番地ほか	1,600	H 2/9/3~H 2/12/27	『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成2年
第324次	三条大宮町236-1ほか	544	H 7/3/6~H 7/3/27	
第331次	三条大宮町236-1ほか	1,350	H 7/6/2~H 7/9/12	
第335次	一条大宮町233-1ほか	1,400	H 7/9/1~H 7/12/18	
第339次	三条大宮町236-1ほか	2,450	H 7/12/14~H 8/3/29	

平城京左京四条四坊十三坪内の調査一覧

II 調査地の地形と層相

左京四条四坊十二坪および十三坪の西半部分については、以前に奈良県経済連の精米工場等の用地として使用されていたことがあり、また十三坪の東半についても川国鉄操車場用地として使われていたため、いずれも1.5~2.5m程度の盛土がある。これを除去すると旧水田作土が現われる。この層の堆積状況は各所により微妙に異なるが、凡そ0.4~0.5mの厚さで堆積しており、この下層が概ね黄灰色シルトもしくは青灰色砂礫の地山となっている。十三坪が想定される当該地は、春日山麓から西へ派生する扇状地の終末端部分になり、地山は概ね東から西へ傾斜する傾向にある。加えて、十二坪・十四坪境付近には現在は菩提川が西流しており、その影響で十三坪の北半部ではさらに粘土の堆積が数層あり、土層中には中世の遺物が含まれる。河川の氾濫等による削平のためにか、十三坪の北辺付

近の地山面は比較的低くなる傾向にあり、遺構の密度もかなり低くなっている。

なお、弥生時代および奈良時代の遺構はすべて地山上面で検出した。検出した地山の標高は、十二坪東辺中央および十三坪西辺中央付近では約62.6～62.8m、十三坪北辺付近では約62.4m、十三坪東半部中央では約63.3m、十三坪南半部中央では約63.5mである。

III 検出遺構

1 弥生時代の遺構 第208次発掘区では土坑4基を検出した。形状は平面円形や不整形など様々であり、いずれも径1.1～1.8m、深さ0.3m程度の規模である。各土坑の埋土からは土器片が少量化出土している。また第331次発掘区の中央東寄りでは土坑1基を検出した。形状は平面円形を呈し、径は約0.7m、深さ約0.35mである。土坑中央には畿内第V様式の特徴を示す甕が埋納されていた。

また、第335次発掘区中央では素掘りの井戸S E29を検出した。掘形は平面ほぼ円形であり、直径約0.8m、検出面からの深さは約1.7mである。埋土からは畿内第V様式の特徴を示す土器数点が出土した。

このほか流路を2条検出した。ひとつは、第208次発掘区北東から南流して中央付近から西に向きを変え、第339・335次発掘区中央付近を経てさらに西流する流路である。幅は広いところでは約6mあり、深さは0.2～0.6m程度である。第208次発掘区内では畿内第IV様式の特徴を示す甕が出土している。さらにもうひとつの流路は、第331次発掘区東側から北西隅方向へと流れるもので、幅は1.0～2.5m、深さは0.3m程度である。遺物は少なく、埋土から弥生時代の土器片が数点出土したのみである。

当該地の東側約200mで昭和60年に奈良市教育委員会が実施した第80次調査においても¹⁷、弥生時代の流路が検出されており、今回の調査で検出した流路と繋がる可能性がある。

2 奈良時代の遺構 奈良時代の遺構は各発掘区で多数検出した。以下条坊関連遺構および各坪ごとに分けてその概要を説明する。

(1)条坊関連遺構 第331・335次発掘調査において十二・十三坪境小路および両側溝を検出した。また条坊関連遺構ではないが、十二・十三坪境小路路面において奈良時代の土坑を数基検出しており、これらの概要も併せて述べることとする。

S F 1060 十二・十三坪境小路である。発掘区内では約90m分を確認した。幅員は東西側溝心間距離で約6.8mであり、恐らく20大尺(24小尺)に復元できるものと思われる。

S D 1061 十二・十三坪境小路西側溝である。第331・335次発掘区内において約90m分を検出した。幅は削平された部分以外では2m前後、検出面からの深さは同様に約0.3～0.4mである。第331次発掘区の北側では菩提川の氾濫等による削平のためか、徐々に浅くなり最終的には消滅する模様である。埋土からは奈良時代の土器、瓦の破片が出土した。

S D 1062 十二・十三坪境小路東側溝である。同様に発掘区内においては約90m分を検



十二・十三坪坪境小路 S F 1060及び两侧溝 S D 1061・1062断面図 (1/50)

山した。幅は削平された部分を除くと 2 m 前後で、検出面からの深さは約 0.3 ~ 0.4 m である。S D 1062 同様に第331次発掘区の北側部分で徐々に浅くなっていく傾向にある。埋土からは奈良時代の土器、瓦の破片が出土した。

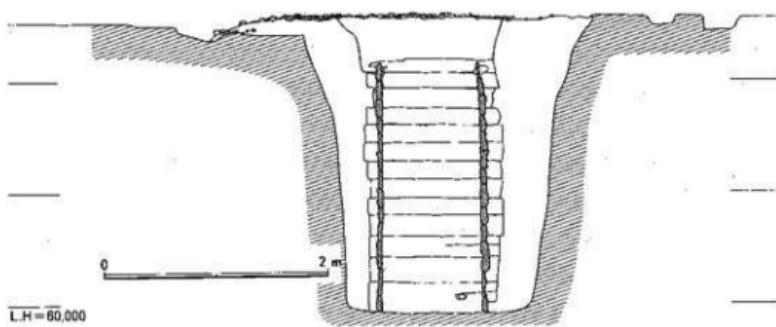
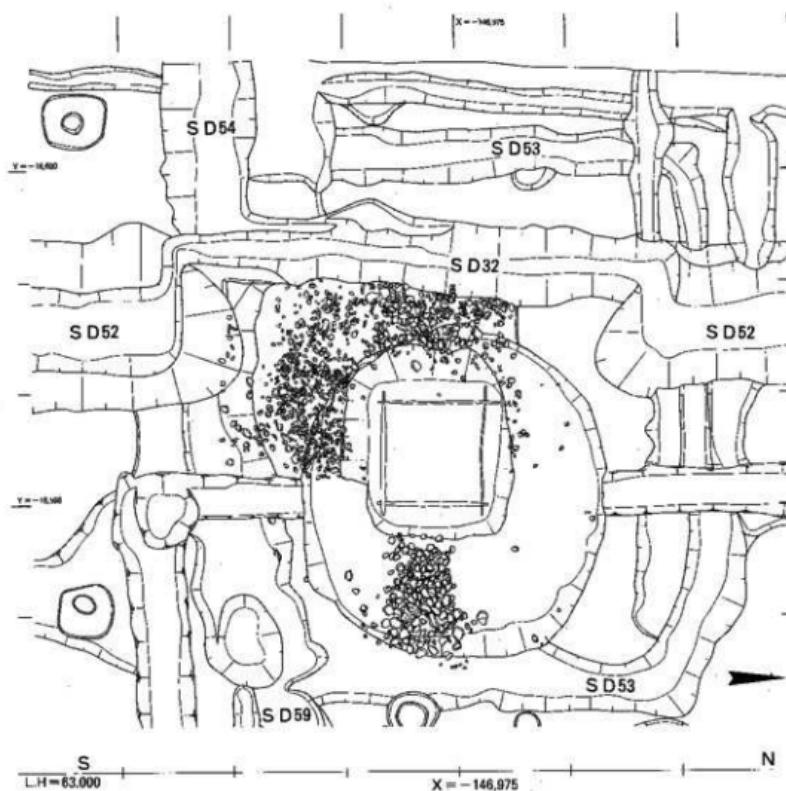
S K 45~48 十二・十三坪境小路路面上で検出した土坑。平面長円形を呈し、規模は長径 5 m 前後、短径 1.5 m 前後、深さは 0.1 ~ 0.2 m。埋土から奈良時代の土器片が出土した。

(2)左京四条四坊十二坪内の遺構 当坪内で検出した奈良時代の遺構には、建物もしくは塀 13 棟(列)、井戸 2 基、主要な素掘りの溝 21 条などがある。このうち建物または塀については発掘区の制約上全体を確認できない例が多く、よって最終的に建物となるか、塀となるか判断し難いものが大半である。規模等の詳細については次頁の上段の表に示した。また、素掘りの溝についても主要なものの規模などについても同様に次頁の下段の表に示した。以下井戸等の他の遺構について列挙する。

S E 66 第331・335次発掘区で検出した井戸である。位置的には十二坪東辺の北寄りの部分にあたる。井戸の掘形は平面円形で径約 3.0 m、検出面から底までの深さは約 2.7 m に達する。井戸枠の構造は方形横板組で、両端にある上下二段の目違い枠で留める仕組みになっている。井戸枠の規模は内法は東西・南北とも 0.9 m ずつで、深さは 13 段分・約 2.3 m が残存していた。枠材に使用されていた板材は縦 1.2 m 前後、幅約 1.5 ~ 2.5 m、厚さ 0.03 ~ 0.04 m 程度で、中には納穴があるものも見受けられることから、建物などの建築部材の転用である可能性が高い。また、井戸枠の東側および西側から南側にかけて敷石を検出した。敷石の多くは河原石で、径 5 cm 程度のものが主流を占める。一部は削平されてなくなっているものの、かつては井戸枠の周辺には石が敷き詰められていたものと推測される。

このほか、井戸の周囲には排水施設と考えられる溝 S D 53 や暗渠 S D 59 が存在する。

S E 67 第335次発掘区内検出した井戸である。位置的には十二坪東辺のはば中央付近に該当する。井戸の掘形は平面隅丸方形を呈し、径約 1.8 m、検出面から底までの深さは約 1.4 m を測る。井戸枠の構造は円形削り貫き井戸枠で、枠材は一木を半截した後に厚さ 10 cm 程度に削り貫き、再び綱で組み合わせて据えていたと推定される。また、残存していなかったが、さらに上段には同様の枠材を据えていたらしく、残存する枠材の上部には薄板が敷かれており、おそらく上段の枠材との隙間を埋める目的でなされたものと推測され



十二坪 井戸S E66 平面・立面図 (1/50)

通 番 号	棟 方 向	規 格 (桁行×梁間)	桁行全長 (m)	梁行全長 (m)	梁行柱間 寸法(m)	梁行柱間 寸法(m)	崩の出 (m)	備 考
S A031	東・西	南北連続4以上	此比19.9663	北2.1~24東西2.1~4.8				地盤はS A031より古い。S A031より古い。
S A032	南北	4以上	12.0		不規則			地盤はS A032より古い。S A032より古い。
S A033	南北	3	4.95		1.65等間			建物である可能性あり
S A034	南北	2	4.2		2.1等間			建物である可能性あり
S A035	南北	2	6.0		3.0等間			建物である可能性あり
S B036	南北	1×1	3.0	0.9	3.0	0.9		四壁内、S B036より古い。S B036より新しい。
S B037	東北?	4×1以上	9.6	2.4以上	2.4等間	2.4等間		
S B038	東北?	3×1以上	3.6	2.1以上	2.1等間	2.1		
S B039	東西	1	2.7		2.7			門か扉の可能性
S B040	南北	1	3.0		3.0			門
S B041	南北	2×2	3.0	2.4	1.5等間	1.2等間		S B41より古い
S B042	南北	4×2	8.4	4.2	2.1等間	2.1等間		S B42より古い
S B043	南北	4×2	7.2	3.3	1.8等間	1.65等間		S B43より新しい

十二坪内検出掘立柱跡・建物一覧表

遺構番号	方向	検出範囲 (形状) (m)	検出距離 (m)	深さ (平均) (m)	出土遺物・病変
S D050	東西	0.5+α	5.5	0.3	坪計画北辺より南へ1/4の位置上、SD50に梁級、坪内に曲溝の可能性
S D051	南北	0.9+α	10.5	0.3+α	築地雨落ち溝、SD55・57・58の延長上にあり同時期の可能性
S D052	南北	0.6~1.6	12.8~19.0	0.3	築地雨落ち溝、SD55より新しい
S D053	東西	0.3~0.6	17.0	0.1	井戸S F66を掘削、井戸の排水溝か? SD59に接続していた可能性
S D054	東西	0.8~0.9	6.0	0.2	坪計画北辺より南へ1/4の位置上、SD59に接続、坪内に曲溝の可能性
S D055	南北	1.3~2.1	24.4	0.2	築地雨落ち溝、SD55より古い、SD55・57・58の延長上にあり同時期の可能性
S D056	南北	0.9~1.9	6.5	0.2	坪計画北辺より南へ1/4の位置上、SD59に接続、坪内に曲溝の可能性
S D057	南北	0.5~1.4	1.8	0.1	SD55・56の延長上にあり、坪計画の築地雨落ち溝の残存部分の可能性
S D058	南北	0.6~0.8	8.2	0.1	SD55・56の延長上にあり、同時期の築地雨落ち溝の残存部分の可能性
S D059	東西	0.4~0.5	1.8	0.1	築地雨落ち溝、SD53・54と十二・十一坪境小路西側溝を接続
S D060	東西	0.4~0.5	3.7	0.2	築地雨落ち溝、平瓦等で護堤、SD55またはSD50と坪境小路西側溝を接続
S D061	東西	0.4~0.5	2.1	0.1	築地雨落ち溝、SD55と十二・十三坪境小路内側溝を接続
S D062	東西	0.2~0.6	1.7	0.1	築地雨落ち溝、SD55と十二・十三坪境小路西側溝を接続
S D063	東西	0.5~0.6	1.5	0.2	築地雨落ち溝、奉大の河原石等で護堤、SD55と坪境小路西側溝を接続
S D064	東西	0.4~0.5	4.2	0.2	S X76と坪境小路西側溝を接続していた可能性あり。SE67の排水溝か
S D065	東西	1.8~3.0	3.8	0.7	SE67より古く、坪中心付近に位置し坪境溝の可能性

十二坪内検出の主な累振りの溝一覧表

る。このほか、枠内には洋5cm前後の河原石が敷き詰められていた。

この井戸も前述の井戸SE66と同様に井戸枠の南側には敷石が残存しており、かつてはやはり井戸枠の周開前面に敷き詰められていた可能性がある。

またこの敷石の南側に隣接するように、SD64や拳大の河原石を敷き並べた石敷造構SX76があり、井戸枠周囲の敷石とも併せ井戸の排水機能を果たしていたと思われる。

S K71 SD65の下層で検出した土坑。平面梢円形を呈し、規模は長径約1.2m、短径約0.8m、深さ約1.0m。埋土に遺物は含まれず、遺構の時期や性格は不明である。

S K72 SD72の東側で検出した土坑。平面不整形を呈し、東西約3.5m、南北約3.7m、深さは0.2m程度と浅い。築地雨落ち溝とみられるSD52の延長上にあることから、その続縁の一部である可能性もある。埋土からは奈良時代の土器片が出土した。

S X76 SE67の南辺に位置する集石遺構。SE67南辺に広がる敷石と重複する部分では幅約0.2mの溝状をなし、東西方向に約4.1m分を検出した。溝の南北辺部分は径10cm程度の石により縁取られている。また東側は一辺約0.7mの隅丸方形の石敷造構となって

おり、ここでは拳大の河原石が使用されている。遺構の状況からみて、井戸 S E 67 の排水機能を果たしていた遺構と考えられる。また、状況からみて南辺の敷石よりは古いと思われる。遺物は少なく、溝状部分が上器片が少量出土したのみで、時期は不明である。

(3)左京四条四坊十三坪内の遺構 当坪内で検出した奈良時代の遺構には、建物又は塀76棟(列)、井戸4基、主要な素掘りの溝21条がある。このうち建物又は塀については発掘区の制約上全体を確認できないものが数例あり、最終的にどちらか判断し難い例もある。主要な素掘り溝や井戸とも併せ、各遺構の規模等の詳細は下表および次頁表の通りである。

S K 195・196・198 S K 195・196は S D 172 の西側で検出、また S K 198 は築地雨落ち溝 S D 162 の南端から東へ約5mで検出した。S K 195 は東西約2.6m、南北約7.9mで埋土から奈良時代中頃の上器が出土した。S K 196 は東西約3.6m、南北約6.0m、奈良時代末期の土器が出土した。S K 198 は東西約3.9m、南北約2.8m、奈良時代末期の上器が出土した。いずれも深さ0.1~0.3mと浅く、形状は概ね長円形を呈す。廃棄上坑と思われる。

S K 199・202 S K 199 は十二・十三坪境小路東側溝の東で、また S K 202 は S B 134・135 の北側でそれぞれ検出した。いずれも須恵器壺が埋納されていた。形状は平面円形、径は0.2~0.3m、深さは0.1~0.2m程度である。

(武田和哉・森原豊一)

遺構番号	方向 (形状)	検出範囲 (m)	検出距離 (m)	深さ(平均) ~(m)	出土遺物・特徴
S D 160	東(圓)	0.2~0.7	7.1	0.1	S K 197 北側を周回するような形状を呈す
S D 161	東(圓)	0.7~0.9	11.8	0.1	S E 185 と並んで南北に走る、西側に開口している溝。S E 185 より北、奈良時代の土器出土
S D 162	南北	1.5~2.7	40.4	0.2	築地雨落ち溝。S D 172 と同時期の可能性あり。台段構造の遺物が出土
S D 163	南北	1.4~1.6	4.1	0.1	素掘れ跡と見られ、S D 162 の東上部と並行して南北に走る。古代時の土器が出土
S D 164	東西	0.7~1.3	26.6	0.1	坪計画南北から南北へ／＼の位置にあり坪内区画溝の可能性。深度は S D 165 と分かれ
S D 165	東西	0.4~0.7	7.7	0.1	坪計画南北から南北へ／＼の位置にあり坪内区画溝の可能性。深度は S D 164 と分かれ
S D 166	南北	0.4~0.5	8.9	0.1	古墳時代末の土器が出土。坪内の区画溝または排水溝か
S D 167	南北	0.5~0.7	8.4	0.1	坪内の区画溝または排水溝か
S D 168	南北	1.0~2.1	15.2	0.2	坪計画南北から南北へ／＼の位置にあり坪内区画溝の可能性。S B 126、27より古い
S D 169	南北	1.4~1.8	15.4	0.3	S D 168 の東側を平行。坪内区画溝の可能性。S B 126・127より古い
S D 170	東西	0.9~1.1	19.5	0.2	坪計画南北から南北へ／＼の位置にあり坪内区画溝の可能性。平行する溝群から南北に走る
S D 171	東西	0.8~1.0	26.9	0.2	坪計画南北から南北へ／＼の位置にあり坪内区画溝の可能性
S D 172	南北	0.9~1.0	16.1	0.2	坪内区画南北から南北へ／＼の位置にあり坪内区画溝の可能性。奈良時代末の土器が出土
S D 173	東西	0.7~1.5	14.4	0.1	坪計画南北から南北へ／＼の位置にあり坪内区画溝の可能性。古墳時代の土器が出土
S D 174	東西	0.3~1.0	21.2	0.1	坪計画南北から南北へ／＼の位置にあり坪内区画溝の可能性。古墳時代の土器が出土
S D 175	南北	0.3~0.7	9.8	0.1	坪計画南北から南北へ／＼の位置にあり坪内区画溝の可能性。古墳時代の土器が出土
S D 176	東西	0.3~1.3	19.8	0.2	S D 177 の北側を並行。坪内区画溝の可能性。奈良時代末の土器が出土
S D 177	東西	0.6~1.0	12.5	0.1	坪計画南北から南北へ／＼の位置にあり坪内区画溝の可能性。S D 176 に接続。古墳時代の土器が出土
S D 178	東西	0.4~0.5	1.4	0.1	墓地下施渠。S D 166 と十二・十三坪境小路東側溝と接続していた可能性
S D 179	東西	0.5~0.6	1.3	0.2	墓地下施渠。S D 177・S K 201 と十二・十三坪境小路東側溝と接続していた可能性
S D 180	東西	0.3~0.4	1.9	0.1	墓地下施渠

十二坪内検出の主要な素掘りの溝一覧表

遺構番号	輪形			井戸	主要出土遺物	備考	
	平面形	平面規模 (m)	深さ (m)		平面形・構造		
S E 028	丸長方形	東西2.5南北2.0	1.9	方形構造柱隣接留め	0.9×0.9	埴輪、瓦、筒瓦、瓦当、瓦棒	
S E 185	丸長方形	東西2.8南北2.8	2.2	(抜き取り)	不明	S E 185 より新しいS D 165	
S E 186	丸長方形	東西2.8南北2.8	2.0	(抜き取り)	不明	S E 185・S B 135より古い	
S E 187	円形	径2.3	1.6	(太掘り)	—	土器残、廃棄窓	
S E 188	丸れ方形	東西2.5南北2.1	2.4	邊：方塊積石、底：瓦棒	0.8×0.8	土器部、須恵器（ミニチュア）	古墳時代末の土器が出土
S E 189	円形	径2.7~3.0	2.9	邊：方塊積石、底：瓦棒	不明	土器部、須恵器（ミニチュア）	古墳時代末の土器が出土
S E 190	丸れ方形	東西3.0南北2.0	2.6	邊：方塊積石、底：瓦棒	不明	土器部、須恵器、瓦、瓦棒、瓦棒、瓦棒	古墳時代の土器が出土
S E 191	円形	径1.5~1.6	2.8	(素掘り)	—	土器部、須恵器、壺土器	古墳時代後半か？

十二坪内検出井戸一覧表

通 番 号	棟 方 向	棟 横 幅 (桁行×柱間)	桁行全長 (m)	梁行全長 (m)	架行柱間 寸法(m)	梁行柱間 寸法(m)	廻の山 (m)	備 考
S A101	南北	8	19.2以上	2.4等間				築地想定地上
S A102	東西	2	3.6以上	1.8等間				
S A103	東西	7	16.8	2.4等間				
S A104	南北	東西3 南北2	4.8以上	1.8等間				S B126より古い S A105より新しい
S A105	東西	6	10.8	1.8等間				S A104より新しい
S A106	東西	15	30.3	1.8等間				南北面積より南へ1/4の位置上
S A107	東西	4	9.0	1.8等間				南北面積より南へ1/4の位置上
S A108	東西	3	7.2	2.4等間				
S A109	南北	5以上	9.6以上	2.4等間				
S A110	南北	12	23.4	1.95等間				S A110・B-IIIに類似、折板屋根あり/100以上
S A111	南北	5	10.5	2.1等間				S A110より古い、折板屋根あり/100以上
S A112	南北	3	8.4	2.15等間				S A110より古い、折板屋根あり/100以上
S A113	南北	5	10.5	2.1等間				S A110より古い、折板屋根あり/100以上
S A114	南北	2以上	3.6以上	1.8等間				建物の可能性あり
S A115	東西	2	3.0	1.8等間				
S A116	南北	6以上	9.0以上	1.5等間				坪計画限界より東へ1/4の位置上
S A117	東西	4	7.2	1.8等間				
S B008	?	2段X1段	3.6以上	1.8等間	1.8等間			
S B009	南北	2以上×3	3.6以上	1.8等間	1.8等間			
S B010	南北	4×2	7.2	3.6	1.8等間	1.8等間		
S B011	南北	3×2	5.4	3.6	1.8等間	1.8等間		
S B012	南北	6×2	14.4	4.8	2.4等間	2.4等間		
S B013	南北	3×2	5.4	3.6	1.8等間	1.8等間		
S B014	?	2段X1段	3.6以上	1.8等間	1.8等間	1.8等間		
S B015	東西	3段X1段	5.4以上	1.8等間	1.8等間	1.8等間		
S B016	東西	3×2	6.3	3.3	2.1等間	1.65等間		
S B017	?	3段X1段	3.6以上	1.8等間	1.8等間	1.8等間		
S B018	?	2段X1段	4.2以上	2.1等間	2.1等間	2.1等間		
S B019	東西	3以T×2	5.4以上	4.2	1.8等間	1.8等間		
S B20	東西	3×3	5.4	5.4	1.8等間	1.8等間		
S B21	東西	5×4	12.0	8.4	2.4等間	2.1等間		
S B22	東西	3×2	4.5	3.0	1.8等間	1.5等間		
S B23	南北	2段X2段	4.8以上	3.6以上	2.4等間	1.8等間		
S B24	南北	1段X2段	2.1以上	4.2以上	2.1等間	2.15等間		
S B25	東西	3×2	4.95	3.3	1.65等間	1.65等間		
S B26	東西	3×2	5.4	3.6	1.8等間	1.8等間		
S B27	?	3×2以上	5.4	3.6以上	1.8等間	1.8等間		
S B28	南北	2×1	3.9	1.8	1.95等間	1.8		
S B29	南北	5×2	4.95	2.5	1.65等間	2.25等間		
S B30	南北	1	2.4	2.4	2.4等間	2.4等間		
S B31	南北	2以上×2	4.8以上	3.6	2.1等間	1.8等間		
S B32	南北	4以上×2	7.8	3.6	2.1等間	1.8等間		
S B33	南北	4以上×2	7.8	3.0	1.95等間	1.5等間		S B125より新しい
S B34	東西	5×2	13.5	4.8	2.7等間	2.4等間		S B124より古い
S B35	南北	3×2	6.3	4.8	2.1等間	2.4等間		S B126・S B127・S B128より新しい
S B36	東西	5×4	8.4	10.2	2.55等間	1.8等間		S B126より古い、S B128より新しい
S B37	東西	4×2	14.2	4.65	2.55等間	3.45		南北面付、S B129より新しい
S B38	南北	2×2	3.9	2.7	1.95等間	1.5~1.2		
S B39	南北	4×2	7.8	3.9	1.95等間	1.95		
S B40	南北	3×2	6.75	4.8	2.25等間	2.4等間		
S B41	東西	3×4	6.3	9.0	2.1等間	1.95等間		
S B42	南北	4×5	3.3	10.2	1.65等間	2.55等間		
S B43	東西	5×2	8.95	4.5	2.65	2.25等間		
S B44	南北	4×3	7.2	6.15	1.8等間	1.8等間		
S B45	東西	2×2	3.6	3.0	1.8等間	1.8等間		
S B46	東西	3×2	4.95	3.6	1.65等間	1.8等間		S B139より古い、S B137より新しい
S B47	南北	3×1	4.95	3.6	1.65等間	3.6		S B137・138より新しい
S B48	南北	2段X2段	3.6以上	3.6以上	1.8等間	1.8等間		
S B49	南北	3×3	7.8	6.3	2.1等間	2.1等間		
S B50	南北	3以上×2	4.5以上	4.2	1.95等間	2.1等間		
S B51	南北	1	2.55	2.55				
S B52	南北	1	2.7	2.7				
S B53	南北	1	3.6	3.6				
S B54	南北	1	2.55	2.55				
S B55	南北	1	1.5	1.5				
S B56	南北	2×3	3.6	3.6	1.8等間	1.25等間		
S B57	南北	2×2	3.3	2.7	1.65等間	1.35等間		
S B58	東西	2×1	3.6	2.4	1.8等間	2.4		
S B59	南北	3×1	4.95	3.6	1.65等間	3.6		
S B60	南北	2×2	7.2	4.5	1.8等間	2.25等間		
S B61	南北	4×2	8.4	5.6	2.1等間	1.8等間		
S B62	南北	5×2	12.0	4.8	2.4等間	2.4等間		
S B63	南北	3以上×2	4.5以上	3.9	1.95等間	1.95等間		
S B64	東西	4以上×2以上	10.8以上	2.7以上	2.7等間	2.7		
S B65	南北	4×2	6.6	3.3	1.65等間	1.65等間		

十三坪内検出の建物・概一覧表

IV 出土遺物

1 瓦類 出土した瓦類の総量は遺物整理箱42箱である。大半は丸瓦、平瓦であるが軒丸瓦17点、軒平瓦11点、文字瓦1点、埠20点がある。ここでは軒瓦、文字瓦について報告する。軒丸瓦の内訳は6134A 1点、6135A 3点、6135種別不明4点、6282G 1点、6314B 1点、形式不明7点である。軒平瓦の内訳は6663D 1点、6663F 2点、6663J 1点、6664H 1点、6671A 1点、6671種別不明1点、6691A 1点、6721I 1点、6721種別不明1点、平安以降のもの1点である。本調査と過去の十三坪内の調査(第208次)で出土した軒瓦を出土場所別にまとめたものが別表である。

軒丸瓦総量は少ないものであるが、十三坪内でこれまで出土した軒丸瓦のなかでは、6135型式のものが軒丸瓦全体の64%と多数を占めることがわかる。また、周辺の十二・十三坪境小路や十二坪内部では6135型式が全く出土していない。これらのことから、十三坪内では6135型式の軒丸瓦が主として用いられた建物があった可能性が指摘できよう。文字瓦はSE189枠内から出土した。平瓦の凹面に「真依」の刻印がある。刻印「真依」には4種類あることが知られているが、今回の出土例はK J12Bである。¹⁾ (原田憲二郎)

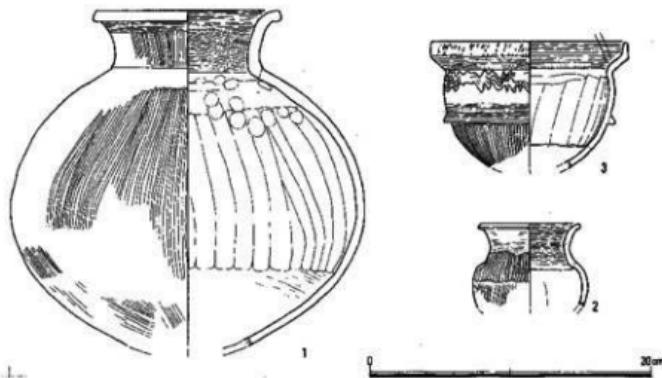
軒丸瓦	十二・十三坪境小路東側溝		十二・十三坪境小路西側溝		出土場所不明	全体	軒平瓦	十二・十三坪境小路東側溝		十二・十三坪境小路西側溝		十三坪内	出土場所不明	全体
	十二坪内	部	十二坪内	部				十二坪内	部	十二坪内	部			
6134A		1				1	6663D	1						1
6136A			3			3	6663F			3				3
6135種別不明			4			4	6663J					1	1	1
6282G				1		1	6664II			1				1
6314B	1					1	6671A			2				2
形式不明	2		3	3		8	6671種別不明			1				1
平安以降			1			1	6691A			1				1
							6721I			1				1
							6721種別不明	1						1
							平安以降					1	1	1

平城京左京四条四坊十二
・十二坪出土軒瓦内訳表

2 土器類 ここでは第331・335・339次調査で出土した分について述べる。出土した主な土器類には、弥生時代後期の弥生土器と奈良時代の土師器・須恵器・黒色土器がある。

(1) 弥生土器 井戸SE29から出土した土器について記す。器種は、壺、壺(1・2)、鉢、手焙形十器(3)がある。

壺や鉢は、図示していないが、体部外面にタタキ目が残るものとハケメ調整が施されているものがみられる。壺には大型のものと小型のものがある。1は大型のもので、口縁～体部外面が縦方向のヘラミガキ調整で仕上げられている。内面は口縁部が横方向のナデ調整、体部が指による縦方向のナデ調整で仕上げられている。頸部内面には、口縁部と体部の接合痕がみられる。2は小型のもので、外面は口縁部が横方向のナデ調整、体部が縦方向のヘラミガキ調整で仕上げられている。内面は、口縁部が横方向のナデ調整、体部が縦



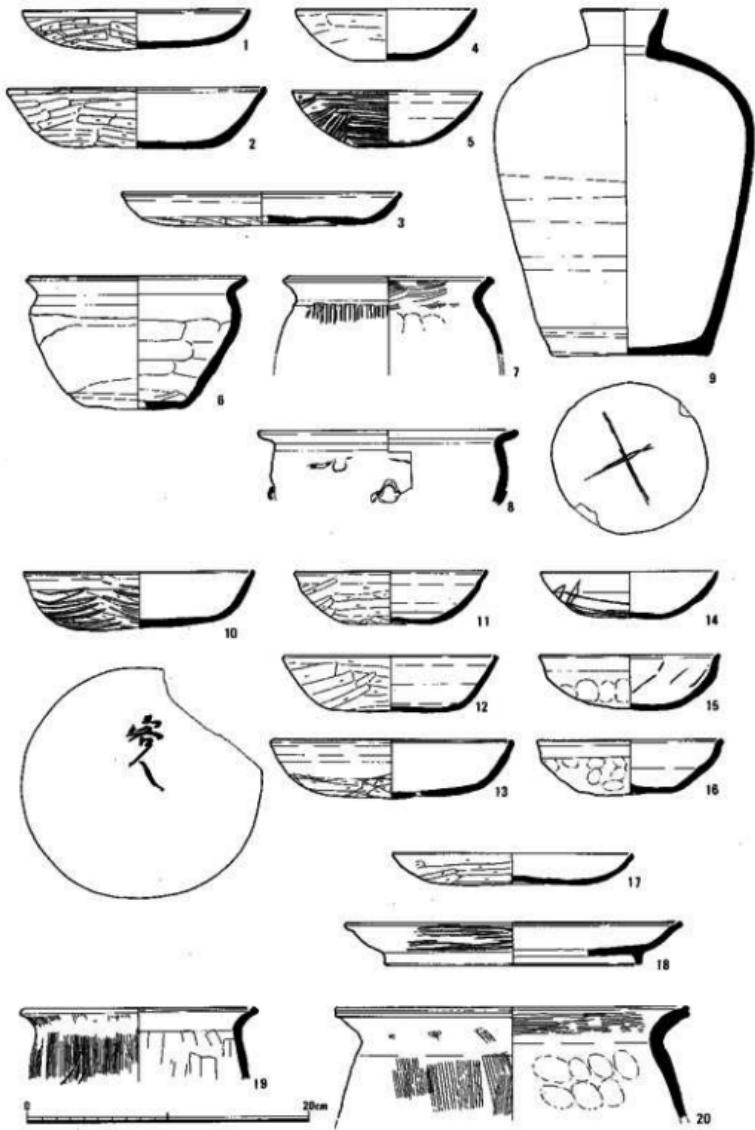
井戸 S E29出土土器 (1/4)

方向のナデ調整で仕上げられている。頸部内面には、口縁部と体部の接合部がみられる。3は手焙形土器で、口縁部外に列点文が、頸部内面に横描波状文がそれぞれ施されている。外面は、体部中央にある突帯より上が横方向のナデ調整、それより下が縦方向のヘラミガキ調整で仕上げられている。内面は、全体にナデ調整で仕上げられているが、体部では縦方向のヘラケズリ成形痕が残る。

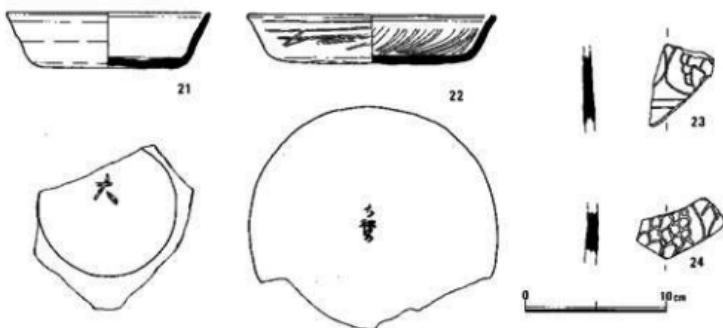
これらの土器は、器種組成や器形の特徴から、藏内第V様式でも新しい様相を示すものである。
(安井宣也)

(2)奈良時代土器 1~9はS E190枠内出土のもので、土師器(1~8)、須恵器(9)の他、黒色土器がある。また、土師器の方が須恵器より量的に多い。器種には土師器は杯A(2)、皿A(1・3)、壺B(6・8)、壺A(7)の他に高杯がある。須恵器は把手のない壺N(9)の他に杯Aがある。土師器食器類のはほとんどがC手法で調整しており、ミガキを施すものもある。3の皿Aはb手法で調整している。これらの土器は南都I期中段階(8世紀末~9世紀初³³)のものである。10~20はS E189枠内出土のものである。図示した土師器の他に少量の須恵器が出土している。土師器の器種には、杯A(10・12・13)、皿A(17)、皿B(18)、碗A(11・14)、楕C(15・16)、壺A(19・20)がある。土師器食器類の調整はC手法が多く、ミガキをもつものもある。10には底部外面に「客人」の墨書きがある。これらは南都I期中段階(8世紀末~9世紀初³³)のものである。23はS D172、24は十三坪北辺部の遺物包含層出土の須恵器壺類の破片で、同じ様な線刻があり同一個体の可能性がある。22はS E191山上の土師器杯Aで底部外面に「大麻呂」の墨書きがある。21、23、24は共伴遺物が細片ばかりで時期は不明である。22は他に土師器皿A、壺A、壺B、須恵器杯A、平瓶、壺があり、奈良時代中頃のものと思われる。

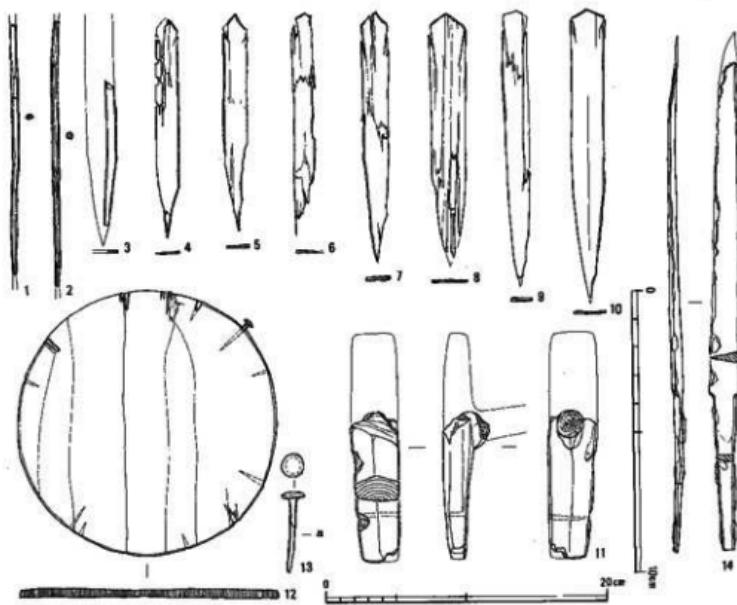
(細川富貴子)



S E 189・190出土土器 (1/4)



SD165・SE191・SD172及び十三坪北辺部遺物包含層出土七十層 (1/4)



井戸SE190出土木製品 (1/4)・金属製品 (1/2)

3 木・金属・石製品 ここでは第331・335・339次調査で出土した分について述べる。

木製品 箸、斎串、檜扇、横櫛、横斧、曲物、容器蓋、棒状木製品、杓子などが井戸SE190から出土した。1・2は箸で両端を欠くが、表面は丁寧に削られている。3~10は斎串である。いずれも主頭状の上端左右に一条の切込みをもつものと考えられる。側辺は丁寧に削られるが、表裏には割裂き痕をとどめている。11は横斧で茎部の基部と柄を欠損

する。着装部は両側から削ってやや細くなっている。先端から3.5cmのところに鉄斧の装着痕が残る。12は曲物底板で、径18.3cm、厚さ0.5cmある。側面6ヶ所に木釘痕跡が、4ヶ所に銅鋳留め痕跡があり、うち1ヶ所に頭が円形の銅鋳が残る。銅鋳は後の補強であろう。

金属製品 鉄釘、刀子、鉄洋、銅鋳、鉈頭がある。13は銅鋳で曲物底板(12)に使用されていたものであろう。14は刀子で木質部分を欠損する。刀身は刃先の一部を欠損するがほぼ完形である。残存長17.3cm、刃幅1.1cm、茎長5.5cm、茎幅0.8cmである。

銅 銭 十二坪内の井戸S E 66の井戸枠内最下層から和銅開珎が1点出土した。

石 器 発掘区内の遺物包含層から安山岩製の石器が出土した。有茎尖頭器1点、石鐵2点、スクレイバー3点、楔形石器6点、剥片25点がある。有茎尖頭器は上半部と逆刺を欠損しているが、「柳又型」であり縄文時代草創期のものであろう。 (藤原豊)

V まとめ

条坊関連遺構の位置 今回の報告分も含め、十一坪周辺における発掘調査で検出した条坊関連遺構の南北方限上における位置は下表の通りである。

条坊関連遺構名	調査次数	X座標	Y座標
東四坊大路東側溝心	第168次	-146,860.00	-16,449.35
東四坊大路西側溝心	第168次	-146,858.75	-16,457.78
東四坊大路西側溝心	第168次	-146,857.50	-16,466.00
左京西条四坊十二・十三坪境小路東側溝心	第335次	-147,032.00	-16,585.60
左京西条四坊十二・十三坪境小路東側溝心	第335次	-147,031.00	-16,589.00
左京西条四坊十二・十三坪境小路西側溝心	第335次	-147,030.00	-16,592.40
四条大路南側溝心	第350次	-147,085.75	-16,656.32

平城京左京四条四坊十三坪周辺の条坊関連遺構の園地図

左京四条四坊十二坪東辺部の遺構の様相 十二坪内において発掘区を設定できたのは、今回の調査がはじめてである。しかも全体的にみれば坪の東辺部分だけで位置的に偏った傾向があることに加え、面積的にも限られている点などの事情もあって、今回の一連の発掘調査の成果だけでは、十二坪全体の遺構の様相を把握することは到底できない。よって、ここでは坪の東辺部に限定した上で遺構の様相について少しまとめてみたい。

まず今回の調査で明らかになった事実としては、十二坪の東辺に関しては築地の雨落ち溝が2時期あり、しかも位置が異なるということである。古い時期の雨落ち溝SD 55は十二・十三坪境小路西側溝から約1.5m西にあるが、新しい時期の雨落ち溝SD 52はさらに西側に移っており、十二・十三坪境小路西側溝からは約4.5m離れた所にある。こうした雨落ち溝の位置の変遷が如何なる理由で生じたのかについて、現段階では明確にはできないが、ひとつの手掛かりとしては、井戸S E 66の存在とその周辺の各遺構の問題がある。

井戸S E 66については排水施設と推定される敷石が施されており、周囲する溝SD 53を伴っている。しかも十二・十三坪内で検出した奈良時代の井戸の中では比較的規模が大きく、井戸枠やそれに使用された枠材の状況からみても、他の井戸に比べて整備された状態にあったと思われる。さらに、位置的には十二坪の計画線の北辺(つまり十一・十二坪境

小路計画心)から南へ約3分の1の場所にあり、坪を区画する性格の溝と考えられるS D 50・54の傍であること、また十二・十三坪境小路にも隣接した場所でもあり、その北側には門S B 36が存在していて、小路からの進入が容易な時期もあったと推定できる。このようなことから、井戸S E 66は公共性・利便性の高い井戸であったことがうかがわれる。

しかし一方では、井戸S E 66の位置は十二坪東辺築地の古い時期の雨落ち溝S D 55の延長線上にも該当する。発掘調査では両遺構の重複関係が注目されたが、結果的に溝S D 55は井戸S E 66の手前で途切れ貯流していないことが判明した。他方、溝S D 55が途切れた場所から西へ溝S D 50が延びることも確認された。この溝は、前記のように位置的にみて坪内を区画する性格の溝でもあった可能性が高い。また溝S D 55が途切れる場所から東へ延び十二・十三坪境小路西側溝S D 1061と接続する暗渠S D 60・61が存在している。

こうした状況からみて、雨落ち溝S D 55が機能していた時期の宅地内の排水は、S D 55に流入して井戸S E 66の手前に至り、坪内区画溝S D 50を流れてきた排水とも合流するが、そこから坪外に排出する経路としては暗渠S D 60か61だけであったと考えられる。

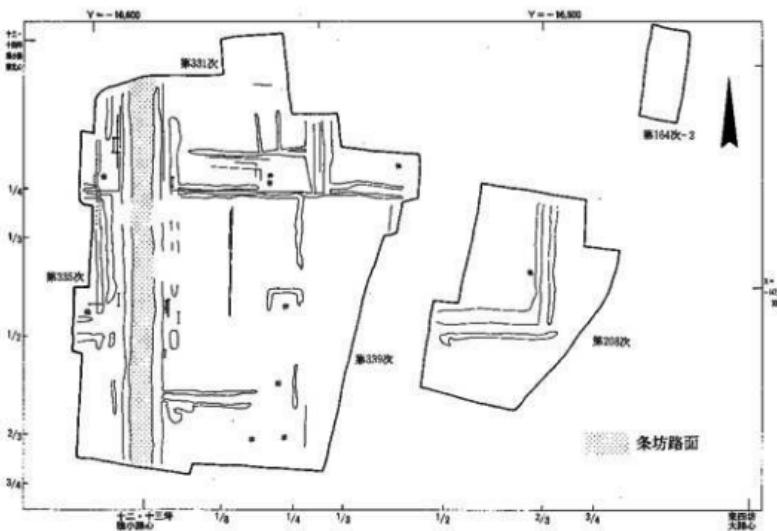
次に、新たな雨落ち溝S D 52の時期の排水経路について検証すると、前述の区画溝S D 50は既に廃絶しており、また溝S D 52と暗渠S D 60・61が接続していた蓋然性は低い。ところが溝S D 52を位置的に幾分西側へ遷した結果、井戸S E 66付近では溝の幅員を若干狭めることによって、S E 66をかわして北側へ貯流させることが可能となった模様で、当該期の十二坪東辺部の排水は、溝S D 52を経て北流し坪の北辺部へ至っていたと思われる。

井戸S E 66が比較的長期間使用されていたのは、前述のような井戸の公共性・利便性の良さがひとつの要因と思われる。しかしながら一方では、その位置ゆえに雨落ち溝の貯流を遮り、宅地内の排水に関しては結果的には障害となっていた可能性も想定される。これらの点から十二坪内では井戸S E 66の機能を存続させた上で効率の良い排水を図るため、かかる雨落ち溝の位置の変遷があった可能性も考えられる。

左京四条四坊十三坪の遺構の様相 十三坪では全体の四割について発掘区を設定できることもあり、同坪内の状況についてはある程度の知見が得られる結果となった。

まず、十三坪内は基本的には一坪全体で利用されていた時期ではなく、むしろ複数の部分に区画され利用されていたことが判る。その根拠としては次頁の図に示しているように、溝や扉などの区画施設が坪内を縦横に区切るように存在していることが挙げられる。しかも、それらの内の大半は坪計画線間の何分の1かの場所に位置している状況から、こうした区画割りが宅地の造営当初からある程度計画的に実施されていたこともうかがえる。

このほか、十二・十三坪境小路に面する坪の西辺部において門らしき遺構を一定の間隔で複数検出している。中にはS B 143・144・145のように、同一場所で三回の建替えをしている例もある。また同坪内で検出された井戸が、坪内の各部分にほぼ均等に散在してい



十二・十二坪内の区画施設と井戸の配置状況

る事実もある。これらは十三坪内が細分化されていたことを示す現象と言えるであろう。

以上のような区画施設や門、井戸の位置などからみる限りでは、十三坪内は南北は基本的に4等分であるが、東西は3等分の区画と4等分の区画が混在していた可能性がある。

一方で、坪内の建物の状況についてみれば、一部は櫛状等で削平されたと思われるが、棟数は他の宅地に比べて特段多い状況ではない。さらに、桁行5間以上の大規模なものは少なく、また廻付の建物も検出例の約1.5割程度に過ぎない。但し傾向としては、同一場所において同様な規模の建物を代替えをしている例が各区画内で見受けられる点や、溝や堀等の区画施設を横断して建てている建物の例が比較的少ない点が指摘できる。こうした傾向に着目して考えるならば、当坪内における上記のような宅地区分は、奈良時代を通じて余り変化していないかたと推測することも可能であろう。なお建物以外の遺構も含めて総括的に検討すると、坪内の数区画においては最大3~4時期の変遷があったと思われる。

このほかに、坪の北辺部分では遺構をほとんど検出することはできなかった。これは十三・十四坪境小路が想定される場所には現在は菩提川が西流しており、河川の氾濫等による遺構面の削平等が生じたためと推測される。

(武田和哉・篠原豊一)

- 1) 奈良市教育委員会「平城京(外京)四条五物四坪の調査 第5・8次」「奈良市埋蔵文化財調査概要報告 新和60年度」1987 参照。
- 2) 上原真人「天平1・2、1・3年の互工房」「研究論集」奈良国立文化財研究所 1984。
- 3) 三好英徳「奈都における平安時代前半期の上屋の様相 一上屋の供養形態を中心とした編年試案一」「奈良市埋蔵文化財調査センター紀要」1992 奈良市教育委員会 1996。
- 4) 平城京内で検出された高床式心の井戸の実態については、筆者「平城京の井戸とその祭記」「奈良市埋蔵文化財調査センター紀要1990」奈良市教育委員会 1991 を参照されたい。

(2) 平城京左京四条四坊十四坪の調査 第347-2・353-1次

I はじめに

平城京左京四条四坊十四坪においては、これまで東辺市第164・168調査が行なわれておらず、東四坊大路および奈良時代の建物群を確認している。今回の2次にわたる調査は坪の西半の様相を明らかにすることを主要な目的とした。前年度からの引続きの事業として坪の北西部に第347次調査第2発掘区、今年度事業として坪の南西部に第353次調査第1発掘区を設けた。両調査区は接しており、遺跡の性格上から両調査成果を合わせて報告する。

調査次数	調査地	面積	調査期間	主要検出遺構
第164次	三条本町1他	1,500m ²	S63.9/26~11/30	東四坊大路 堀立柱建物5棟 井戸1基
第168次	三条本町300他	2,200m ²	S63.12/5~H1.2/28	東四坊大路 堀立柱建物13棟 井戸3基

調査次数一覧表

II 調査地の層相

調査地は一部宅地造成された場所を除いて水田である。したがって、水田面の高さにもよるが、一様に表土下0.1~1.0mまでは作土が堆積している。作土の下底の標高は全域的に63.0m前後である。第347次調査第2発掘区では、西半で作土の下に明灰色砂質土が0.1m前後堆積しているが、東半にはほとんど認められない。この下に暗灰褐色土が0.2m前後堆積している。色調は場所によって若干異なるが、この層には奈良時代の土器片が含まれ、この層の上から掘り込まれている遺構があることから奈良時代の整地層と考えられる。この直下が黄灰色粘土もしくは砂質土の地山となる。地山上面の標高は63.0~62.6mで北東から南西へ緩やかに下っている。第353次調査第1発掘区でもほぼ同様な状況であるが、整地層は北半のみに認められ、その範囲は地山が掘り込まれている。北半整地部分では地山上面の標高は62.5m前後であるが、南半は62.8m前後で、作土直下もしくは茶灰色砂質シルトを0.1m程度挟んで地山となっている。地山の層相は主に黄白色から橙色の砂質土またはシルトであり、特に調査区の南半を東西に横切る菩提川の旧河道以南ではマンガン粒を含む硬い橙褐色シルトとなっている。

III 検出遺構

遺構検出面は第353次調査第1発掘区北半のみ整地層上と地山上面であり、それ以外は全て地山上面である。検出遺構は主なものとして奈良時代の坪内道路4条および側溝、堀立柱建物51棟、堀立柱塀8条、井戸10基、土坑9、土器埋納土坑3などがある。なお、遺構番号については市第164・168次調査から継続して付す。

坪内道路S F 34~37・道路側溝S D 38~44 S F 34は南北方向の道路で、ほぼ坪の東西1/2に位置する。検出部の北半は西へ振れており、両側溝は北に向かって幅が広くなっている。両側溝の心々間距離は2.5m前後で、道路心の座標値はX = -146,855.0、Y = -16.5

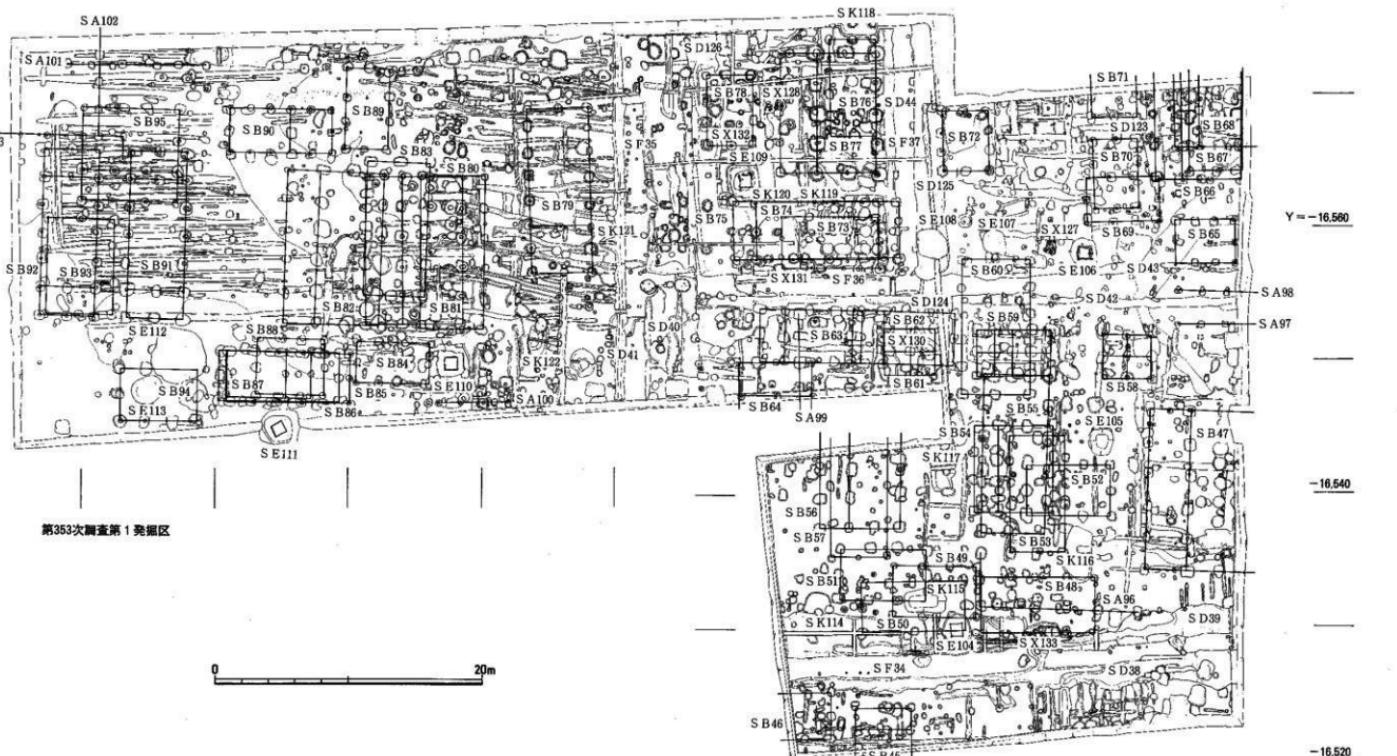
27.4である。S F 35は東西方向の道路で、坪の南北1/2に位置する。両側溝の心々間距離は2.0m前後で、道路心の座標値はX = -146,878.6、Y = -16,563.0である。S F 34との交差点は不明であるが、おそらく両者は接続しているものと考えられ、これらによって坪が大きく4分割されていた可能性が高い。そして4等分されたうちの北西1/4坪のさらに東西1/2の位置にS F 36がある。両側溝の心々間距離は2.0~2.5mで、道路心の座標値はX = -146,865.0、Y = -16,555.8である。そしてさらにS F 36によって1/8坪に区画された北西隅の宅地は、その宅地内の南から南北1/3の位置に東西方向のS F 37があり、最小1/24坪に区割りされた宅地が存在している。S F 37は北側溝が新しい溝に埋められているため、本来の道路幅員は不明であるが、検山路而幅は1.5m前後で他の坪内道路と大差ないことから、道路心の座標値はY = -16,565.0で概ねX = -146,858.5となろう。

以上の坪内道路によって坪北半は少なくとも1/8・1/12・1/24坪の3つの宅地割りが確認でき、東半および南半(1/2か1/4)の宅地割りと合わせて5つの宅地割りが確認できた。なお、坪東半の北から南北1/4の位置に比較的深い東西溝がS D 38と接続して東へ延びている。他の東西薙掘り溝との違いが明確にできなかったため、坪の区画施設とは判断できなかったが、あるいは坪北東部もさらに南北に宅地割りされていた可能性があることを示唆しておきたい。

掘立柱建物 S B 45~95・掘立柱塀 S A 96~103 概要については一覧表にまとめた。建物群は宅地割りごとにまとめており、それぞれの宅地内で建替えが行なわれている。

坪の東半にあたる部分は、第347次調査第2発掘区東端でわずかに認められるだけである。建物は2棟で、S B 38は坪内道路より新しい。坪北西1/4坪はさらに東半1/8坪と東西1/12坪、南北1/24坪に分けられる。1/8坪宅地内には建物18棟、塀4条があり、建物配置は少なくとも4時期の変遷が考えられる。最も大きな建物S B 47は内部に壇の据付け痕跡が10ヶ所認められる。またS B 60は宅地割り以前の建物と考えられる。1/12坪宅地には建物8棟がある。重複関係から3時期以上の建替えが認められる。1/24坪宅地には建物6棟がある。やはり3時期以上の建替えがある。S B 74内部には壇の据付け痕跡と思われる土坑が認められる。南半の宅地は、建物配置からみて、1/4坪利用だった可能性が高い。建物17棟、塀4条があり、建物配置は4時期以上の変遷が考えられる。S B 81とS B 82、S B 91とS B 92は同規模で同様な建物であり、S B 81・S B 91→S B 82・S B 92と建替えられたものと思われる。

全体的に、それぞれの宅地の東西中心軸上に中心建物となる東西棟を配し、その脇に南北棟を配するのを基本としている。東西棟は南北に2棟以上並ぶ場合もあり、坪内道路上による宅地割り以前・以後の建物もいくつか存在しているようである。塀は特に宅地を大きく区画するものは認められず、宅地内の空間を分割するものである。



第347次調査第2発掘区 第353次調査第1発掘区(1/300)

第347次調査第2発掘区

造 墓 号	棟 方 向	櫛 棟 (柄行×梁間)	柄 行 全 長 m (尺)	梁 行 全 長 m (尺)	梁 行 杖 間 寸 法 (尺)	梁 行 杖 間 寸 法 (m)	廻 の 幅 (m)	備 考
SB 45	東西	2 以上 × 2	3.0 以上	4.2(14)	1.5 等 間	2.1 等 間		縦柱建物の可能性あり
SB 46	南北	1 以上 × 2	2.1 以上	3.6(12)	2.1 等 間	1.8 等 間		SD38より新
SB 47	東西	5 × 2 以 上	12.0(40)	5.4 以上	2.4 等 間	2.4	南3.0	豪製付痕跡10ヶ所
SB 48	南北	4 × 2	8.7(29)	4.2(14)	2.1-2-21-21	2.1 等 間		SA96より古
SB 49	南北	3 × 2	6.3(21)	3.9(13)	2.1 等 間	1.8 2.1		SE104より古
SB 50	南北	4 × 2	7.8(26)	3.6(12)	2.1-1-18-21	1.8 等 間		SE104、SK114より古
SB 51	南北	3 × 2	6.3(21)	3.9(13)	2.1 等 間	1.95 等 間		SK115より古
SB 52	南北	3 × 2	6.3(21)	3.9(13)	2.1 等 間	1.95 等 間		SB54より古
SB 53	東西	5 × 2	9.0(30)	4.2(14)	1.8 等 間	2.1 等 間		SB55より古
SB 54	東西	3 × 3	6.3(21)	6.0(20)	2.1 等 間	2.1 等 間	南1.8	SB52より新、SB55より古
SB 55	東西	5 × 2	12.0(40)	4.8(16)	2.4 等 間	2.4 等 間		SB53-54-59-60より新
SB 56	東西	2 以上 × 3	12 以上	6.3(21)	2.1 等 間	2.1 等 間	南2.1	
SB 57	東西	3 以上 × 2	8.1 以上	4.2(14)	2.7 等 間	2.1 等 間		
SB 58	南北	2 × 2	3.6(12)	3.3(11)	1.8 等 間	1.65 等 間		縦柱建物
SB 59	南北	4 × 2	5.7(19)	3.6(12)	15-15-1-2-3	1.8 等 間		縦柱建物
SB 60	東西	5 × 2	10.0	5.0	2.0 等 間	2.0 等 間		
SB 61		2 × 2	3.6(12)	3.6(12)	1.8 等 間	1.8 等 間		
SB 62	南北	4 × 2	7.8(26)	4.2(14)	18-18-1-2-24	2.1 等 間		南1間目間仕切り、SB61-63より新
SB 63	南北	4 × 2	7.8(26)	4.2(14)	19.5 等 間	2.1 等 間		南1間目間仕切り、SB61+SB62より古
SB 64	南北	2 × 1 以 上	5.7(19)	2.4 以上	2.7-3.0	2.4		縦柱建物の可能性あり
SB 65	南北	3 × 2	4.5(15)	3.3(11)	1.5 等 間	1.65 等 間		SD43より古
SB 66	東西	2 以上 × 3	4.8 以 上	6.3(21)	2.4 等 間	2.1 等 間	南2.1	SB67-69 + SD123より新
SB 67	東西	3 以 上 × 2	6.3 以 上	3.9(13)	2.1 等 間	1.8-2.1		SB66より古・SB68より新
SB 68	東西	3 以 上 × 2 以 上	4.5 以 上	2.4(8)	1.5 等 間	2.4	南1.8	SB67より古
SB 69	南北	3 × 2	5.4(18)	3.6(12)	1.8 等 間	1.8 等 間		SB66 + SD123より古
SB 70	東西	3 × 2	5.4(18)	3.6(12)	1.8 等 間	1.8 等 間		
SB 71	東西	1 以上 × 2	1.8 以 上	3.6(12)	1.8	1.8 等 間		
SB 72	東西	3 × 2	4.5(15)	3.6(12)	1.5 等 間	1.8 等 間		SD125より新
SB 73	南北	3 × 2	5.4(18)	3.6(12)	1.8 等 間	1.8 等 間		SB74 + SD43より新
SB 74	南北	4 × 2	10.8(36)	4.2(14)	2.7 等 間	2.1 等 間		SD44より新、遺構付痕跡?
SB 75	南北	4 × 2	10.8(36)	4.2(14)	2.7 等 間	2.1 等 間		
SB 76	東西	4 × 2	7.5(23)	3.6(12)	21-1-1-1-3	1.8 等 間		西1間目間仕切り、SB77より古
SB 77	東西	4 × 3	9.0(30)	7.5(25)	2.25 等 間	2.1-2.1	南3.0	SB76より新
SB 78	東西	3 × 2	5.4(18)	3.6(12)	1.8 等 間	1.8 等 間		SD125より新
SB 79	東西	7 × 2	12.6(42)	4.8(16)	1.8 等 間	2.4 等 間		東1間目間仕切り
SB 80	東西	5 × 2	11.5	4.8(16)	2.3 等 間	2.4 等 間		SB81 + 83より古
SB 81	東西	5 × 3	11.25	7.5(25)	2.25 等 間	2.4-2.1	南3.0	SB80より新、SB82 + 83より古
SB 82	東西	5 × 3	11.25	6.9(23)	2.25 等 間	2.1-2.1	南2.4	SB81より新
SB 83	東西	4 × 2	9.9(35)	4.8(16)	24-2-27-24	2.4 等 間		SB80 + 81より新
SB 84	南北	3 × 2	5.7(19)	3.0(15)	1.8-2-1-3	1.5 等 間		
SB 85	南北	5 × 2	9.0(30)	3.6(12)	1.8 等 間	1.8 等 間		SB86 + 87より新、SB88より古
SB 86	南北	5 × 2	9.0(30)	3.6(12)	1.8 等 間	1.8 等 間		SB87より新、SB85 + 88より古
SB 87	南北	3 × 2	6.3(21)	3.6(12)	2.1 等 間	1.8 等 間		SB58 + 86 + 88より古
SB 88	南北	3 × 2	5.4(18)	4.2(14)	1.8 等 間	2.1 等 間		SB85 + 86 + 87より新
SB 89	東西	3 × 2	6.3(21)	3.6(12)	2.1 等 間	1.8 等 間		
SB 90	南北	5 × 2	7.8(26)	3.6(12)	14-1-1-1-5	1.8 等 間		北2間目間仕切り
SB 91	東西	6 × 2	12.6(42)	4.2(14)	2.1 等 間	2.1 等 間		東西各1間目間仕切り
SB 92	東西	6 × 2	12.6(42)	4.2(14)	2.1 等 間	2.1 等 間		東西各1間目間仕切り、SB93より新
SB 93	東西	3 × 2	7.3(14)	5.4(18)	2.4 等 間	2.7 等 間		SB92より古
SB 94	南北	3 × 2	6.3(21)	4.2(14)	2.1 等 間	2.1 等 間		SE112より古
SB 95	南北	3 × 3	7.3(24)	7.2(24)	2.4 等 間	2.4 等 間	東2.4	
SA96	南北	4 × 2	12.0(40)	4.2(14)	3.0 等 間	2.1 等 間		南端で西へ曲がる
SA97	南北	2 以 上	3.6 以 上		1.8 等 間			
SA98	南北	2 以 上	3.6 以 上		1.8 等 間			
SA99	東西	3 以 上	5.4 以 上		1.8 等 間			
SA100	南北	3	5.4(18)		1.8 等 間			
SA101	南北	5	10.5(35)	31-1-1-1-3				
SA102	東西	3 以 上	6.3 以 上		2.1 等 間			SA103と接続
SA103	南北	4 以 上 × 1	7.8 以 上	1.8(6)	1.95 等 間	1.8		北端で東へ曲がる

遺構番号	掘 型			枠		主要出土遺物	備 考
	平面形	平面横幅 (m)	深さ (m)	平面形・構造	内径 (m)	水槽・ 蓄水装置等	
S E104	梢円形	東西 2.2 南北 2.0	1.2	方形縦板組	0.9 × 0.9		後の縫 S B49より新 裏込め下底に織
S E105	隅丸方形	東西 1.9 南北 1.7	1.0				墨青土器 製塙土器
S E106	不正円形	東西 1.9 南北 2.0	1.5	方形縦板組 横棟留	0.8 × 0.8		三彩・製塙土器 桃の縫
S E107	円 形	直徑 1.8					枠抜き取り
S E108	隅丸方形	東西 2.1 南北 2.1	1.3		0.85 × 0.85		製塙土器
S E109	隅丸方形	東西 2.2 南北 2.2	2.3	方形縦板組 横棟留横棟留	0.95 × 0.95	鉄釘	底込みに円窓多し S D120より新
S E110	隅丸方形	東西 2.0 南北 2.1	10.1	方形縦板組 横棟留	0.8 × 0.8		井戸は横板組(井艶 組)井口材の軸用 井口材の軸用
S E111	円 形	直徑 2.8	1.3	方形縦板組?			壺・曲物底板 梳插入小壺
S E112	円 形	直徑 4.0	2.3				製塙土器・刀子の崩 鉄釘
S E113	円 形	直徑 2.4	0.7				枠抜き取り。刺抜 きのある柱あり。

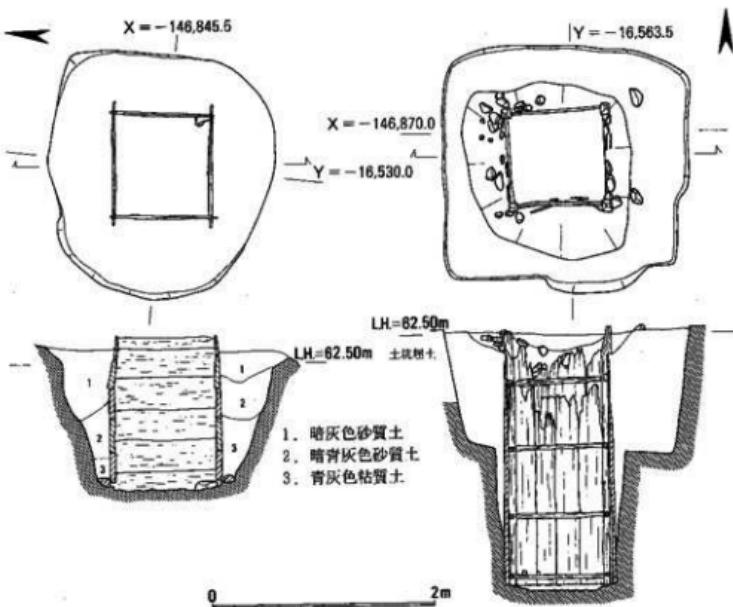
井戸 覧表

井戸 S E104~113 概要については一覧表にまとめた。このうち最も古いと思われるものはS E111で、8世紀中頃の土器が多く出土した。下底の横棟のみが残存するが、四隅がそれぞれ東西南北に位置し、他の井戸枠と45°向きが異なっている。S E112は枠が抜き取られていたが、埋土から楔が数本出土しており、円形縦板組もしくは一本半割削抜きの井戸であったと考えられる。各宅地内には1基以上の井戸があり、枠を残しているものは各1基づつ認められる。このことは、各宅地内において1時期に使用された井戸が1基のみであり、宅地内の建物替えなどによって井戸が移設もしくは同時に作り替えが行なわれるたびに、枠材が再利用されていったことを推測させる。そして各宅地内に1基ずつ存在する、枠材ごと廃棄された井戸は、その後その宅地の単位が大幅に変更されたか、居住空間として用いられなくなったことを示すと考えることもできる。

土坑 S K114~122 S K114はS F34の南端西脇に掘られた、東西約3.0m、南北8.5m以上、深さ0.1~0.2mの平面長方形の土坑。さらに南へ続き、溝状になると推測される。S D39より新しい。S K115は東西1.5m、南北3.0mの平面長方形の土坑。底部北半はさらに回り小さな掘形で深くなってしまい、最深部で深さ約0.65m。S K116は長径4.0m、短径2.0m、深さ0.2mの平面梢円形の土坑。S K117は東西4.0m以上、南北2.0m、深さ0.1~0.15mの平面長方形の土坑で、さらに西に続く。埋土から奈良三彩の獸脚が出土した。以上は全て建物より新しい時期のものと考えられるが、性格は不明である。S K118は東西1.0m以上、南北2.5m、深さ約0.3mの平面隅丸方形の土坑になると考えられる。埋土から、環

書で蓮華の描かれた須恵器杯蓋が出土した。SK119は東西約2.5m、南北約2.0m、深さ約0.3mの平面台形状の土坑。埋土はほぼ均等な厚さで5つの層が水平に堆積している。最下層は炭層で、壁面から底面にかけて土坑の内面を覆っている。南北の壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平らで、断面は長方形を呈する。一見窯跡のようであるが、埋土に遺物がほとんどなく、あるいは炉などの防湿施設とも考えられる。SK120は東西約2.8m、南北約4.0m、深さ0.7mの平面長方形の土坑。埋土は小礫を多く含み、遺物を含まない。SD126より新しく、SE109より古い。SK121は東西約1.0m、南北1.3m以上の平面椭円形状の土坑で、北端はSD41によって壊されている。底面は北へむかって下っており、最深部は深さ0.15mでSD41の底とほぼ同じになる。埋土に炭が混じり、土器片が多く含まれることから、ゴミ処理用の土坑と考えられる。SK122は東西2.0m、南北1.3m、深さ0.5mの平面隅丸長方形の土坑。南辺に偏って急激に深く掘り込まれており、段をなす掘形となっている。これらの土坑については、現在出土遺物が整理中であるため詳細な時期・性格は不明である。

溝 SD123~126 SD123は幅約1.2m、長さ7.5m以上、深さ0.2m前後の東西素掘り溝で、



井戸SE104 平面・立面図 (1/50)

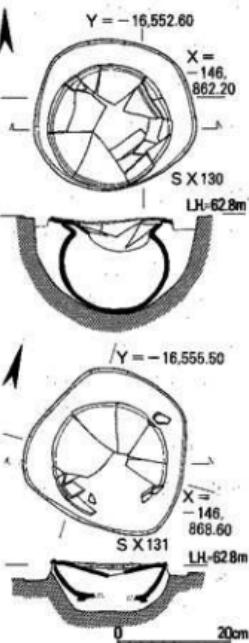
井戸SE109 平面・立面図 (1/50)

西端が広がっており、さらに西へ続く。1/12坪宅地のほぼ南北1/2の位置にあり、宅地割りのための溝の可能性がある。SD124は最大幅1.6m、長さ6.0m以上、深さ約0.1mの東西素掘り溝。幅が一定でなく、平面形は不定形であり、東端はSD42に接している。埋土上面には拳人の跡が多数散っているが、溝自体からは遊離している。土坑SK117とした遺構と一連のものとなる可能性もある。SD125は幅2.4m、長さ19.0m以上、深さ約0.3mの東西素掘り溝。坪内道路SF37の北に沿っており、SD124とは坪内道路SF36を挟んで西側に位置する。建物SB72や井戸SE108より新しく、坪内道路が無くなつてからの区画施設の可能性がある。SD126は幅約2.0m、長さ15.0m以上、深さ約0.3mの東西素掘り溝。建物SB78や土坑SK120より古く、坪内道路による宅地割り以前の区画施設と考えられる。

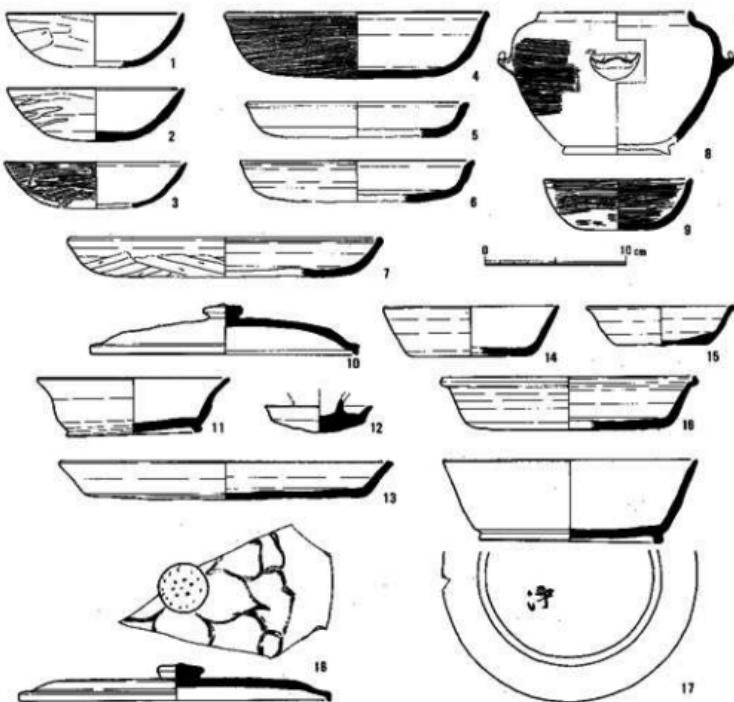
S X 127~133 S X 127~129は拳大の円窓と上器および瓦片の集中部である。いずれも1.0m×1.5m程度の長方形で平坦に広がっており、掘形ではなく、性格は不明である。個々に若干の違いがあり、S X 127・128は窓が多く、S X 129は土器・瓦が多い。S X 129には9世紀中頃の上器が含まれている。S X 130~132は土器埋納土坑である。S X 130は直径約0.23m、深さ0.13mの平面円形の掘形に、須恵器杯蓋で塞いだ土器壺Aを納めたものである。S X 131は直径約0.24m、深さ0.09mの平面円形の掘形に、須恵器杯蓋で塞いだ須恵器杯Bを納めたものである。内部には和同開珎2枚が入れられており、坪内道路SF36上に埋められていた。S X 132は直径約0.14m、深さ0.08mの平面円形の掘形に土器壺壺Aを納めたもので、整地層の上から掘り込まれている。これらの上器内の土壤は未分析であるが、特にS X 131はその出土位置から、胞衣壺としての可能性が考えられる。S X 133は長さ3.6m以上、幅約0.1m、厚さ約0.01mの薄板が、坪内道路SF34の西側溝SD39の西壁に沿って横向きに立てられているものである。SD39より新しく、溝の護岸用ではないと思われるが性格は不明である。

IV 出土遺物

出土遺物のほとんどは奈良時代の須恵器・土師器で、総数は第347次調査第2発掘区が整理箱94箱、第353次調査第1発掘区が同139箱である。現在整理中であるため一部についてのみ報告する。



土器埋納土坑SX130・131 平面・断面図(1/10)



出土土器 (1/4、1~8は土師器、9は黒色上器、10~18須恵器)

土器類は18を除きS E104から出土したものである。黒色上器碗(9)は奈良時代末のものと考えられる。18はSK118から出土した須恵器杯蓋で、蓮華を模したと思われる文様が墨書きされている。この他、坪内道路の側溝からは主に8世紀後半の土器類が出土している。瓦類については、丸瓦・平瓦が少量出土しているのみである。この他井戸枠内などから、刀子の柄、蓋巾、箸等の木製品や帶金具、鉄釘等の金属製品が出土している。第347次調査第2発掘区では萬年通寶1枚、神功開寶4枚が出土している。また両発掘区を通じて石鎧4点、他25点の安山岩製の刺片が出土している。

V まとめ

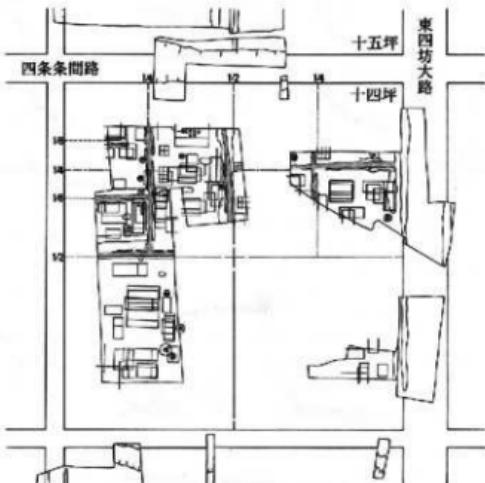
今回の調査成果として特筆すべきは、坪内道路の検出と宅地割りの様相である。当坪内は道路によって宅地が少なくとも4通りの大きさに区画されていたことが確認できたが、そこにはいくつかの問題点もある。ひとつは最小の宅地が1/24に区画されていることである。これまでの発掘調査や文献史料から、平城京での宅地1/32坪を最小単位としており、

その次に小さい宅地はその倍の1/16坪が知られている。1/24坪宅地として明確なものは現在知られていないようであり、当時の宅地班給制度を考えるうえでも貴重な例と言えるが、これが特殊なものか、ある程度普遍的なものは類例の増加を待って検討しなければならないだろう。

さらに問題となる点は、坪内道路の多さである。今回の状況を鑑みて、第168次調査の遺構検出状態を見てみると、同様に地山が帶状に削り残された部分が認められる。参考までにそれらを示したのが右上の遺構概念図である。これらが仮に宅地の区画施設だとしても、今回検出のものを含めて全てが道として機能していたかどうかには疑問が残る。遺構検出時の残存状態からは、路面であったのか土塀があったのかは判断できなかった。しかし今回検出した遺構について敢えて坪内道路とした理由は、まず1/8以下の宅地割りを土塀で区画していた例が確認されておらず、それが考えにくいこと、S F 36上に胞衣壺の可能性のある土器が埋納されていたことがあげられる。また、東四坊大路に面した坪の東半では、宅地割りの状態によっては坪内道路を必要とする場合が十分考えられる。しかも現在坪の南辺を流れる菩提川の当時の河道によっては、開門できる方向がさらに制約されていた可能性も考えられるのである。ただし、それでも西端の1/24坪宅地が道路によって区画される必要性は理解し難く、今後の検討課題とせざるをえない。

以上のような問題点は残るもの、建物や井戸の配置からみて十四坪内が区画施設によって分割されていた時期があるのは間違いないものと考えられる。全体的に3~4時期の遺構の重複関係が確認でき、整然とした区画が行なわれていたのは半ばから後半の2時期くらいの間である。区画自体が一齊に行なわれたか随時分割されたかは遺構・遺物からは判断できなかったが、最も出土量の多い、坪を南北に2等分するS F 35の南側溝の上器は8世紀後半のもので、坪内の区画が行なわれていたのは奈良時代後半から平安京遷都までの間くらいであったと考えられよう。

(松浦五輪美・細川富貴子)



十四坪遺構概念図 (1/2,000)

(3) 平城京左京四条四坊十五坪の調査 第318-1・3、325-2~7、347-1次

I 調査の目的

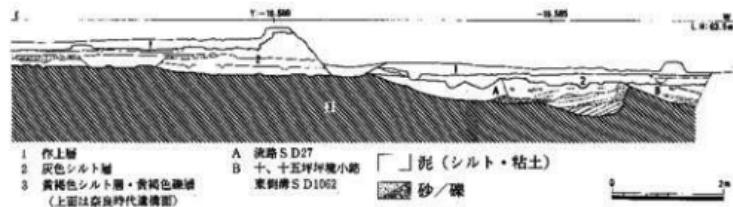
平城京左京四条四坊十五坪の調査は、市民ホール建設予定地において、十五坪西半部の宅地利用の様相の解明を主な目的として、平成3年度から平成8年度にかけて下記の表に示す発掘区を設定して実施した。今回報告する第318次調査第1・3発掘区、第325次調査第2~7発掘区、第347次調査第1発掘区は、平成6~8年度に主に十五坪西南部にあたる地域で実施したものである。

調査次数・発掘区	調査地	調査面積	調査期間	既存の概要報告
第234次	三条官前町242-2他	500m ²	H 3+10+1 ~ H 3+12+7	吉古市埋蔵文化財調査報告書：平成3年度
第253次	二条官前町242-2他	1,340m ²	H 4+6+1 ~ H 4+9+18	吉古市埋蔵文化財調査報告書：平成4年度
第318次	三条官前町305	969m ²	H 6+12+5 ~ H 7+3+7	
第325次	二条官前町314-1他 三条官前町311-1他 三条官前町315-8他 二条官前町238-1他 三条官前町238-3 二条官前町238-3	1,284m ² 533m ² 25m ² 707m ² 532m ² 309m ²	H 7+4+25 ~ H 7+8+11 H 7+4+25 ~ H 7+8+11 H 7+4+25 ~ H 7+8+11 H 7+7+18 ~ H 7+9+27 H 7+10+20 ~ H 7+12+6 H 7+12+7 ~ H 8+2+13	
第347次	三条官前町313-2他	870m ²	H 8+4+23 ~ H 8+6+28	

平城京左京四条四坊十五坪内の調査一覧

II 調査地の地形と層相

調査地は、菩提川によって形成された扇状地の扇端部にあたり、東から西へ下る緩傾斜地となっている。現状は、水田・畑地及び旧国鉄宿舎に伴う造成地である。調査地の地層は、水田・畑地では上から作土層（厚さ0.2m）、2~3層の灰色シルト層（厚さ0.2~0.4m）があり、黄褐色シルト層や扇状地の疊州の一部である黄褐色疊層となる。黄褐色シルト層や黄褐色疊層の上面に奈良時代の遺物包含層がみられる部分もある。造成地では作土上に盛土がなされている。灰色シルト層・黄褐色シルト層の各上面には乾田が営まれていたことを示す橙色の斑駁がみられる。奈良時代の遺構では、黄褐色シルト層と黄褐色疊層の上面（標高62.3~63.3m）である。なお、第325次調査第7発掘区では、黄褐色シルト層以下2.1m分の地層を確認しており、最下位の腐植混じりシルト層について、層中に含まれた流木片の¹⁴C年代測定と花粉・珪藻遺骸分析を行った。（付録参照）



第325次調査 第6発掘区南壁上部断面図 (1/100)

III 検出遺構

遺構検出は、奈良時代の遺構面である黄褐色シルト層と黄褐色礫層の上面で行った。検出した遺構には、古墳時代、奈良・平安時代及び中・近世のものがある。

古墳時代の遺構 流路1条がある。流路SD27は、第325次第2・6発掘区で検出した南東から北西に流れる流路で、幅3~7m、深さ0.5mである。埋土は、上位が奈良時代の土器片と黄褐色シルトブロックを含む褐灰色シルト、下位が古墳時代中・後期の土器片を含む褐灰色砂・礫である。平城京造営の際に埋め立てられたものとみられる。

奈良・平安時代の遺構 坪境小路東側溝、掘立柱建物29棟、掘立柱門・塀18条、溝6条、井戸4基、土坑3、池状遺構2がある。重複関係から3時期以上の変遷が認められる。

条坊闡連遺構 十・十五坪坪境小路東側溝SD1062は、幅3~4.2m、深さ0.2~0.3mの素掘りの溝である。溝底は北から南に向かって低くなり、その標高は61.9~62.3mである。埋土は奈良時代の瓦・土器片を含む灰色シルトである。溝心の国土座標値は、X = -146,672.0, Y = -16,587.2である。なお築地や雨落ち溝は、関連する遺構が検出されず不明である。また、第325次第3発掘区では四条条間路が予想されたが、後述する中世の流路SD91があり、関連する遺構は検出されなかった。

建物SB28~56、門SB59~62・69、塀SA57・58・63~68・73・74 主軸の方向や規模等については、一覧表に示すとおりである。なお一覧表には、第234・253次調査で確認した遺構で、今回の調査の結果解釈を訂正したものも記載した。

これらの遺構のうち、互いに重複して同時併存があり得ないものは下記の通りである。

先後関係がわかるもの：SB32→SB33 SB42→SB43 SB52・53→SB54

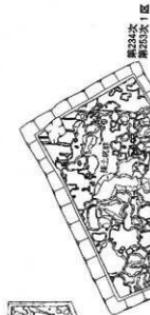
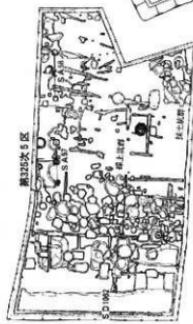
(旧→新) SB72→SB51

先後関係が不明のもの：SB29-SB31 SB31・32-SA61 SB32-SA62

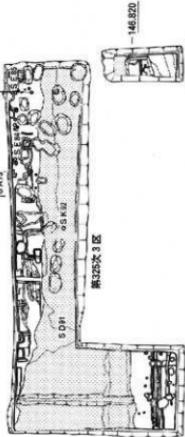
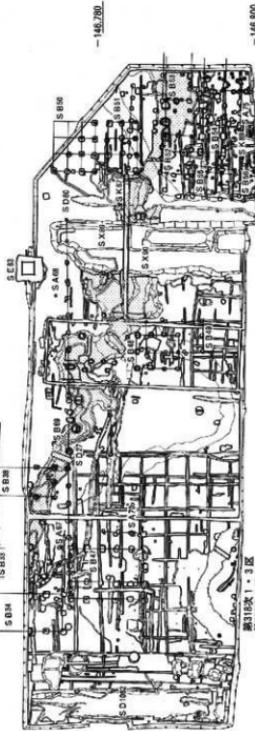
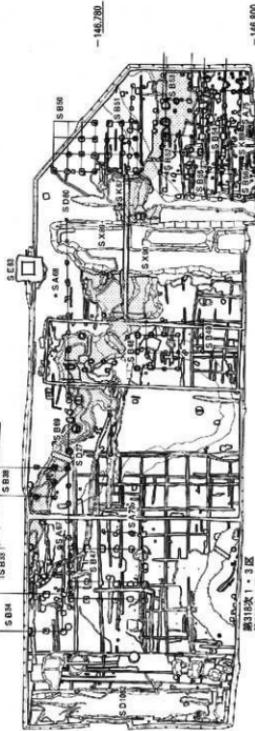
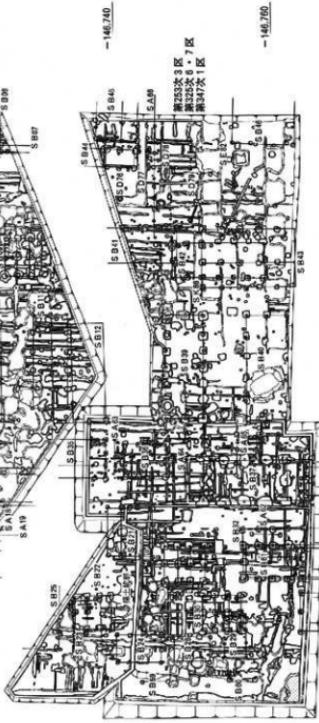
SB37-SB38 SB41-SA66 SB47-SA67

SB48-SB49 SB54-SA74 SB55・56-SA61

建物には、柱筋を揃えて建てられたものがある。建物SB27・28、SB31・33・46は、いずれも東側柱列を揃えて南北に並ぶ。また、建物SB30・34も第253次調査第3発掘区で検出した建物SB22と東側柱列を揃えて南北に並ぶ。建物SB35・36は西側柱列を揃えて南北に並ぶ。建物SB37・43は北妻柱列を掘立柱建物SB39の南側柱列と揃えている。建物SB39・40は、第253次調査第1発掘区で検出した建物SB10・12と西妻柱列を、建物SB11と東妻柱列をそれぞれ揃えて南北に並ぶ。建物SB42は、第234次調査及び第253次調査第1発掘区で検出した建物SB01・08・09と東側柱列を揃えて南北に並ぶ。建物SB41・43は東側柱列を揃えて南北に並ぶ。建物SB41・43は東・西妻柱列を揃えて南北に並ぶ。



第318次調査 第1・5発掘区、第325次調査 第2～7発掘区、第347次調査 第1発掘区 這撲平面図 (1/400)



北

-16.520

-16.540

-16.560

Y = -16.580

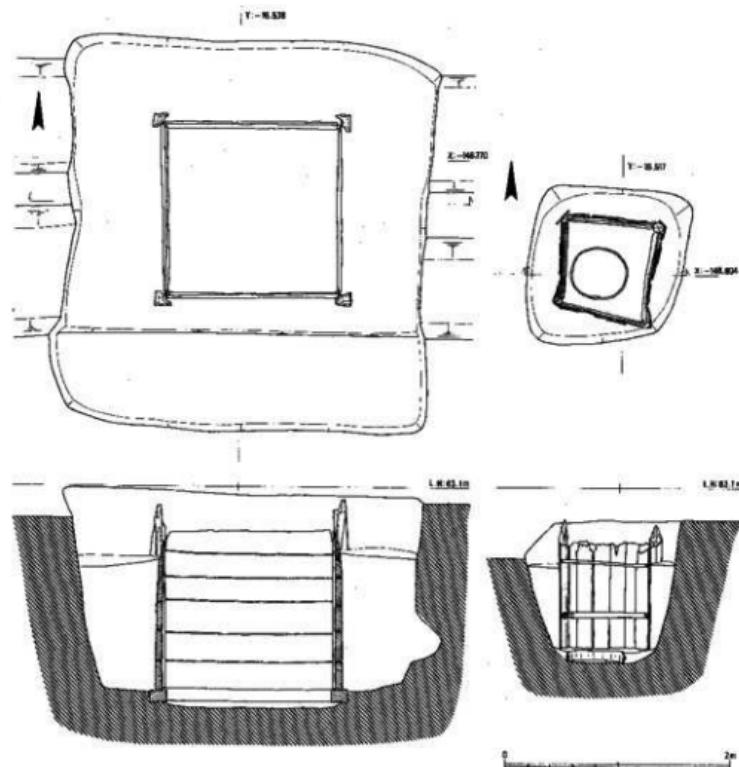
X = -146.880

屋 番 号	棟 方 向	櫛 構 造	桁 行 数 (桁行×架間)	桁行全長 m(尺)	梁行全長 m(尺)	梁行柱間 寸法(m)	梁行柱間 寸法(m)	廊の出 (m)	備 考
S B12	東西	6 × 3	12.6(42)	4.2(14)	2.1等間	2.1等間	北2.4		第325次調査で西妻柱列を確認
S B21	東西	3 × 3	6.3(21)	3.9(13)	2.1等間	1.95等間	北1.8		前S A21 第325次調査結果による解説変更
S B24	南北	3 × 2	5.7(19)	3.6(12)	1.5-2.1-2.1	1.8等間			第325次調査で南北部を確認一部解説変更
S B28	南北	3 × 2	4.5(15)	3.3(11)	1.5等間	1.65等間			
S B29	東西	3 × 2	5.4(18)	2.7(9)	1.6等間	1.35等間			
S B30	南北	3 × 2	4.8(16)	4.5(15)	1.5-1.8-1.5	2.25等間			総柱建物
S B31	南北	3 × 2	5.1(17)	4.5(15)	1.8-1.8-1.5	2.25等間			総柱建物
S B32	南北	5以上 × 3	7.5以上	4.2(14)	1.5-1.8-3等間	2.1等間	東2.1		
S B33	南北	5以上 × 2	7.5以上	3.9(13)	1.5-1.8-3等間	1.95等間			S B32より古い
S B34	南北	(5) × 2	10.8(36)	4.8(16)	1.5-2.4-4.6	2.4等間			南北2間分と北妻柱列を確認
S B35	南北	1以上 × 3	1.8以上	3.3(11)	1.65等間	西1.5			
S B36	南北	3 × 2	5.4(18)	4.2(14)	1.8等間	2.1等間			
S B37	南北	5 × 2	10.2(34)	5.1(17)	2.55等間	2.55等間	南3.0		身舎に床束あり
S B38	南北	(4) × 2	9.6(32)	3.6(12)	(2.4等間)	1.8等間			南北1間分と北妻柱列を確認
S B39	東西	6 × 2	12.9(43)	4.8(16)	1.4-1.1-5等間	2.4等間			
S B40	東西	5 × 2	13.5(45)	5.4(18)	2.7等間	2.7等間			
S B41	南北	4以上 × 2	7.2以上	4.5(15)	2.4等間	2.25等間			
S B42	南北	6 × 2	11.4(38)	4.2(14)	1.5-2.5-2.1	2.1等間			S B41・44より古い
S B43	南北	5 × 3	12.0(40)	4.2(14)	2.4等間	2.1等間	西3.0		
S B44	南北	3以上 × 1	3.3以上	2.1(7)	1.65等間	2.1			
S B45	東西	2以上 × 3	2.4以上	3.3(11)	1.85等間	南1.8			
S B46	南北	3 × 2以上	7.8(26)	2.1(11)	3-2.4-2.4				
S B47	南北	5 × 3	9.3(31)	4.2(14)	2.1-1.8-4等間	2.1等間	西2.1		
S B48	南北	3 × 2	5.4(18)	4.2(14)	1.8等間	2.1等間			
S B49	南北	3 × 2	7.2(24)	3.9(13)	2.4等間	1.95等間			
S B50	東西	3 × 3	6.3(21)	5.4(18)	2.1等間	1.8等間			総柱建物
S B51	東西	3 × 2	6.3(21)	3.6(12)	2.1等間	1.8等間			総柱建物
S B52	東西	3 × 2	4.8(16)	3.6(12)	1.5-1.8-1.5	1.8等間			S B55より古い
S B53	東西	3以上 × 2	3.0以上	3.6(12)	1.5等間	1.8等間			
S B54	東西	5以上 × 3	8.7以上	4.8(16)	1.5-1.5-14等間	2.4等間	南2.7		
S B55	南北	3 × 2	5.1(17)	3.6(12)	1.5-1.5-1.8	1.8等間			
S B56	南北	2以上 × 2	1.8以上	3.0(10)	1.5等間				
S A67	東西	2	4.8(16)		2.4等間				
S A58	東西	2	6.0(20)		3.0等間				
S B59	南北	1	4.2(14)						門の可能性
S B60	南北	1	4.2(14)						門の可能性
S B61	南北	2	7.2(24)		3.6等間				門の可能性
S A62	南北	1	4.2(14)						
S A63	東西	2	4.8(16)		2.4等間				
S A64	南北	8	19.2(64)		1.5-1.5-1.5-1.5-1.5-1.5-1.5-1.5				S A63・66と直交
S A65	東西	3	6.3(21)		2.1等間				
S A66	東西	9以上	14.4以上		1.5-1.5-1.5-1.5-1.5-1.5-1.5-1.5-1.5				
S A67	東西	8	21.6(72)		2.7等間				
S A68	東西	10	28.2(94)		西から2.7×8間-3.3×2間				S A70と接続
S B69	東西	1	4.8(16)						門の可能性
S A70	南北	3	6.3(21)		2.1等間				
S A71	東西	2	6.0(20)		3.0等間				
S A72	東西	7	13.244(○)		西から5.1×3間-1.8×5間				
S A73	南北	4以上	7.2以上		2.4等間				
S A74	南北	(6)	14.4(48)						
S A75	東西	2	3.612(○)		1.8等間				

建物・廊・窓表

遺構番号	掘形			枠 平面形・構造 内法 水槽・ 遮水装置等	主要出土遺物	備考	
	平面形	平面規模 (m)	深さ (m)				
SE79	隅丸方形	東西 2.0 南北 2.0	1.7	方形縦板組構 柱留の可能性	1.3 × 1.3		枠下設備材のみ 残存
SE80	隅丸方形	東西 3.2 南北 3.4	1.8	方形横板組構 柱留	1.5 × 1.5	土器類(須恵器、土師器)、 骨器、石器、鐵物、萬年 鉛錠	
SE81	隅丸方形	東西 1.4 南北 1.4	1.3	方形縦板組構 柱留残留	0.8 × 0.8	曲物(径0.5) 土器類(須恵器、 土師器)	
SE82	円形	直径 1.4	1.5	方形縦板組構 柱留	0.8 × 0.8		枠材最下位と構材 の一部のみ残存

井戸一覧表



井戸SE83(左)・84(右) 平面・立面図 (1/50)

なお、建物S B32は建物S B31の後身建物とみられる。建物S B43の北西隅の柱穴は、後述する平安時代初頭の土坑S K86に破壊されている。堀S A68の東から2番目の柱穴は、後述する池状遺構S X89の平安時代初頭の堆積層上面から掘り込まれている。建物S B39の柱穴からは文字瓦が出土した。

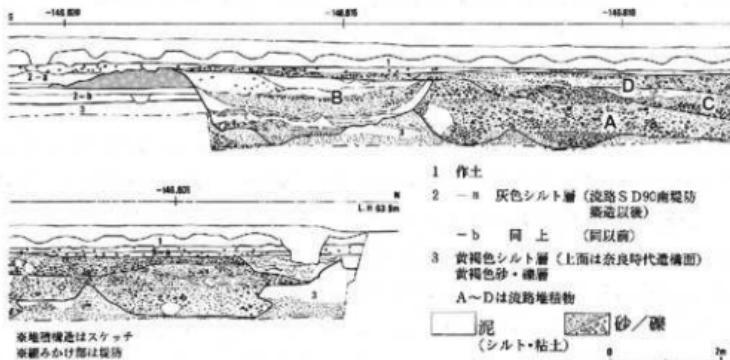
溝S D76～81 溝S D76は第347次調査第1発掘区の北東部で検出した南北方向の溝で、溝の南端部は東西方向の溝S D77の西端部とL字状に接続する。溝S D78は溝S D77の南に1.8m離れて平行に掘削された東西方向の溝で、溝の東端は溝S D76の南延長上にある南北方向の溝S D79の北端部とL字状に接続する。溝S D80は第325次調査第2発掘区で検出した南北方向の溝で、位置は溝S D76・79の南延長上にあたる。いずれも素掘りの溝で、幅0.3～1.8m、深さ0.1～0.4mである。また、埋土は奈良時代の土器片を含む灰色シルトである。溝S D76・79・80の位置は、第168次調査等で得られた東四坊大路の道路心の西方約67mで、十五坪の東西中軸線付近にあたる。また、溝S D77・78の位置は、第199次調査で得られた十五・十六坪坪境小路の道路心の南方約67m付近で、十五坪の東西中軸線付近にあたる。溝S D77・78間の空間地は坪内道路の可能性がある。

溝S D81は、幅1.0m、深さ0.1mの素掘りの溝で、埋土中から銅製の鉗具が出土した。

井戸S E81～84 規模や構造等については、一覧表に示すとおりである。いずれの井戸も黄褐色シルト層の下の疊層まで掘り込んで作られており、疊層中の被压地下水を取水したものとみられる。井戸S E81・84は井戸枠が抜き取られている。井戸S E82・83の井戸枠内からは奈良時代末～平安時代初頭の土器類が出土した。

土坑S K85～87 土坑S K85は、建物S B43の北西隅の柱穴を破壊して掘削された径0.8m、深さ1.2mの平面円形の土坑で、埋土は暗灰色粘質土である。埋土中から奈良時代末～平安時代初頭の土器が出土した。土坑S K86は、建物S B51の西側に位置する東西3.0m、南北5.4m、深さ0.4mの平面長方形の土坑で、埋土は暗灰色シルトである。埋土中から奈良時代末～平安時代初頭の土器が出土した。土坑S K87は、建物S B56の東側に位置する東西2.4m、南北3.3m以上、深さ0.3mの平面長方形の土坑である。埋土は奈良時代の土器片と炭粒を含む灰色シルトで、炭粒は下位に集中する。

池状遺構S X88・89 池状遺構S X88は、溝S D80の西側に位置する。平面長方形で、規模は東西4.5m、南北30m、深さ0.1mである。南から20mまでの底面には東西2.5m、南北10mの平面長方形の掘形が2箇所南北に並ぶ。掘形の底面からの深さは、北側が0.8m、南側が0.4mである。南端部中央には幅0.6m、深さ0.2mの南北方向の素掘りの溝が接続する。埋土は主に灰色系のシルトである。ただし、北側の掘形の下位の埋土は砂とシルトで形成されており、北から南へ水が流れたことを反映する互層状の堆積構造がみられる。位置関係を考慮すれば、当初は前述の流路S D27と接続していた可能性がある。埋土中から



第325次調査 第3発掘区西壁 流路S D90断面図 (1/100)

奈良時代半ば～平安時代初頭の土器が出土した。また、北側の掘形の底面から籠とみられる編物が出土した。池状遺構S X90は、池状遺構S X89を西側へ東西3m、南北27mにわたって拡張したものとみられる。深さは0.2mで、埋土は池状遺構S X89と同じである。南端部中央には池状遺構S X89と同様に幅0.6m、深さ0.2mの南北方向の素掘りの溝が接続する。溝内には木樋の底板が残っていた。

中・近世の遺構 流路1条、土坑と耕作に伴うとみられる素掘りの溝がある。

流路S D91 流路S D91は、第325次調査第3発掘区で検出した流路で、平城京四条通の推定地を東から西へ流れる。幅は発掘区西端部では15mである。埋土は主に砂と疊で、奈良時代の土器片を含む。底面は奈良時代遺構面より低い。発掘区西壁の断面では、流路内の埋積が進むにつれ次第に岸寄りを流れるようになり、最終的には埋没する過程が観察できた。堤防は南岸側で確認した。黄褐色シルトの盛土で構築されたもので、幅2.5m、高さ0.5mである。構築された際の遺構面は奈良時代遺構面上に堆積した灰色シルト層の上面である。北岸側は、発掘区東・西壁の断面観察では認められなかった。直線的に流れることや堤防が盛土で構築されていることから、人工的に掘削されたものと考えられる。流路上面で検出した土坑(S K92)からは平安時代後期の瓦器軸が出土した。

なお、土坑は主に奈良時代遺構面上に堆積した灰色シルト層上面から掘削されている。掘削が黄褐色シルト層にとどまるものとそうでないものがある。前者は採土坑とみられ、複数が重複して群在する傾向がある。後者は耕作に伴うものとみられる。(安井宣也)

IV 出土遺物

出土遺物には、縄文時代の土器・石器、古墳時代の土器、奈良時代の瓦・土器・木製品・石製品・金属製品・錢貨、中・近世の土器がある。以下主なものについて報告する。

瓦類 出土瓦類の大半は丸瓦、平瓦であるが、軒丸瓦21点、軒平瓦16点、埠4点、面戸瓦1点、熨斗瓦1点、文字瓦1点を含む。ここでは軒瓦、文字瓦について報告する。軒丸瓦の内訳は、6233A b 1点、6275



新型式軒瓦 (1/4)

I 1点、6279A 2点、6282B a 1点、6282B 2点、6301A 1点、6301B 1点、6308B 1点、6314F 6点、型式不明4点、平安時代以降1点である。軒平瓦の内訳は、6652A 1点、6663A 1点、6663B 1点、6664F 1点、6667A 1点、6668A 1点、6691A 3点、6702A 1点、6721D 2点、6734A 1点、型式不明2点、新型式1点である。軒平瓦新型式は、左側部分の破片であるが、三回反転均整唐草紋の左第2、第3単位部分と思われる。唐草第3単位の主葉が界線に接続せずに巻き込み、唐草第3単位の左上に一本の遊離した支葉をもつ点が特徴的である。上下外区及び脇区には珠紋をめぐらす。頭は段頭である。平瓦部凸面に横位の網叩き目が残る。調整は平瓦部凸面の瓦当近くと頭部を横方向にナデ、平瓦部凹面を横方向にヘラケズリする。文字瓦は建物S B39から出土した。丸瓦の凸面玉縁近辺に「終」の刻印がある。刻印「終」にはaからgまでの7種類が知られているが、今回の出土例はcである。

本年までの十五坪周辺での調査で出土した軒瓦をまとめると別表のようになる。

十五坪内で出土した軒丸瓦の中では、6314Fが出土軒丸瓦全体の29.6%を占める。さらに6314Fは平城京内では十五坪内と十・十五坪壇小路東側溝以外では確認されていない型式の軒丸瓦である。以上のことから、十五坪内では6314Fが主体的に用いられた建物があったことが指摘されよう。

(原田憲二郎)

1)奈良国立文化財研究所『奈良國立文化財研究所基準資料V 瓦編5』(1977)

軒丸瓦	十・十五坪 洋塗小路東 側溝SD	後路SD91	十五坪内部	合計
6233A b			1	1
6275I	1			1
6279A			2	2
6282B a			1	1
6282B			2	2
6282 撫引不明			2	2
6301A			1	1
6301B		1		1
6308B			1	1
6314F	1		7	8
形式不明			6	6
平安道溝			1	1

軒平瓦	十・十五坪 洋塗小路東 側溝SD	後路SD91	十五坪内部	合計
6652A			2	2
6662A			1	1
6663B			1	1
6664F			1	1
6667A			2	2
6668A			1	1
6691A			3	3
6702A			2	2
6721D			2	2
6734A	0.5*		0.5*	1
新型式			1	1
型式不明			2	2

軒瓦集成表

* : 同一個体

土器類 ここでは、流路 S D27と井戸 S E81の出土土器について記す。

流路 S D27出土土器 繩文時代の繩文土器、古墳時代の土師器・須恵器と時期不明の土師器がある。

繩文土器は、繩文時代後期のものとみられる深鉢の口縁部の破片が1点出土している。口縁端部の外面には3条の凹線がみられる。胎土には石英・長石の粗粒砂を多く含む。

古墳時代の土師器には、小形丸底壺と杯がある。1は小形丸底壺である。器表の状態が悪く調整痕はみられないが、体部中央外面に指頭圧痕が残る。2は杯である。器表の状態が悪く調整痕はみられないが、体部下半外面に指頭圧痕が残る。いずれも中期後半から後期にかけてのものである。

古墳時代の須恵器には、杯蓋・杯身・高杯・長頸壺がある。3は杯蓋である。体部は丸みを帯び、口縁部内面には段がみられる。4は杯身である。口縁部は真っすぐに立ち上がり、口縁端面や蓋受け部端面は平坦に仕上げられている。5・6は長頸壺である。5は肩部外面に沈線と櫛状の工具による刺突文とで構成された文様帶がみられる。6は頸部外面に2条の沈線が施されている。体部外面には焼き膨れがみられる。3・4は中期後半、5・6は後期後半のものである。

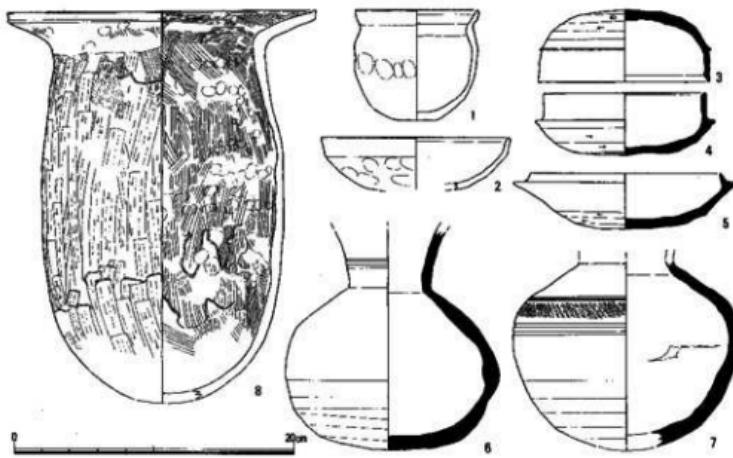
その他に、時期不明の土師器長胴壺がある。口縁部はかすかに外湾し、口縁端部はわずかに上方へ立ち上がる。外面の調整は、口縁部が横方向のナデ、体部が縦方向のヘラケズリである。内面の調整は、口縁部が横方向のナデ、頸部が横方向のハケメ、体部が縦方向のハケメである。
(安井宣也)

井戸 S E81出土土器 南都土器編年のI期新段階(9世紀前半)に属する土師器・須恵器がある。ここでは残存状態が比較的良好なものを見出し示した。

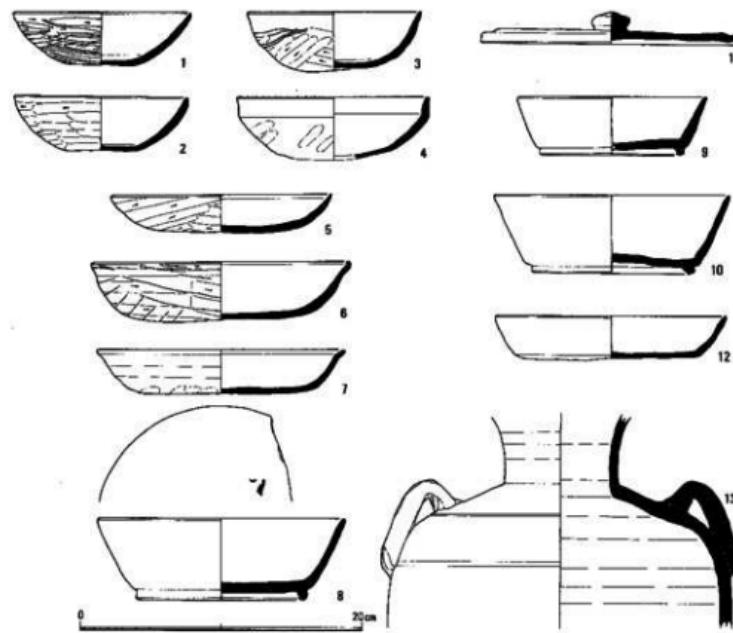
土師器 杯A(6・7)、皿A(5)、碗A(1~3)、碗C(4)等がある。杯Aには、外面全体にヘラケズリを施した後ヘラミガキを施すc₁手法のもの(6)と口縁部だけにヨコナデを施すもの(7)がある。7は口縁端部が強く外反する特徴をもち、河内系の製品の可能性がある。底部外面に「八」と墨書きされている。皿A(5)は、器高が低く、口縁部がかなり開き味方に立ち上がる。I期新段階の特徴的な形態である。碗Aには、ヘラミガキを施すもの(1・3)とヘラケズリだけで調整するもの(2)がある。碗C(4)は口縁部だけにヨコナデを施し、それ以外は成形時の凹凸をそのまま残す。

須恵器 杯A(12)、杯B(8~10)、杯蓋(11)、壺(13)等がある。杯B(10)の底部外面には文字が墨書きされているが、残存状態が悪く判読できない。杯A・Bは、いずれも口縁部内外面ともロクロナデ調整で、底部外面はヘラキリのままである。壺(13)の肩部内面から体部内面下半にかけて、灰白色の物質が付着している。
(三好美穂)

註)『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要 1996』 奈良市教育委員会(1996)



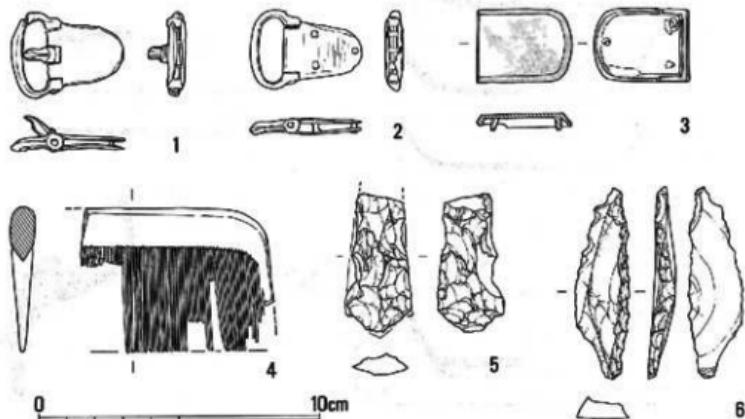
井戸SD27 出土土器 (1/4)



井戸SE85出土土器 (1/4)

その他の遺物 奈良時代の遺物の他、弥生時代以前の石器が出土している。1・2は銅製の鉗具である。1は長さ4.0cm、幅3.0cm、板金具の厚さ0.5cm。外枠金具に図下方から軸を通し、刺金は軸と別造りとなっている。板金具は2本の鉗足で綴じ合わされている。2は長さ4.0cm、幅2.9cm、板金具の厚さ0.5cm。1とほぼ同じ大きさであるが刺金を持たない。同様の型式のものが、欠損品ではあるが、平城京左京二条二坊の東二坊坊間路西側溝から出土している。板金具は3本の鉗足で綴じ合わされている。1は建物S B54の柱穴埋土、2は溝S D81から出土。3は銅製の蛇尾の表金具である。長さ3.4cm、幅2.6cm、厚さ0.6cm。表面には黒漆（網部）が残存している。鉗足は3本である。土坑S K86から出土。4は横櫛である。現存幅6.9cm、高さ5.1cm、厚さ0.9cm。歯の挽き出しは3cmあたり24本。挽き出し線は櫛の上縁に平行し、肩部もその丸みに沿って平行している。復元推定幅は12cm前後である。井戸S E83枠内から出土。5は縄文時代草創期の有茎尖頭器である。残存長4.9cm、幅2.3cm、厚さ0.7cm。欠損は著しいが、復元的にみると、左右の縁辺は上方に向かってすぼまり、逆刺は直線的にわずかに張り出しており、「柳又型」と判断される。安山岩製。第325次調査第2発掘区遺物包含層出土。6は旧石器時代のナイフ形石器である。長さ6.8cm、幅2.0cm、厚さ0.8cm。横長剥片を表材とし、一側縁に調整を施す。「国府型ナイフ形石器」と考えられるが、表材剥片の底面にネガティブな刺離面が認められ、瀬戸内技法以外の方法で作られた可能性も考えられる。安山岩製。第318次調査第1発掘区遺物包含層出土。この他全発掘区を通じて、和同開珎3枚、萬年通寶2枚、神功開寶2枚、洪武通寶（加治木錢）1枚、寛永通寶1枚、石鎌3点他剥片類11点が出上している。

（松浦五輪美）

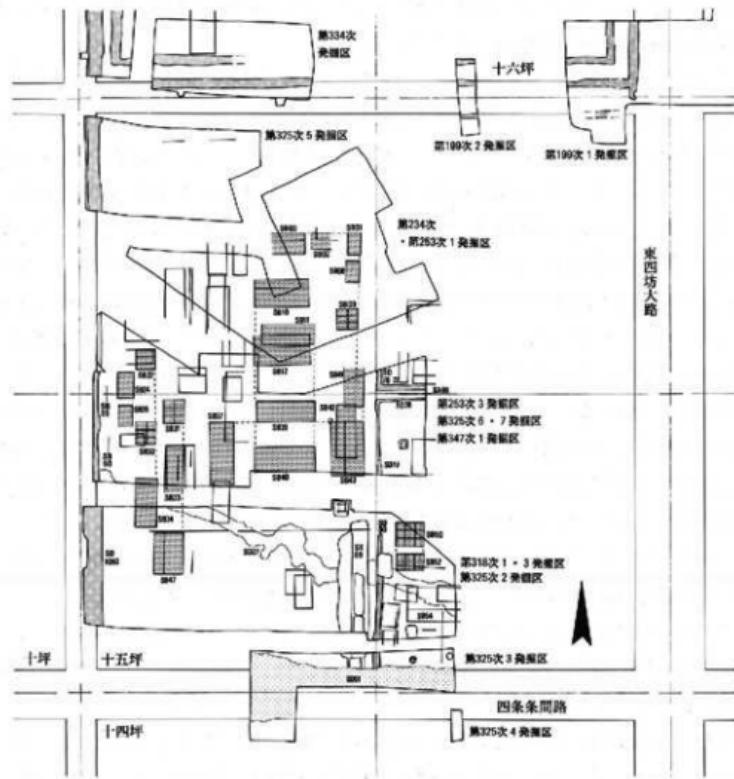


金属製品・木製品・石器（1／2）

V まとめ

平成3年度から今年度までの一連の発掘調査で得られた左京四条四坊十五坪に関する主な成果は、以下のとおりである。

条坊関連 十・十五坪坪境小路は東側溝SD1062を確認した。東側溝に沿う築地や雨落ち溝については、遺構は検出されなかったが、推定線上に門SB59・60以外の構造物がみられないことから、存在した可能性が高い。十四・十五坪坪境小路は推定地が中世の流路SD91となっていた。この流路の成立の経緯については、今後検討する必要がある。なお、十五・十六坪坪境小路は発掘区外であり、確認できなかった。



※ ア: 目の建物は柱脚を兼ねて壁ちぢむもの

十五坪塗構縦全図

十五坪内の区画 十五坪の東西中軸線付近には南北方向の溝 S D76・79・80がみられる。また、十五坪東半部の南北中軸線付近には1.8m間隔をおいて平行に掘削された2条の東西方向の溝 S D77・78がみられる。これらの溝をまたいで建てられた建物や堀はみられない。また、十五坪の南北二等分線付近の堀については、東半部では2条の東西方向の溝 S D77・78の間の空間地に東西方向の堀 S A66がみられるのに対し、西半部では建物はみられるが東西方向の堀はみられない。したがって十五坪内は、東西に二等分され、さらに東半部が南北に二等分されて3つの区画に分かれていたものと考えられる。

建物配置と占地 十五坪東半部の建物配置については、調査範囲が東半部西辺付近に限られているので全容は不明であるが、少なくとも3時期以上の変遷が認められる。東半部南側の宅地では、東西の妻柱を揃えて南北に並んで建てられた総柱建物 S B50・51と比較的大型の南廂付東西棟建物 S B54がみられる。

十五坪西半部の建物配置については、コ字形配置とみられる計画的に建てられた建物群がみられるのが特徴で、少なくとも3時期以上の変遷が認められる。西半部東寄りにある比較的大型の建物 S B10～12・37・39・40・43は中心建物とみられる。妻柱列を揃えて南北に並んで建てられた東西棟建物5棟(S B10～12・39・40)については、建物 S B39・40に比べその北側にある建物 S B10～12がやや小振である点を考慮すれば、建物 S B39が正殿、建物 S B40が前殿、建物 S B10～12が後殿とみなされる。また、南北棟建物 S B39・40は、それぞれの北妻柱列を建物 S B39の南側柱列と柱筋を揃えて建物 S B40を挟んで建てられており、脇殿とみなされる。その他の建物は付属建物とみられる。中心建物群の西側にある建物は大半が南北棟建物であるが、建物 S B22・30・34、S B31・34・48のように同じ側の柱筋を揃えて南北に並んで建てられた建物群がみられる。また中心建物群の東側には建物 S B01と東側柱の柱筋を揃えて南北に並んで建てられた南北棟建物群が、北側には建物 S B01の北妻柱列に北側柱の柱筋を揃えて東西に並んで建てられた東西棟建物群がそれぞれみられ、中心建物群の東側と北側をL字形に画すように配置されている。

占地については、十五坪東半部の建物配置の全容が不明であるが、中心建物群の位置が十五坪西半部の東寄りにあることから、一坪利用の可能性も否定できない。

なおコ字形配置とみられる建物群の性格については、井戸枠内や土坑等から出土した遺物を考慮すれば、官庁のような公的なものではなく、むしろ邸宅の中心建物と考えるのが妥当であると思われる。

利水 生活用水は、確認された井戸の掘形が全て難透水層の黄褐色シルト層下にある砂礫層に及んでいることから、砂礫層中の被圧地下水を取水して利用していたとみられる。

存続時期 十五坪内の宅地の存続時期は、池状遺構 S X89や井戸枠内の埋土から出土した土器から判断すると、奈良時代半ばから平安時代初頭までと考えられる。(安井宣也)

(4) 平城京左京四条四坊十六坪の調査 第334・345次

I 調査目的

調査地は平城京左京四条四坊十六坪南西部分に相当し、左京四条四坊九・十六坪坪境小路及び同十五・十六坪坪境小路の確認を主目的とした。

II 調査地の層相

層序は、造成土、赤黒色極細砂、暗灰色極細砂（作上）、暗灰色極細砂（やや褐色気味床土）、暗灰色極細砂（褐色気味、床土）、暗灰色極細砂（黄灰色シルト混在、作上）と統き、現地表下約0.9mで暗橙黄色シルト質極細砂の地山となる。遺構面は地山上面であり、標高は概ね63.0m前後である。旧地形は南西から北東に向かって緩やかに高くなる。

III 検出遺構

主な検出遺構は、奈良時代から平安時代初頭の左京四条四坊九・十六坪坪境小路および同十五・十六坪々境小路、道路側溝2条、雨落溝2条、築地2条、掘立柱建物3棟、掘立柱塀7条で、他に中世の粘土探掘坑がある。この内、掘立柱建物・塀・築地の添柱痕跡については概要を一覧表にまとめた。重複関係から、これらの遺構は少なくとも2時期の変遷があると考えられる。以下、特記すべきものについて述べる。

S F 1060 九・十六坪坪境小路。路面東端から約1m幅分を検出した。

S F 1020 十五・十六坪坪境小路。路面北端から約1～2m幅分を検出した。路面の標高は63.0m前後である。なお路面上で土器の甕がほぼ1個体分出土している。堀形はなかった。また後述のS D 1021Aから土馬の破片が出土していることから、何らかの祭祀が行なわれていた可能性がある。
(第199次調査 S F 02に対応)

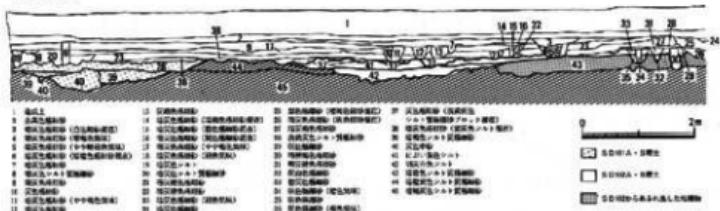
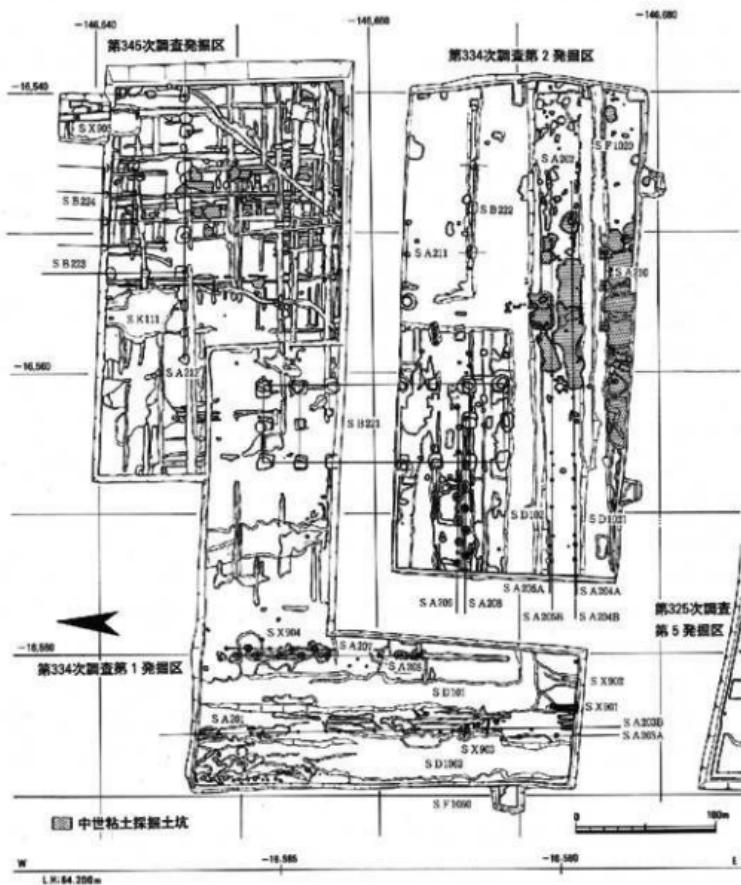
S D 1062A・B 九・十六坪坪境小路東側溝。一度改修されており、古段階をA、新段階をBとして表示する。Aから8世紀後半～9世紀初頭の土器、Bから8世紀末～9世紀初頭の土器が出土した。本側溝心はX=-146,673.50のときAがY=-16,587.65、BがY=-16,587.62、X=-146,653.07のときにAがY=-16,587.87となる(Bは不明)。

S D 1021A・B 十五・十六坪坪境小路北側溝。改修が一度あり、古段階をA、新段階をBと表示する。A・Bから8～9世紀の土器が出土した。本側溝心はY=-16,574.50のときAがX=-146,675.55、BがX=-146,675.49である。
(第199次調査 S D 04に対応)

S D 101A・B 九・十六坪坪境小路東側築地の雨落溝。改修が一度あり、古段階をA、

調査次数・発掘区	調査地	面積(af)	調査期間	備考
第178次	三条宮前町43-3	100	H元・7/4～同・7/5	平成2年度報告
第199次	二条本町31他	1,450	H 2・7/2～同・8/22	同上
第218次	同上	870	H 2・12/17～H 3・3/28	同上
第253次第2発掘区	三条宮前町242-2他	330	H 4・6/1～同・9/18	平成4年度報告

十六坪内調査一覧表



第334・第335次調査 遺構平面図 (1/400)

第334次調査 北壁土層図 (1/100)

新段階をBと表す。Aから8世紀の土器が出土した。(第178次調査SD18に対応)

SD102A・B 十五・十六坪坪境小路北側築地の雨落溝。一度改修されており、古段階をA、新段階をBとして表示する。Aから8世紀、Bから8~9世紀の土器が出土した。なお発掘区東部分は擾乱による削平で残存していない。(第199次調査SD10に対応)

SA201 九・十六坪坪境小路東側築地塀。堰板留の添柱痕跡があり、これをSA203A・Bと表す。ただし東側の添柱痕跡は存在せず、SD1062Bの造成によって削平されていると考えられる。このことから、ある時期から築地が存在しなかった可能性がある。

SA202 十五・十六坪坪境小路北側築地塀。堰板留の添柱痕跡があり、これをSA204A・B、SA205A・Bと表す。両者のAと△、BとBは対をなす。さらに△とBは列が揃い、柱間も一致することから、築地が二時期ある可能性がある。これは添柱痕跡の状況からSA201でも同様と考えられる。なお築地幅はAで約1.8m、Bで約1.6mである。

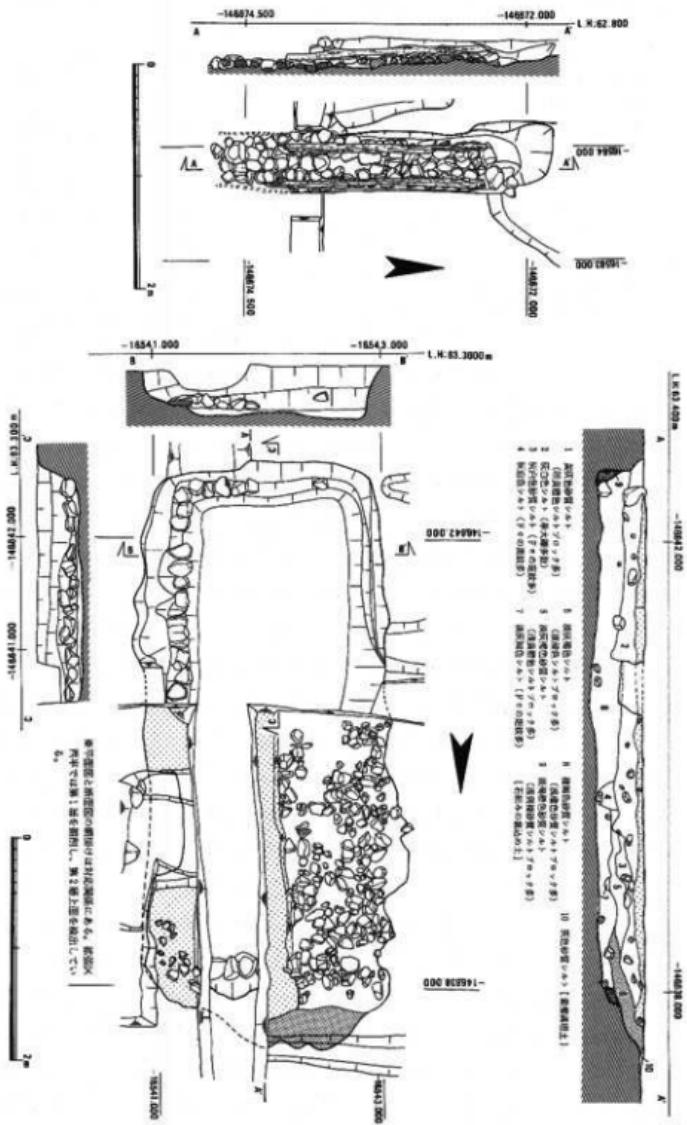
SX901 十五・十六坪坪境小路北側築地の木樋暗渠。十五・十六坪々境小路北側築地の雨落溝と九・十六坪坪境小路東側築地の雨落溝の取り付き部分に位置し、両溝の水を十五・十六坪々境小路北側溝に排出していたと考えられる。幅員約0.6m、深さ約0.4m。底面には拳大の礫が敷き詰められていた。礫の上には側板が2枚立てられており、素掘り溝側面と側板の間には粘土が埋められていた。また蓋板は検出していないが、側板の上端が腐食で損なわれていることから、同様に蓋板も損なわれている可能性がある。

SX902 SX901の前身の暗渠と考えられる。幅員約0.8~1.0m、深さ約0.3m。重複関係からSD102Bより古い。SD102Aに伴う可能性がある。

SX903 SD1062・101間に位置する東西方向の2条の溝状遺構。幅員約0.2m、深さ約0.1m。重複関係からSD1062B・101Bに伴う可能性がある。

通構番号	棟方向(桁行×梁間)	棟高(尺)	桁行全長m(尺)	梁行全長m(尺)	梁行柱間寸法(m)	梁行柱間寸法(m)	間の出(m)	備考
SA203A	南北	2以上	2.7(9)以上		2.7			SD102Bより古い。SA203・204・205は築地の軸距離の減少を考慮すると考えられる。
SA203B	南北	13以上	2.8(77)以上		泰			後から24-5-15-1-4-24-24-13-15-1-1-14-24
SA204A SA205A	東西	10以上	27(90)以上		21-8等間			
SA204B SA205B	東西	3以上	5.7(19)以上		同上			
SA206	南北	7	12.4		泰			SX904より新しい者から15-13-15-15-15-13-15
SA207	南北	6	9.9(35)		泰			SX904より新しい者から15-13-15-15-13-13
SA208	東西	7以上	10.5(35)以上		1.7等間			SX904より新しい者から15-13-15-15-13-13
SA209	東西	8以上	12.6(42)以上		1.8等間			SD102Aが埋没するより新しい
SA210	東西	2	5.2		2.8-2.4			SD102Aが埋没するより新しい
SA211	東西	2	4.4		2.2等間			発掘区外に続く建物になる可能性もある。
SA212	東西	10以上	19.2(64)以上		2.1-2.6等間			坪塀辺より坪塀1/4の位置にある
SB221	南北	7×2	17.4(58)	5.4(18)	2.7-2.4-2.4-2.2 2.4-2.4-2.2	2.7等間	(山-北)2.7	寺跡造建築物の可能性もある。
SB222	南北	2以上×2			4.6	2.3等間		SB221と同時、屋内うち、前室側の箇所のみ。
SB223	東西	5×3以上	13.5(45)	5.4(18)以上	2.7等間	2.7等間		
SB224	南北	3以上×3	4.2(14)以上	5.7(19)	2.1等間	1.9等間		

地図 S-X 1000 平面・断面・断面 (1/50)



S X 904 中心に幅員約0.6m、全長約4.2m、深さ約0.2mの南北方向の素掘りの溝があり周囲に南北方向約7.3m、東西方向約0.6~3.2mの浅い土坑、素掘りの溝の南北端に直径約0.4m、深さ約0.2mの土坑がある。S A 206・207と重複関係にあり、これより古い。

S X 905 南北方向約5.2m、東西方向約2.2m、深さ約4.5mの方形石組土坑。側面に拳大から人頭大の礫が積まれていたと考えられるが、ほとんど取り去られている。石組最下段を南東部・北部で確認した。また発掘区を北に拡張し、全体の範囲を確認した。なお第8層から8世紀中葉の土器、拡張区の第2層上面から8世紀の土器が出土しており、当施設は少なくとも9世紀までに廃棄されている可能性が高い。

S K 111 南北約6m、東西約4mの平面橢円形、深さ約0.2mの土坑。埋土から8世紀前半の土器が出土した。

IV 出土遺物

奈良時代から平安時代初頭の土器類が遺物整理箱で4箱分、同時代の土馬が1点、奈良時代の瓦類が数点、鎌倉時代の瓦器が数点出土した。

瓦類には軒丸瓦(6685A)1点および丸瓦、平瓦が少量ある。

土器類は大半が奈良時代末から平安時代初頭のものである。ここではSD 1062出土の土器を報告する。3はSD 1062B出土、3以外はSD 1062A出土のものである。

1の土師器は摩滅が著しく調整が分かりにくいが、口縁部だけをヨコナデし、体部～底部にかけては未調整のようである。2は土師器の椀Bである。2は土師器の椀Aである。c,手法によって調整している。3は土師器の椀、4は土師器の皿Aである。両者共に口縁部をf手法によって調整している。4は河内系のものと考えられる。6・7は土師器の皿Aである。いずれも裏面および口縁部から頸部にかけてヨコナデし、体部表面をハケ調整、裏面をナデ調整している。6は体部を2次ハケ調整している。7は須恵器の杯Bであり、全面を回転ナデ調整している。体部と高台との接合痕が残る。(大庭淳司)

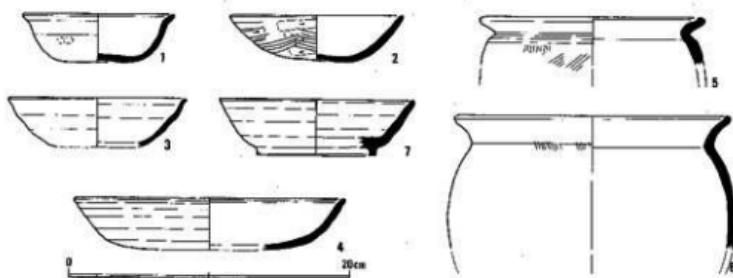


図 SD 1062出土土器 (1/2)

(5) 平城京左京四条五坊三坪の調査 第353-2次

I 調査の目的

調査地は平城京の復元では左京四条五坊三坪の東端の中央に相当する。この坪は市第168次調査（昭和63年度調査）で西端の一部が調査されたが、本格的な調査は今回がはじめてである。調査地の東隣の同六坪では第311次調査が実施されており、その西端で池状遺構S X02の東岸を確認した。今回はS X02の範囲と、敷地東端に推定されている三・六坪の坪境小路の確認を目的として調査を行なった。

II 調査地の地形と層相

調査地付近の地形は南側に菩提川が西流しており、それによって形成される扇状地の微高地上にあるため、西と南にむかってなだらかに低くなっている。

調査地の現地表面から0.5mまでは造成盛土である。調査地の西1/3は水田耕作によって地下げされ、その部分では造成盛土の厚さは0.9mである。造成盛土以下の層序は暗黒灰色粘質土（IH水田作土、0.15m）、淡灰色土（0.2m）、灰褐色土（奈良時代の遺物包含層、0.25m）と続き、堤地表面下約1.1mで黄褐色粘質土または茶褐色砂礫の地山に達する。遺構面は2面あり、灰褐色土の上面（以下第1遺構面）と地山上面（以下第2遺構面）である。灰褐色土層は南にいくほどが薄くなり、南半では地山上面で遺構を検出した。遺構面の標高は上面で概ね64.8m、地山上面で64.4mである。

III 検出遺構

第1遺構面で検出した遺構には、中世～近世の土坑・素掘りの溝がある。また、第2遺構面で検出した遺構には、弥生時代の土器を含む自然流路、条坊遺構の可能性のある時期不明の溝、奈良時代の土坑、中世～近世の土坑がある。

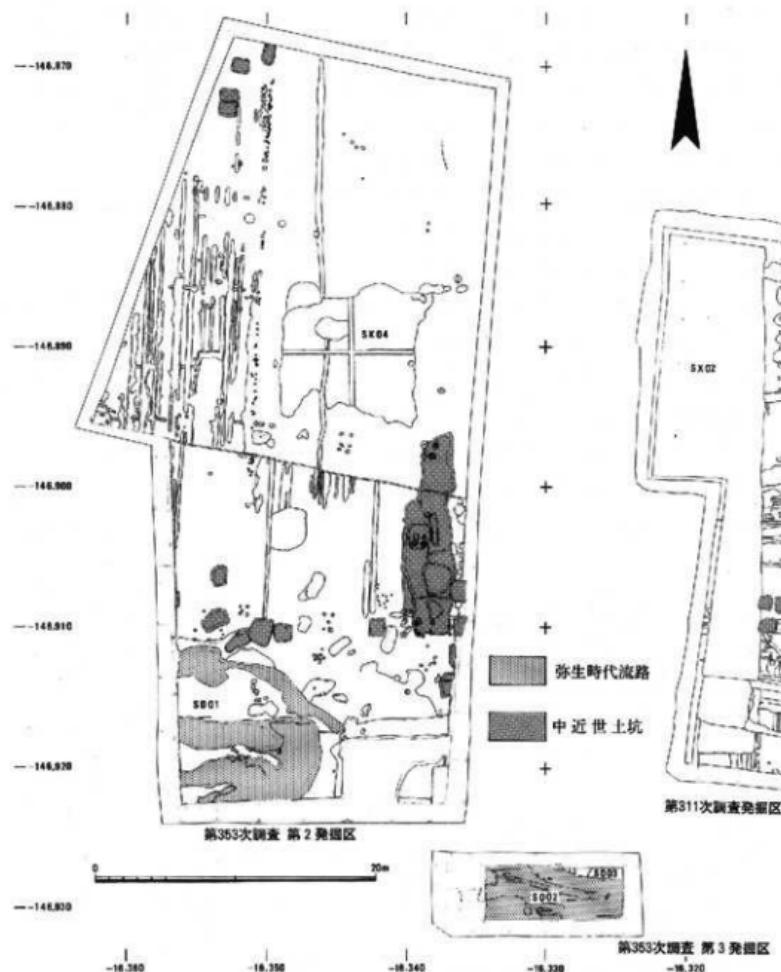
自然流路 S D01・02 検出状況から3条に分かれるが、第2発掘区の南端で検出した2条は同じ流路である可能性がある。自然流路 S D01は流路底のレベルから水は南東から北西方向に流れていると考えられる。埋土は灰色粗砂で弥生時代後期後半の土器が出土した。自然流路 S D02は第3発掘区で北岸を検出。埋土は2層にわかれ、下層は灰色粗砂、上層は灰色粗砂に灰色粘土が混じる。両岸から古墳～奈良時代の遺物が出土している。

S D03 第3発掘区の北端で検出した南北方向の素掘りの溝である。溝の南側は自然流路で破壊されており、土坑であった可能性がある。条坊復元では二・六坪坪境小路の東測溝の位置にあたりその可能性もある。幅1.7m、検出面からの深さ0.1mである。埋土は茶灰褐色土で、遺物が確認できなかったため時期不明である。

S K04 第1発掘区中央部の第2遺構面で検出した平而不整形の土坑である。東西・南北とも約9.5m、検出面からの深さ0.1mである。埋土は茶褐色土で奈良時代の土馬、須

恵器、土師器が出土した。

中・近世土坑群 第2発掘区北西隅と同発掘区中央よりやや南寄りで検出した。いずれも地山が黄褐色粘質土の箇所で検出されており、土を採掘するための土坑と考えられる。多くは平面形か隅丸方形である。同様のものが東隣の市第311次調査で確認されている。



第353次調査 第2・3発掘区 造構平面図 (1/400)

IV 出土遺物

出土遺物には石器、弥生土器、奈良時代の土馬、土器類、中近世の土器類・時期不明の瓦類がある。

石 器 第2遺構面から安山岩（サヌカイト）製の有茎尖頭器が1点出土した。横方向の押圧剥離によって丁寧に仕上げられている。縄文時代草創期のものと考えられる。

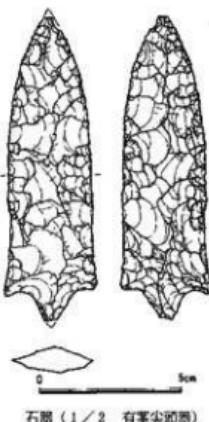
土器類 自然流路S D01出土の弥生土器について記す。

器種は、壺・壺・鉢・高杯がある。1は壺で、体部外面にはタタキ目がみられる。2・3は壺である。2は大型のもので、体部内面には一部タタキ口が残る。体部内面には板状工具によるナデ調整が施されているが、指頭圧痕が残る。3は小型のもので、肩部内面に接合痕がみられる。4～6は鉢である。4は体部外面にタタキ口がみられる。5・6は体部外面が平滑に仕上げられている。5は底部に穿孔が施されている。これらの土器は、器形や組成の特徴から、弥生時代後期の畿内第V様式でもかなり新しい様相を示すものである。

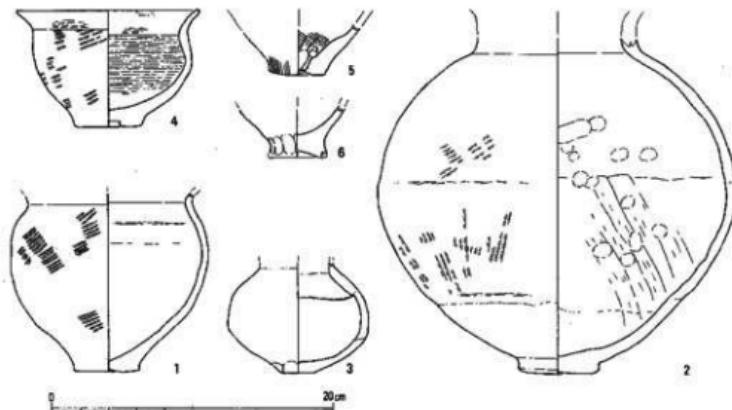
V まとめ

今回の調査では第311次で検出した池状遺構S X02を確認することができなかった。ただしS X02の西岸が今回の第2発掘区より東に、南岸が第3発掘区より北になることが判明した。また、弥生土器を含む自然流路を確認した。周囲の調査で確認している自然流路、弥生時代の遺構とともに検討していく必要がある。

（久保邦江・安井宣也）



石器（1／2 有茎尖頭器）



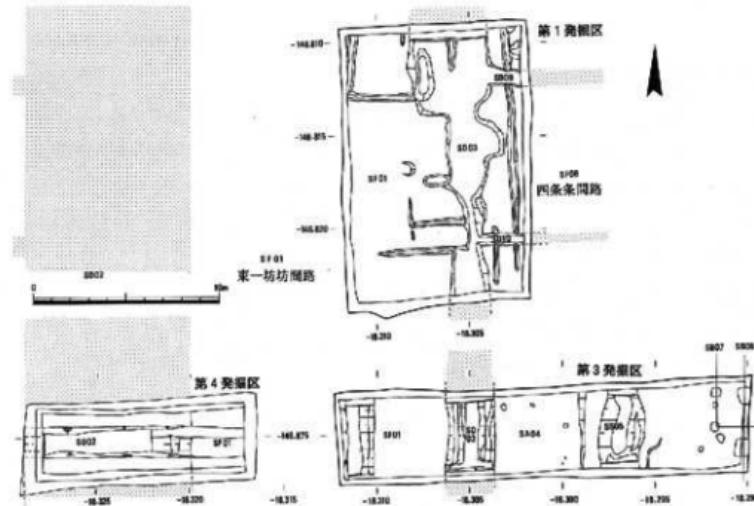
自然流路出土土器（1／4）

3 平城京左京四条一坊十・十一坪（東一坊坊間路）の調査 第344次

所在地 奈良市四条大路二丁目37他
調査期間・面積 平成8年2月5日～3月6日（平成7年度） 300m²
平成8年4月3日～4月18日（平成8年度） 175m²
調査原因 宅地造成（株式会社シェルホーム届出地）

I 調査の目的

調査地は平城京の条坊復元では、左京四条一坊十・十一坪にあたり、調査地の西辺には東一坊坊間路が、北は四条条間路が想定されている。ところで、宅地造成面積は7960m²におよぶが、工事による地下遺構への影響は擁壁部分に限られることから、奈良県教育委員会と協議の結果、今回は条坊に関わる遺構と十一坪内の遺構面を確認する調査に留めることとなった。このために、平成7年度は、東一坊坊間路と四条条間路交差推定位置に150m²（第1発掘区）、十一坪内に150m²（第2発掘区）、平成8年度は、東一坊坊間路推定位



第344次調査 第1・3・4発掘区 遺構平面図 (1/300)

置に175m²（第3・4発掘区）をそれぞれ設定し2カ年にわたり調査を実施した。

II 調査地の層相

層序は、黒色土（作土、厚さ0.1～0.2m）以下、第1発掘区では、茶灰色粘土（整地土、厚さ0.1～0.2m）と続き、現地表下0.4mで明黄灰色シルトの地山に至る。また、第2発掘区では、暗黄色粘土（厚さ0.05m）、北半では暗黃褐色粘土（整地土、厚さ0.1m）と続き、現地表下0.35mで暗茶褐色砂礫の地山に至る。なお、南半には整地土はない。第3・第4発掘区では、灰茶色砂質土（厚さ0.1m）、灰黄色粘土（厚さ0.1m）と続き、現地表下0.3mで、黄褐色粘土の地山に至る。なお、第4発掘区では、1.4m程盛土がなされている。地山上面の標高はいずれの発掘区も概ね60.6mである。

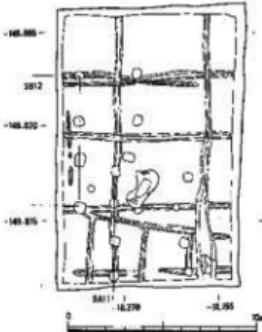
III 検出遺構

検出した遺構・遺物としては、東一坊坊間路および同東西両側溝、十一坪の西を限る築地および雨落ち溝、四条糸間路および同南北両側溝、掘立柱建物3棟、掘立柱塀1条、素掘り溝である。以下で概略を記す。

S F01 第1・3・4発掘区で検出した東一坊坊間路である。路面の幅は13.9mである。第3・4発掘区では路面は地山面で舗装などの痕跡はなかった。路面は西側溝に向かってなだらかに下がっている。一方、第1発掘区では路面は地山上面に茶灰色粘土で整地されている。

S D02 第4発掘区で検出した東一坊坊間路西側溝である。発掘区西端が西村である。幅8.9m、検出面からの深さ1.5mである。埋土は上下2層にわかれる。上層は橙灰色粘質土、灰橙色粘土、灰色粘土で、下層は暗灰色粘土、黒灰色粘土、灰色砂である。灰色粘土からは、12世紀初頭の瓦器片が出土している。灰色砂からは、8世紀末～9世紀初頭の土師器杯・皿・甕・壺B、須恵器長頸甕・甕片、刀子の柄・斎串が出土した。

S D03 第1・3発掘区で検出した東一坊坊間路東側溝である。南北方向の素掘りの溝で、第1発掘区では幅0.9m、検出面からの深さ0.05～0.4mである。S D09との合流付近では幅4.5mと広くなっている。8世紀後半の土師器片、須恵器片、丸瓦、平瓦、軒丸瓦3点、軒平瓦4点が出土した。土器は摩滅を受けている物が多い。軒丸瓦の型式・種・点数の内訳は、6281B 2点、型式不明1点である。軒平瓦の内訳は、6663F 2点、6721Hc 1点、型式不明1点である。第3発掘区では幅2.3m、検出面から



第2発掘区 遺構平面図 (1/300)

の深さ0.6mである。

S A04 第3発掘区東一坊間路東側溝の東で検出した、東側溝とS D05に挟まれる幅約4.5mの空閑地であり、十一坪を限る築地塀が想定される。築地版築は残っていない。

S D05 第3発掘区S A04の東側で検出した幅3.6m、検出面からの深さ0.3mの南北方向の素掘りの溝である。十一坪の西を限る築地塀の雨落ち溝の可能性がある。

S B06 第3発掘区の東端で検出した南北1間(3.0m)以上の掘立柱建物である。発掘区外に統くため建物規模については明らかではない。

S B07 第1発掘区の東端で検出した東西1間以上、南北1間(1.8m)以上の掘立柱建物である。発掘区外に統くため建物規模については明らかではない。

S F08 第1発掘区で検出した四条条間路である。路面幅7.9m、東西2.5m分を検出した。路面には舗装などの痕跡はみられなかった。

S D09 第1発掘区で検出した四条条間路北側溝である。東西方向の素掘りの溝で幅0.9m、検出面からの深さ0.3mである。

S D10 第1発掘区で検出した四条条間路南側溝である。東西方向の素掘りの溝で幅0.6m、検出面からの深さ0.1mである。

S A11 第2発掘区中央で検出した3間(5.4m)以上の掘立柱塀である。柱間寸法は1.8m(6尺)等間である。

S B12 第2発掘区中央東で検出した南北3間(6.9m)以上の掘立柱建物である。柱間寸法は2.4m-1.8m-2.4mである。発掘区外に統くため建物規模については不明である。

IV まとめ

今回の調査においては、当初の目的通り東一坊間路および同東西両側溝を、なおかつ東一坊間路と四条条間路の交差する部分を検出することができた。東一坊間路側溝心心間の距離は19.65m、四条条間路側溝心心間の距離は8.65mである。両者の数値は大尺・小尺ともに完好的な数値とならない。今回検出した条坊関連遺構についての国土座標を記して今後の調査の資料とする。

(山前智敬)

検出遺構	X	Y	備考
東一坊間路西側溝心	-146,875.000	-18,324.370	S D 02
東一坊間路心	-146,875.000	-18,312.950	S F 01
東一坊間路東側溝心	-146,875.000	-18,304.720	S D 03
十一坪西限築地雨落ち溝	-146,875.000	-18,297.210	S D 05
四条条間路北側溝心	-146,811.850	-18,301.000	S D 09
四条条間路心	-146,816.250	-18,301.000	S F 08
四条条間路南側溝心	-146,820.500	-18,301.000	S D 10

第341次調査 条坊関連遺構国土座標一覧

4 平城京左京四条二坊三坪の調査 第346次

調査地 奈良市四条大路一丁目12番1

調査期間・面積 平成8年2月26日～3月29日 400m²

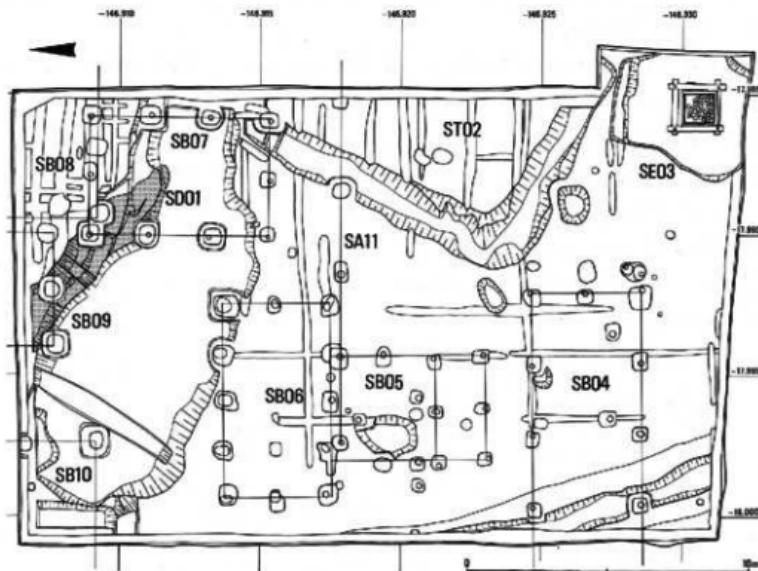
調査原因 店舗建設（良家株式会社届出）

I 調査の目的

調査地は、平城京条坊復元では、平城京左京四条二坊三坪の南辺中央にあたり、調査地南側の道路は三・四坪の坪境小路に想定されている。また、調査地の西側では、近年奈良時代の遺構とともに竪穴住居や方形周溝墓群などの弥生時代の遺構が確認されている。このことから今回の調査は、三坪の宅地南辺部の様相の確認とともに、弥生時代の遺跡の拡がりの確認をも目的とした。

II 調査地の層相

層序は、黒褐色粘質土（作土）、灰色砂質土、黄色粘質土（遺物包含層）と続き、現地



第346次調査 遺構平面図 S = 1 / 200

表下0.3mで黄灰色粘土の地山となる。地山上面の標高は、概ね58.6mである。

III 検出遺構・遺物

弥生・古墳時代の遺構 弥生時代の溝1条（S D01）、古墳1基（S T02）がある。遺構は、地山上面で検出した。

S D01 幅約1.4m、深さ約0.6mの断面V字形の溝。長さ8m分を確認。発掘区北へ続く。埋土から弥生土器片が数点出土した。

S T02 やや南北に長い長方形の方墳。墳丘の西辺及び南辺の一部を検出し、南北9m、東西5.2m分を確認した。墳丘は溝底からの高さ約0.4mが残る。すべて地山であり、墳丘盛土は確認できなかった。墳丘の周囲には、幅約1.6mの周濠が巡る。周濠の埋土から、須恵器片とともに5世紀末葉の甲冑埴輪が1点出土した。

奈良時代の遺構 掘立柱建物7棟（S B04～10）、掘立柱塀1条（S A11）、井戸2基（S E03A・B）がある。また、発掘区北辺には幅約6.5mの自然流路があり、これを奈良時代に埋立て、整地していることを確認した。遺構は、地山およびこの整地上面で確認した。

S B04 衍行3間（7.2m）以上、梁間2間（3.6m）の掘立柱東西棟建物。

S B05 衍行3間（5.4m）、梁間2間（3.6m）の掘立柱南北棟建物。

S B06 衍行4間（6.8m）、梁間2間（3.6m）の掘立柱東西棟建物。西から1間に間仕切がある。

S B07 衍行3間（6.3m）、梁間2間（4.2m）の掘立柱南北棟建物。

S A11 東西4間以上の掘立柱塀である。柱間寸法は、西から3.2—2.8—3.0—3.2mである。発掘区外東に続く。

S E03A・B 発掘区東南隅で検出した井戸。自然流路埋土の灰色砂を掘り込んで作られているため崩落が著しく、掘形はほとんど原形をとどめない。当初、縦板組であったものの（S E03A）を、井籠組（S E03B）に作り替える。S E03Aは、上下2段につくる。下段の縦板組枠材の上に一辺2m、幅0.2m、厚さ0.14mの長方材を井桁状に組む。上段の基礎組とするものか。四隅の組合せ部分に四隅柱を立てる枘穴を穿つ。上段の枠材は失われており、構造は不明。湧水が激しく周壁の崩落が著しいため下段の掘下げは断念した。S E03Bも同じく上下2段につくる。下段に、一辺1.1mの井籠組の井戸枠を1段据え、その外側に上段の一辺1.3mの井籠組の枠材を2段重ねている。下段枠内には、浄水のために拳大の石を敷く。S E03A・Bの埋土からは、奈良時代の瓦磚類、土器類、木製品が出土した。

出土遺物の中で、特記すべきものにS B03Bから出土した多量の壺がある。掘形及び枠内埋土から総数61点が出土した。これらは、大型品（縦27cm、横19cm、厚さ7cm）・中型品（縦25cm、横16.5cm、厚さ7.5cm）・小型品（縦22.5cm、横14.5cm、厚さ6.5cm）の3種類の大さに大別できる。

（立石堅吉）

5 平城京右京一条二坊十一坪の調査 第348次

所在地 奈良市西大寺栄町2317-4他

調査期間・面積 平成8年4月25日～7月30日 718m²

調査原因 近鉄西大寺駅北区市街地再開発事業（奈良市長通知）

I 調査の目的

調査地は、平城京の条坊復元では右京一条二坊十一坪と一条々間路南側溝にまたがる位置に推定されていた。一条々間路を挟んだ北側は西隆寺境内である。

しかし、過去の周辺発掘調査によって、一条々間路は推定されている条坊復元よりも北へ10数m、西二坊大路と西二坊々間西小路は西へ5m前後ずれていることが判明している。このことから、調査地は十一坪内に位置する。

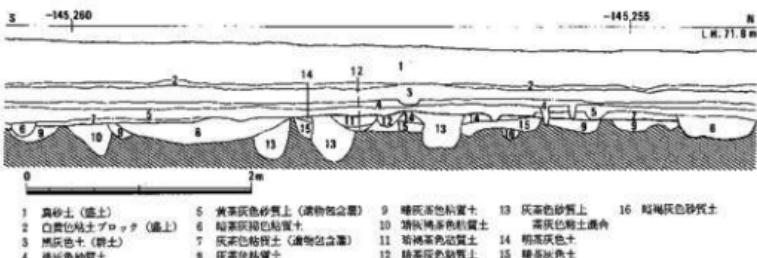
また、周辺の調査では、時期不明の建物としてまとまらない多くの小柱穴や、古墳時代の自然流路、土坑が検出されている。以上をふまえて当調査地における坪内の様相、古墳時代の遺構の分布範囲確認などを調査の目的とした。

II 調査地の層相

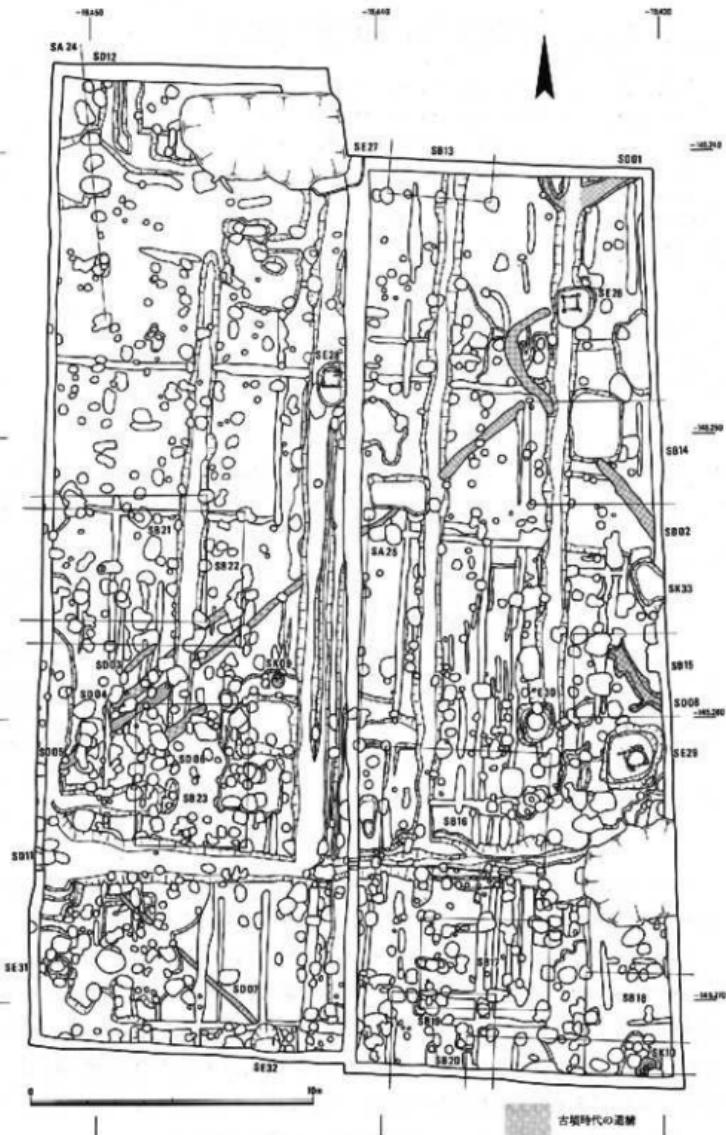
層序は、真砂土・白黄色粘土ブロック（盛土）、黒灰色土（旧作土）、淡灰色砂質土、黄茶灰色砂質土、茶灰色粘質土と続き、地表下0.6～0.8mで灰茶色砂、灰茶色砂質土あるいは黄灰色粘質土の地山に至る。

中世以降の耕作によると思われる素掘りの溝や小土坑は、茶灰色粘質土上面で、古墳時代や奈良時代などの遺構は、地山上面で検出した。地山の標高は概ね71.0mである。

III 検出遺構



第348次調査 西壁土層図（1／50）



第348次調査 造構平面図 (1/200)

通構番号	横方向 (桁行×梁間)	横行全長 m (尺)	梁行全長 m (尺)	梁行柱間 寸法(m)	梁行柱間 寸法(m)	幅の州 (m)	備考
S B13	南北	1以上×2		3.6(12)		1.8等間	
S B14	東西	1以上×2	2.4(8)以上	3.6(12)	2.4	1.8等間	
S B15	東西	2以上×2	3.0(10)以上	3.0(10)	1.5等間	1.5等間	
S B16	東西	3×2	6.0(20)	4.2(14)	2.0等間	1.8-2.4	SD11より新しい
S B17	東西	2×2	4.8(16)	3.2	2.4等間	1.6等間	
S B18	東西	1以上×2	2.7(9)	3.6(12)	2.7	1.8等間	
S B19	南北	1以上×2	1.5(5)以上	3.6(12)	1.5	1.8等間	
S B20	東西	1	6.3(21)以上		2.1等間		
S B21	東西	2以上×2	4.8(16)以上	4.5(15)	2.4等間	2.4-2.1	
S B22	東西	3以上×2	5.4(18)以上	4.8(16)	1.8等間	2.4等間	
S B23	南北	3×2	5.1(17)	4.0	1.5-1.8-1.8	2.0等間	SD11より古い
SA24	南北	4以上	7.2(24)		1.8等間		
SA25	南北	3	8.1(27)		2.7等間		

掘立柱遺物・解説表

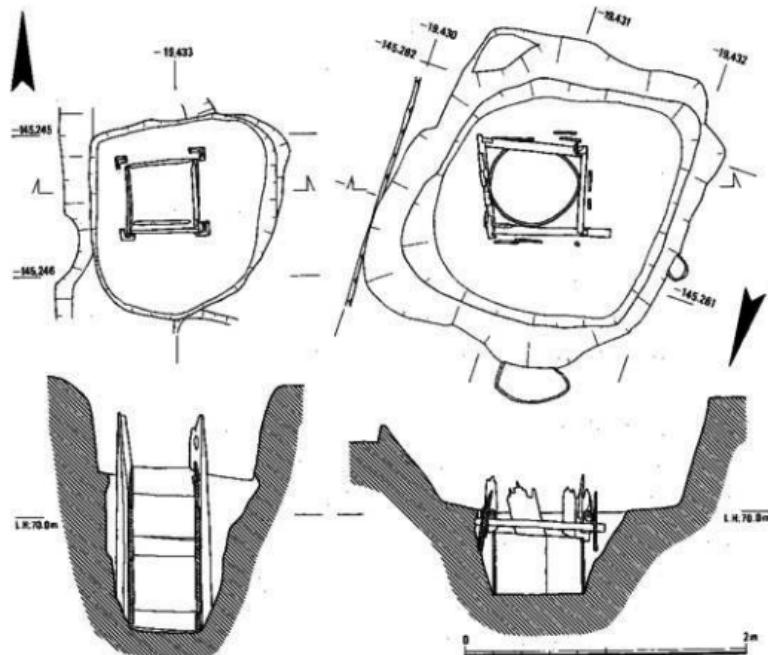
通構番号	断形		特			主要出土遺物	備考
	平面形	平面規模 (m)	深さ (m)	平面形・構造	内法 (m)		
S E26	不整円形	東西 1.35 南北 1.42	1.75	方形横板組隅柱 留	0.45 X 0.47	製陶土器 土製玉 残縁	南側4段分北・東・ 西5段分残存
S E27		東西 1.35以上 南北 1.10以上	1.43				南北ではほとんど見されている ため当時は不明。 但馬塗上10cm強化。萬葉方形
S E28	楕円形	東西 1.00以上 南北 1.40以上	1.65	方形横板組隅柱 横残留	0.54 X 0.45		枠材はほとんど抜き取られている。
S E29	扁丸方形	東西 2.04 南北 2.25	1.39	方形横板組隅柱 横残留	0.52以上 X 0.63以上	骨物	枠材は一部抜き取られて いる。
S E30	不整円形	東西 1.25 南北 1.47	0.58		0.57	曲物・漆敷	枠材は抜き取られて いるが、曲物の籠のみ残存
S E31	不整円形	東西 0.82 南北 1.02	1.01				枠材は抜き取られて いる。
S E32	不整円形	東西 1.06 南北 0.84	1.07				枠材は抜き取られて いる。

井戸・質表

検出した遺構の主なものには、古墳時代の溝8条、土坑2、奈良時代の溝2条、掘立柱建物11棟、掘立柱塀2条、井戸7基、土坑1、平安時代以降の溝5条がある。

古墳時代の遺構・溝、土坑ともに埋土は暗紫褐色粘質土である。

S D01~08 幅は0.2~0.5m、深さ0.02~0.2mの素掘りの溝である。国土方眼方位北でほぼ50° 東に振れる溝S D01・03~06と、それらに対して直交する溝S D02・07・08がある。そのうちのS D01・02・06は平面L字型で、それぞれの片端は直角に曲がる。SD05・06から古墳時代前期の土師器の破片が出土した。これら8条の溝は同一の方眼にのっており、埋土も酷似していることから、ほぼ同時期の遺構と思われる。



井戸 S E26 平面・立面図 (1/40)

井戸 S E29 平面・立面図 (1/40)

S K09・10 S K09は、平面不整円形で南北0.5m、東西0.4m、深さ0.25mのすり鉢状の土坑である。S K10は、周囲をいくつかの柱穴に壊されているため、平面形は不明であるが、南北0.66m以上、東西0.7m、深さ0.28mである。S K09・10とも、古墳時代前期の土師器の破片や完形に近いものがまとめて廃棄されていたが、S K09の方が遺物の状態は良好である。

奈良時代の遺構 堀立柱建物・塀については、概要を一覧表にまとめた。

S D11 発掘区南部で検出した東西溝である。両端とも発掘区外へつづく。長さ19.6m以上、幅0.9～2.5m、深さは0.1～0.3mで溝底は西へ下る。溝心の座標はX = -145,265.080m、Y = -19,440.000mである。埋土は暗茶灰色粘質土である。奈良時代前期から中頃と思われる土師器、須恵器が出土したが、破片のため詳細な時期は不明である。

S D12 発掘区北西部で検出したL字型の溝である。北端は発掘区外へ続く。東端は搅乱に削平される。長さ5.3m分、幅0.6～0.7m、深さ0.18m。埋土は暗灰色粘質土で、奈良時代の土師器、須恵器が出土したが、小片のため詳細な時期は不明である。

S E26～32 S E26は方形横板組隅柱留め井戸枠を持つ井戸である。枠は、断面L字型

の柱の切り欠きが棒の中心を向くように四隅に立て、その切り欠きに横板を落とし込んだものである。各井戸から出土した土師器、須恵器の時期は次の通りである。S E 26は奈良時代前半。S E 27・32は遺物がほとんどなかったため不明。S E 28は奈良時代前半の高杯が掘形から山上。S E 29・30は奈良時代後半。S E 27・31・32は奈良時代だが、土器が少片のため詳細な時期は不明。また、S E 26の井戸枠底部付近から大型の平瓶が正位置で、S E 28からは同じく大型の平瓶正位置のものと、そのすぐ上部から中型の平瓶が逆さまで、S E 30からも同じく底部付近から中型の平瓶が逆さまで出土した。いずれも口縁や肩の一部を打ち欠いて井戸魔除時に入れられたものと思われる。

S K 33 発掘区中西部で検出した平面不整円形の土坑である。長径1.9m、短径1.3m、深さ0.22m。埋土は上層は暗灰色砂質土、下層は地山ブロックの2層である。上層から奈良時代前半の土師器、須恵器が出土した。

平安時代以降の遺構 4.1~4.5mのほぼ等間隔に並ぶ南北溝5条がある。出土遺物のはほとんどは奈良時代の土器で摩滅した埴輪片や瓦器片も微量含まれ、平安時代以降の軒丸瓦もこれらから出土した。遺構の重複関係は、土層観察から中世以降の溝や小土坑よりも古く、奈良時代の遺構よりも新しい。しかし、明確な時期を決定づける資料には欠ける。

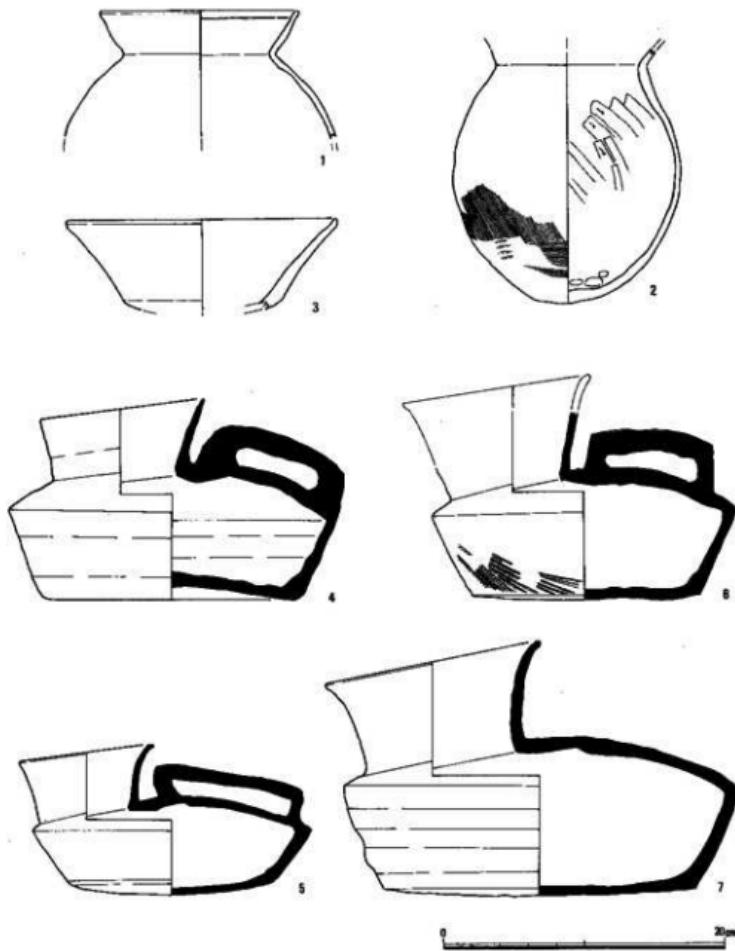
柱穴 なお、発掘区内全体で直径0.2m前後から1.0m弱の柱穴を多数検出した。多数の小規模な建物の建て替えを想定できるが、柱穴のはほとんどは建物としてまとまらない。柱穴掘形から山上した土器は細片のため詳細な時期は不明であるが、奈良時代と思われるものがほとんどであり、瓦器や古墳時代以前の土器はごく少数である。井戸の時期と合わせても、柱穴の多くは奈良時代のものと考えられる。しかし、古墳時代前期の区画のためと思われる溝や土坑も検出しておらず、同じ暗紫褐色粘質土の埋土の小穴も数個確認していることから、その当時の掘立柱建物の柱穴も含まれている可能性がある。 (田林香織)

IV 出土遺物

主に、包含層から軒瓦、古墳時代の土坑、奈良時代の井戸から土器が出土した。

瓦類 遺物整理箱で16箱分出土した。軒丸瓦8点、軒平瓦1点、丸瓦、平瓦、埠がある。軒瓦について記す。軒丸瓦には6225種別不明1点、6236種別不明1点、型式不明4点、平安時代以降2点である。軒平瓦は6641Cである。平安時代以降の軒丸瓦のうちの1点は時期不明の南北溝から、その他は包含層から出土した。 (原田憲二郎)

古墳時代の土器 土坑SK09から出土した土器について記す。器種は、土師器壺・短頸壺・高杯がある。1は土師器壺で、口縁端部の内面がわずかに丸く肥厚する。器表は風化し、調整は不明である。2は土師器短頸壺で、口縁部を欠く。体部下半の外面には板状工具によって施されたとみられるナテ調整とかすかなタタキ目がみられる。体部内面の上半にはヘラケズリ調整がみられ、下半には指頭圧痕が残る。3は土師器高杯で口縁部はわず



古墳・奈良時代の出土土器 (1/4)

かに外溝する。いずれも古墳時代前期のもので布留式の特徴がみられる。 (安井宣也)

奈良時代の土器 図示したものは、いずれも井戸から出土した平瓶である。4はSE26から、5はSE30から、6・7はSE28抜き取り穴から出土した。5・7は底部外面をクロケズリしている。6の体部外面には格子目タタキの痕跡がみられる。4・5・6は青灰色を呈し、硬質の焼き上がりのもの、7は白灰色で、外面に灰緑色の自然釉がかかる。口縁部が完存するものではなく、意図的に打ち欠いていると思われる。 (池田裕英)

6 平城京右京七条一坊十五坪の調査 第349次

所在地 奈良市六条町91・99

調査期間・面積 平成8年5月15日～7月12日 1,080m²

調査原因 老人保健施設建設（医療法人 康仁会届山）

I 調査の目的

調査地は、平城京の条坊復元では右京七条一坊十五坪の北東隅にあたり、調査地の東側には十・十五坪の坪境小路西側溝が想定されている。これまで十五坪内では、昭和60年度に本市教育委員会が十五坪の西辺部で市平城京第97次調査を行なっており、西一坊大路東側溝、奈良時代の掘立柱建物6棟、掘立柱塀2条、井戸1基、平安時代の井戸3基を検出した。平安時代の井戸のうち1基には、「井」枠に「禿屋」延久參年四月十日」と墨書きされた曲物が転用されており、山上遺物の実年代を知る手がかりを得るなどの貴重な成果を挙げている。調査は、これらの成果を踏まえ、小路西側溝の検出及び奈良～平安時代の宅地の様相を把握することを目的に実施した。

II 調査地の層相

発掘区内の層序は、作土（厚さ0.2m）の下に淡黄灰色砂（0.05m）、暗褐色土（0.05m）が続き、地表下0.3mで黄褐色粘土の地山となる。発掘区南西隅では暗褐色土の下に黄褐色細砂または灰色細砂が堆積している。これらの砂層は、Ⅱ河道の堆積とみられ、一時期この地点が河道になっていたことが判る。遺構は、地山上面と砂層上面（標高概ね57.2m）で奈良・室町時代の遺構を検出したが、平安時代の遺構を検出することはできなかった。

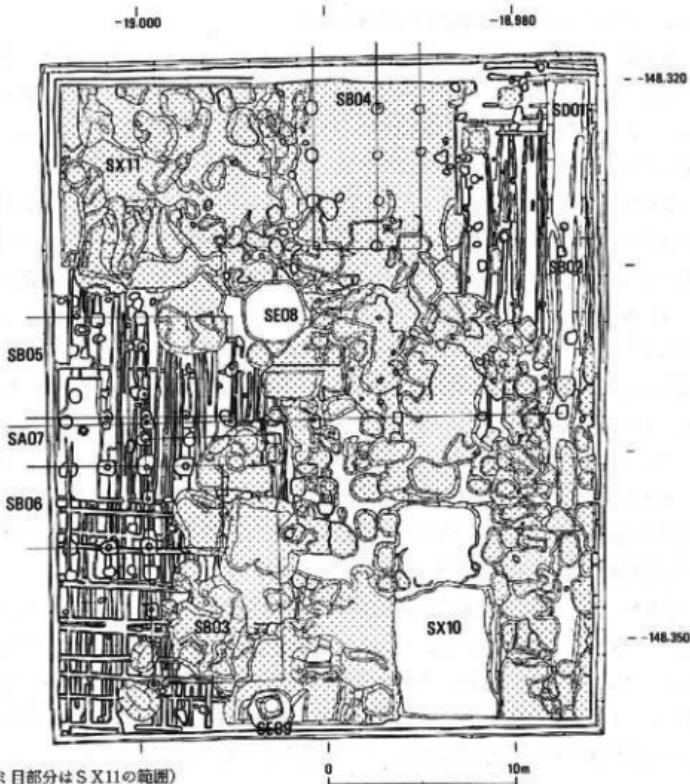
III 検出遺構

検出した主な遺構には、十坪・十五坪坪境小路西側溝1条、奈良時代の掘立柱建物4棟、掘立柱塀1条、橋、井戸2基、土坑1、室町時代の粘土採掘坑がある。

S D01 発掘区東辺で検出した南北方向の素掘りの溝で、十坪・十五坪坪境小路西側溝である。南北ともに発掘区外へ続く。後述する室町時代の粘土採掘坑で壊されている箇所もあるが、幅2.1～2.3m、検出面からの深さ0.2m、長さ34m分を検出した。埋土は茶褐色土である。溝内埋土から奈良時代後半の上師器・須恵器、丸・半瓦が少量出土した。溝心の国土座標は、X=-148,322.000、Y=-18,977.100である。

S B02 S D01溝底で検出した1間分の掘立柱列である。柱間寸法は1.4m。橋脚の痕跡と考えられる。

S B03 発掘区南西隅で検出した桁行6間、梁間3間の掘立柱南北棟建物である。柱間寸



第349次調査 遺構平面図 (1/300)

法は、桁行が北から3.0-2.1-2.0-2.0-2.0-2.0mと不揃いである。梁行は、柱穴が壊されている箇所もあるが、おそらく2.3m等間になると想えられる。

S B04 発掘区北半部で検出した桁行4間以上、架間4間の掘立柱南北棟建物で、東側に廂がつく。柱間寸法は、桁行が2.5m等間、梁行は妻柱を欠くため身舎は不明だが、廂の出は2.1mである。柱掘形から、土師器・須恵器片が少量出土した。

S B05 S B03の北側で検出した桁行4間以上、架間2間の掘立柱東西棟建物で、西側は発掘区外へ続く。柱間寸法は、桁行が2.1m等間、梁行は北東隅の柱穴を欠くが、残存する柱穴から2.7mの等間になると想えられる。

S B06 S B03と重複して検出した桁行4間以上、架間2間以上の掘立柱東西棟建物である。柱間寸法は桁行が2.1m等間。梁行は、妻柱の柱穴が壊されているため詳細は不明

だが、おそらく2.1mの等間になると考へられる。

S A07 発掘区中央付近でS B05と重複して検出した東西方向の掘立柱塀で、西端は発掘区外へ続く。東端の柱穴は、S D01溝底で検出した。柱間寸法は、東から1間～3間目までは4.2m等間、それ以外は2.1m等間である。おそらく1間～3間目の間にはそれぞれ柱穴があったものと思われる。重複関係からS B05よりも古いことが判る。

S E08 S B05の東で検出した井戸である。掘形は、東西3.4m、南北3.6mの平面方形を呈する。検出面からの深さは、3.1mである。井戸枠は抜き取られており残存しない。埋土からは奈良時代中頃の土器片が少量と奈良三彩小壺蓋・瓦類および木簡が出土した。

S E09 発掘区西端で検出した井戸である。掘形は、東西2.4m、南北2.2mの平面隅丸方形を呈する。検出面からの深さは2.7m。掘形は二段掘りされ、検出面からの深さ0.9mで東西・南北ともに一辺1.2mの掘形になる。井戸枠は抜き取られて残存しないが、井戸内埋土から幅0.12m、長さ2.0m、厚さ0.03mの板材が2枚出土しており、縦板組の井戸枠が構築されていたものと考えられる。奈良時代の中頃の土師器・須恵器が若干出土した。

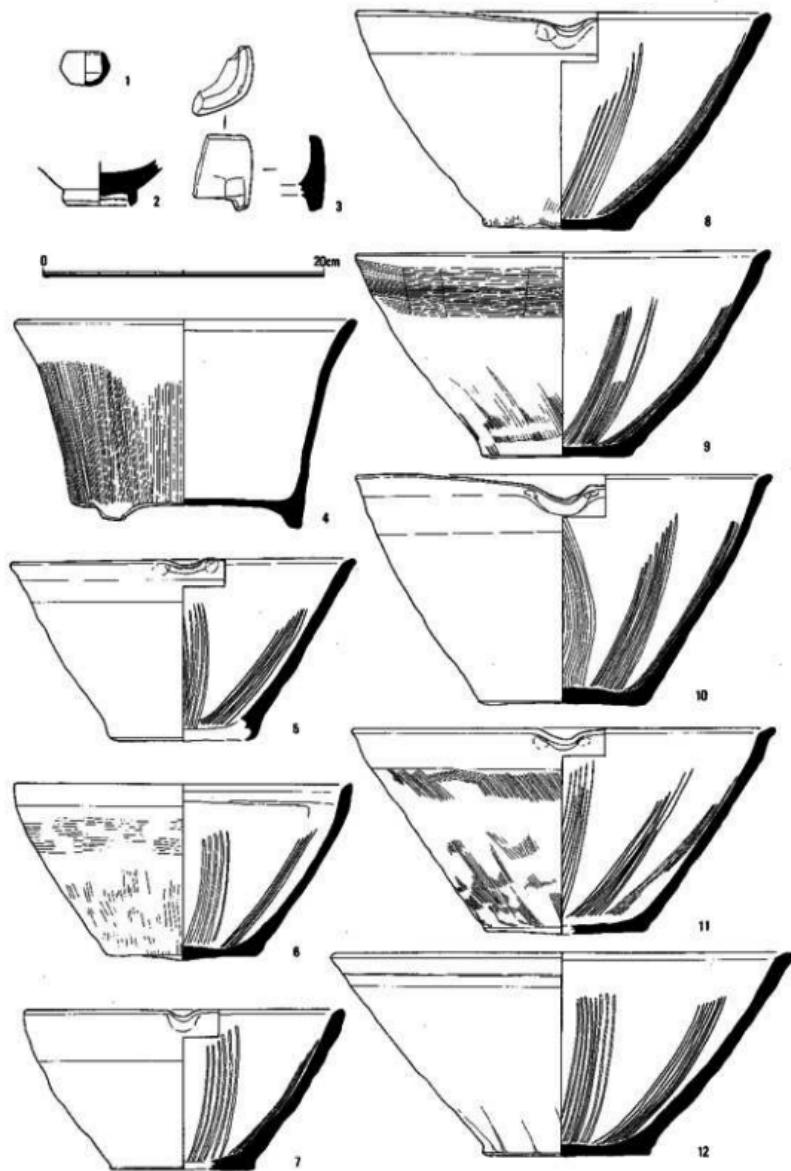
S X10 S E09の東側で検出した土坑である。東西6.0m、南北12.0m以上で、南側は発掘区外へ続く。検出面からの深さは、約0.4mである。土坑内には茶褐色粘土が堆積する。奈良時代後半の土師器・須恵器、軒平瓦(6702A)が少量出土した。

S X11 発掘区のはば全面に及んで検出した粘土採掘による土坑群である。発掘区全体の約70%を占めている。検出面からの深さは、浅い所で0.3m、深い所では1.0mもある。S X11により奈良時代の遺構の多くが壊されたものと考えられる。土坑内の埋土は黄褐色粘土のブロックを含んだ灰色粘土である。埋土からは、奈良時代の土師器・須恵器、軒丸瓦(6225種別不明)、13世紀代の瓦器、15世紀後半の瓦質土器擂鉢が出土した。瓦質土器擂鉢は、意識的に据えて埋められたかのような状態で6ヶ所で検出した。 (三好美穂)

IV 出土遺物

遺物整理箱で43箱分の瓦類、土器類、石製品、木製品が出土した。大半が奈良時代と室町時代の土器類と丸・平瓦である。以下、土器類と石製品、木製品について記す。

土器類 遺物整理箱で22箱分出土した。ここでは、粘土採掘坑S X11出土の土器について記す。S X11からは遺物整理箱で13箱分の土器が出土した。大半は奈良時代の土師器・須恵器と室町時代の土器で、鎌倉時代瓦器・土師器皿が少量あるだけである。室町時代の土器には、瓦質土器擂鉢(5～12)・深鉢(4)・方形淺鉢(3)、ミニチュア壺(1)、風炉等、青磁碗(2)、天目茶碗等がある。瓦質土器擂鉢・深鉢はいずれも完形またはそれに近い状態で、擂鉢18個体、深鉢1個体が出土した。瓦質土器擂鉢は、口径が25cm以下のもの(5～7)、30cm前後のもの(8～11)、32cm以上のもの(12)の3種類があり、さらにそれぞれ器高が浅いものと深いものに分かれ。口縁部が全周残るものには必ず片口



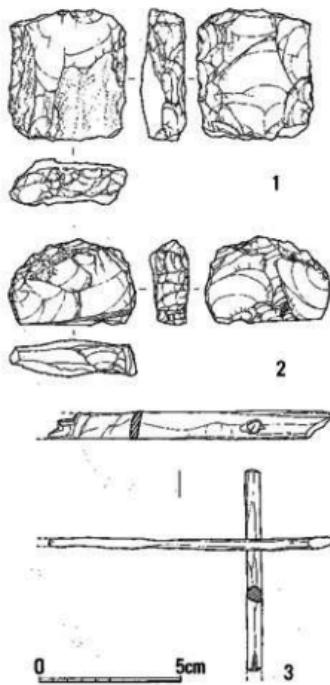
黏土探掘土坑 S XII 出土土器 (1 / 4)

があることから、口縁部が一部欠損して片口が分からぬものも、おそらく片口があるものと想定できる。内面の描目は1単位5~10本で6~11条あり、横目の単位と条数の組合せは11種類ものバリエーションがあることが判る。体部外面にはハケメ調整（または板状の工具のナデ調整）があるものとないものがあるが、いずれも外面には指または掌で押さえ付けた痕跡が残る。内面はナデ調整であるが、板の小口痕跡を残すものが数個体あることから、おそらくはコテで調整しているものと思われる。なお、7と8は入れ子状になつて出土した。5・7は底部の中央を穿孔していた。深鉢は口径24.3cm、器高14.8cmで、底部には3足がある。外面は縦方向のヘラミガキで調整する。ミニチュア壺は口径2.4cm、器高2.4cm、最大径3.5cmである。表面の炭素の吸着は部分的にしか見られない。方形浅鉢は角の部分の破片で、内面には炭素の吸着が見られない。青磁碗は龍泉窯系青磁で、高台内側まで施釉する。これらはいずれも15世紀後半のものと考えられる。（中島和彦）

石製品・木製品 石製品には石鈎の未製品がある。1は巡方の木製品である。厚手の剥片を用いて、平面形がほぼ正方形の板状に加工している。縦4.6cm、横4.2cm、厚さ1.6cm。珪岩製。遺物包含層出土。2は丸納の未製品である。厚手の剥片の一端に切込みを入れて折取った後、厚さを整え、周縁を調整して半円形状に加工している。折取りに失敗し、折れ面を再度調整している。縦3.1cm、横4.5cm、厚さ1.3cm。安山岩製。SX11出土。3は用途不明品の木製品である。厚さ0.4cm、幅0.9cmの細い板状に、直径約0.5cmの棒を差込んだもので、岡の左端と下部は欠損している。棒状部分はなにかの軸として機能していた可能性もある。SE09内山上。

木簡 木簡は3点出土した。3点とももとは同一の板材と思われる。このうち2点は文字が接合し、墨書後に剖裂いて短冊形に整形したものである。墨書は方位と数字を記したもので、用途は不明。いずれもSE08山上。

- 1 「西一二三四五六七 (220)×(23)×5 019
 北一二三四□
 (158)×(8+9)×6 019
 (松浦五輪美)



石製品・木製品 (1/2)

7 平城京左京五条四坊九坪の調査 第350次

所在地 奈良市大森西町145-1

調査期間・面積 平成8年5月20日～6月25日 382m²

調査原因 共同住宅建設（奥田照雄氏届出）

I 調査の目的

調査地は、平城京の条坊復元では、左京五条四坊九坪北端部のほぼ中央にあたる。したがって、坪内の様相に加えて、四条大路の南側溝及びそれに関わる遺構の検出を目的として実施した。また、調査地の北西では、弥生時代後期の溝が（平城京第266次）、北東でも同時代の溝・土坑が（平城京第208・335次）検出されており、周辺に弥生時代の集落が存在することは疑いがない。したがって、その範囲を確認することも目的とした。

II 調査地の層相

層序は、作上（黒色土・暗灰色土・暗茶灰色土・灰色土）の下が、黄褐色土あるいは黄褐色砂（標高62.7～62.8m）で、この上面で奈良時代、弥生時代の遺構を検出した。また、発掘区両端でこの遺構面を掘り下げたところ、淡茶灰色粘土あるいは灰色砂が現われ、この上面から掘りこんでいる遺構を検出した。

III 検出遺構

弥生時代の遺構 壁穴住居2棟、溝2条がある。

S B01 発掘区北端で検出した平面隅丸方形の壁穴住居。南端部を確認した。一辺4.5m以上。壁溝がめぐる。

S B02 発掘区中央で検出した平面隅丸方形の壁穴住居。東半部を確認した。一辺5.5m以上。壁溝を確認した。

S D03 S B02と重複した位置で検出した素掘りの蛇行溝。S B02より新しい。北から南西方向にのびる。15m分を確認した。幅0.3m、深さ0.1m。

S D04 発掘区南端で検出した緩やかに蛇行する素掘りの溝。自然河川であろうか。東北東から西南西方向にのびる。10.5m分を確認した。幅2.8～3.5m。深さは最も深い部分で0.6m。埋土の状況は粘土と砂の互層である。

奈良時代の遺構 掘立柱建物7棟、掘立柱廻4条、溝4条、土坑1基がある。

S F05 発掘区北端で検出した道路。南端を確認したにとどまるが、検出位置からみて四条大路と思われる。幅3.5m分を確認した。

S X06 S F05を横切る溝。暗渠と思われる。長さ2.5m分を確認した。幅0.4m。

S D07 四条大路 S F 05の南側溝。長さ2.5m分を確認した。幅1.8m。深さ0.15m。なお、溝心の国土座標はX = -147,085.75m、Y = -16,656.32mである。

S A08 S D07の南で検出した東西方向の築地塀。塙板留の添柱とみられる柱穴を確認した。

S D09 S A08の南で検出した東西方向の素掘りの溝。築地塀 S A08の雨落溝とみられる。幅1.0~3.6m、深さ0.3m。後述のS A12より新しい。

S K10 S D09と重複した位置で検出した土坑。先後関係は不明。平面は丸長方形で、東西2.1m、南北3.4m、深さ0.15m。

S D11 S D09と重複した位置で検出した素掘りの溝。S D09より新しい。改修されたのか段状に掘られている。長さ4.5m分確認した。幅は4.6mだが、岸が削られたものと思われ、本来は2m前後であろう。深さ0.5m。

S A12A・B S D09南岸沿いで検出した東西方向の掘立柱塀。2間(2.2m)分確認した。柱間は1.1m等間。同位置で建替があり、Bは東から2本目の柱を欠く。

S B13 S D11の南で検出した南北2間(4.0m)の掘立柱列。掘立柱建物の東側柱列と思われる。柱間は2.0m等間。

S B14A・B S B13と重複した位置で検出した東西棟の掘立柱建物。桁行2間(3.6m)以上、梁間2間(4.2m)の身舎に南廂が付く。柱間は桁行1.8m等間、梁間2.1m等間。廂の出は2.4mである。同位置で建替えがあり、Bは東から2間目に間仕切りがある。

S B15 S B14と重複した位置で検出した南北棟の掘立柱建物。桁行2間(4.5m)、南北2間(3.3m)。柱間は桁行が北から2.4m、2.1m、梁間が西から1.5m、1.8m。

S B16 発掘区南端部で検出した南北2間(3.6m)の掘立柱列。掘立柱建物の東側柱列と思われる。柱間は1.8m等間。

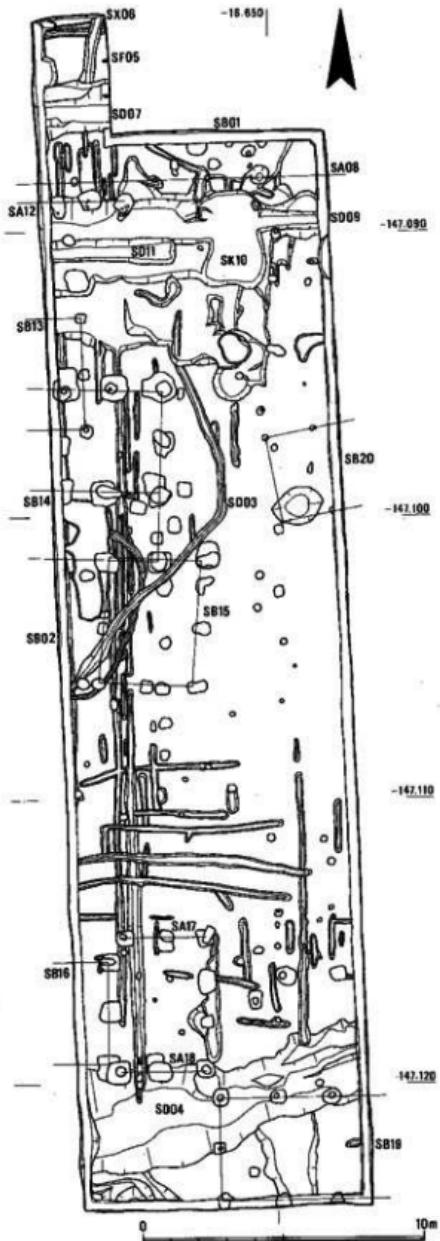
S A17 S B16の東で検出した東西2間(3.0m)の掘立柱塀。柱間は1.5m等間。

S A18 S A17と平行して検出した東西2間(3.0m)の掘立柱塀。中央の柱穴の柱位置は不明である。

S B19 S A18の南で検出した東西棟の掘立柱建物。桁行2間(4.2m)以上、梁間2間(3.6m)。柱間は桁行2.1m等間、梁間1.8m等間。

S B20 S B14の東で検出した掘立柱建物。建物主軸は北でやや西に振れるため、奈良時代より遡る可能性がある。東西1間(1.8m)以上、南北2間(3.0m)。西側柱列の中央の柱穴を欠く。

なお、下層で検出した遺構は、溝1条と土坑1基である。溝の埋土は灰色砂礫で、自然河川と思われる。出土遺物がなかったため、遺構の時期は不明だが、上層遺構の時期からみて、弥生時代以前の遺構であることは間違いない。



第350次調査 連携平面図 (1/200)

IV 出土遺物

弥生時代の土器・石器（スクレイバー・剝片）、飛鳥時代の須恵器、奈良時代の土師器・須恵器・瓦・埠がある。このうち、まとまって出土した弥生時代の溝SD04出土の土器について説明する。

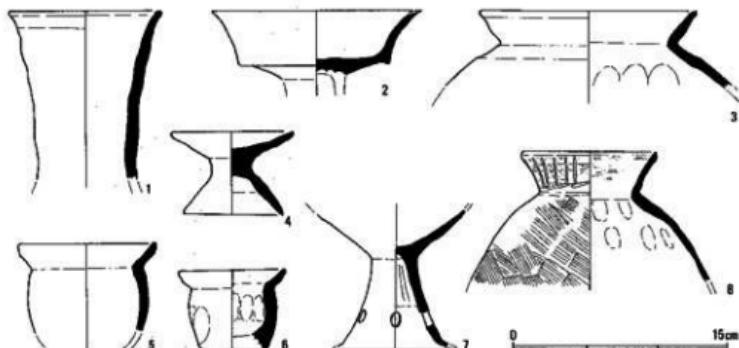
1・2・8は壺である。1は長頸壺の口頸部である。口径10.2cm。やや緩やかに外に広がる。端部は外反し、内側にやや肥厚する。調整は、外面にわずかにミガキがみられる。2はいわゆる二重口縁壺の口縁部である。端部を欠く。口径14.8cm。外反して外に広がる。8は広口壺である。体部下半を欠く。口径9.3cm。体部と口縁部の境は、くの字に屈曲し、口縁部は外に広がる。端部は外にやや肥厚する。体部外面は斜め方向のハケメ、内面は指頭圧痕がみられる。口縁部外面はヨコナデののち、縦方向のミガキが間隔を開けてみられる。

3は甌の口縁部である。口径15.2cm。体部と口縁部の境は、くの字に屈曲し、口縁部は外に広がる。端部は丸い。

4は小形器台。口径8.6cm、脚径7.0cm、器高5.9cm。受部は浅く、大きく外に広がる。脚部はほぼ直線的に外に広がり、端部では器壁が薄くなる。

5・6は小形鉢。いずれも底部を欠くが、6は平底とみられる。口径は5が9.5cm、6が7.3cm。6の器高が5.7cm、底径が4.7cmである。いずれも体部と口縁部の境はくの字に屈曲し、短い口縁部はやや内彎気味に外に広がる。口縁端部は丸い。6は体部内外面に指頭圧痕がみられる。

7は高杯である。口縁端部、脚端部を欠く。口縁部はやや内彎気味に外に広がる。脚はほぼ直線的に外に開き、端部は外反する。円形の透かしが4孔みられる。 (森下浩行)



溝SD04出土土器(1/4)

8 平城京左京五条六坊八坪の調査 第352次

所在地 奈良市南新町19-1・4

調査期間・面積 平成8年5月30日～6月13日 105m²

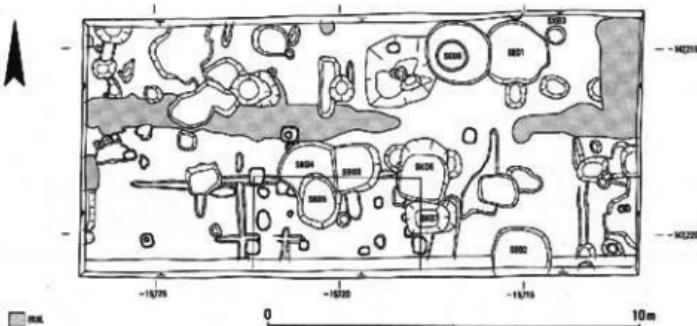
調査原因 共同住宅新築（松川公明氏届出）

I 調査の目的 調査地は平城京左京五条六坊八坪の南端中央部にあたる。周辺での調査が少ないため、遺構の把握を目的とした。

II 調査地の層相 層序は上から砂石、真砂土（盛土）、黒灰色砂質土、橙褐色粘質土、暗灰色砂質土、淡茶灰色砂質土と続き、現地表下約0.8mで黄褐色砂礫の地山となる。地山の標高は概ね71.6mである。遺構はすべて地山上面で検出した。

III 検出遺構・遺物 検出遺構には近世の井戸2基、埋甕1、土坑4、近代の井戸1基、時期不明の掘立柱建物1棟がある。S E01・02は石組の井戸枠が抜き取られている。前者から17世紀代の土師器皿・鉢・炮烙、国産陶器碗・瓶・擂鉢・壺・甕、後者から18世紀初頭の土師器皿・炮烙、国産陶器碗・皿・瓶・壺・甕・香炉が出土した。S X03は瓦質土器甕を埋めたもので、用途は小便器である。S K04～07は平面隅丸、あるいは不整形な土坑で、深さ約0.4～0.7mである。遺構の性格は不明で、17世紀後半の土師器・国産陶器類が出土した。S E08は近代の井戸である。S B09は東西2間（4.4m）、南北1間（1.8m）分を検出した。東西柱間寸法は2.2m等間である。土師器片が出土した柱穴もあるが、時期は特定できなかった。そのほか、建物としてはまとまらなかつたが、8～9世紀初頭の土師器・須恵器片が出土した柱穴と瓦質土器片が出土した柱穴がある。

（宮崎正裕）



第352次調査 遺構平面図 (1/150)

9 平城京左京三条五坊十三坪の調査 第354次

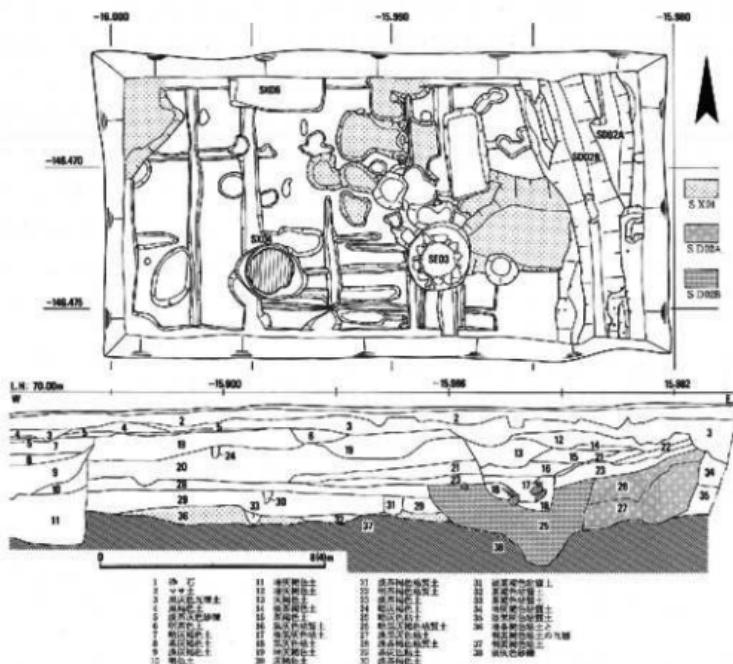
所在地 奈良市西之阪町5-1他

調査期間・面積 平成8年7月15日～8月21日 220m²

調査原因 (仮称) 西之阪児童館他建設(奈良市長通知)

I 調査の目的

調査地は、平城京の条坊復元では左京三条五坊十三坪のほぼ中央に位置し、また近世奈良町の西端に位置する。十三坪内では過去2回の調査が行われている。発掘区の西約80mの第117次調査では江戸時代の土坑を10数基検出し、北東約60mの第287次調査では平安時代後期から鎌倉時代の遺構と整地土を検出している。今回の調査においても中世の遺構の検出が予想され、奈良町縁辺部の様相を知る資料の確認が期待された。



第354次調査 遺構平面図(1/200) 北壁土層図(1/100)

II 調査地の層相

発掘区内の層序は、上から近現代の盛土、江戸時代の整地土の暗灰褐色土・淡灰褐色土、室町時代の整地土の淡茶褐色粘質土・茶灰色粘質土で、現地表下約1.8mで地山の明黄褐色粘土または淡灰色砂礫になる。地山の標高は約67.8mで、発掘区内の地山はほぼ水平である。また発掘区北東端で瓦器を含む整地土暗灰褐色粘質土と淡黒灰色粘質土を確認した。発掘区内西側にはこの整地土がないことから、第287次調査で確認した平安・鎌倉時代の整地土はこのあたりで終わると考えられる。

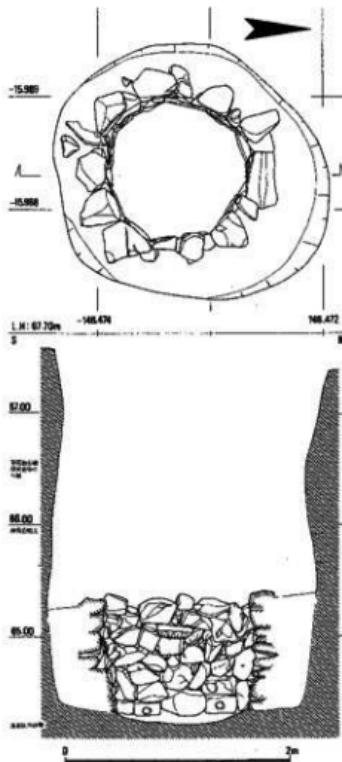
III 検出遺構

地山上面で奈良・鎌倉・安土桃山・江戸時代の遺構を検出した。

奈良・鎌倉時代の遺構 S X01がある。平面不正形で、深さは約0.1~0.5mある。土師器、須恵器の細片が出土した。黄褐色粘土の地山の部分のみに広がっていることから、この粘土の採取坑と考えられる。

また地山上面で幅約0.5mの耕作に伴うと考えられる東西南北方向の素掘りの溝を数条検出した。出土遺物に瓦器窓の破片が1片あり、室町時代の整地土に覆われていることから、鎌倉時代頃のものと考えられる。

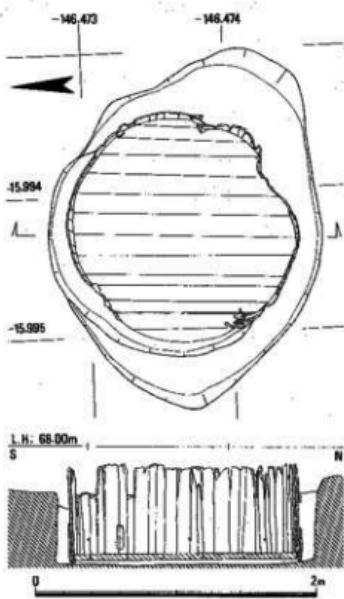
安土桃山時代の遺構 溝SD02A・B、井戸SE03、埋桶遺構SX04、平面不正円形の土坑がある。SD02は南北方向の素掘りの溝で、溝の主軸は北でやや西へ傾く。ほぼ同じ場所にA・Bの2時期の溝が重複しており、いずれも発掘区南北へ統いてゆく。古い溝SD02Aは、新しい溝SD02Bで西の肩が壊されているが、幅約2m分、深さ約1m分を確認した。SD02Bは幅約3m、深さ約1.4mである。いずれも埋土から16世紀後半の遺物が多数出土した。井戸SE03は円形石組井戸である。掘形は径約2.4mの平面円形で深さは約3.3mである。石組は内法径1.3mの平面円形で、底から1.1m分残る。石組には五輪塔等が使用されている。埋土から土器が少量



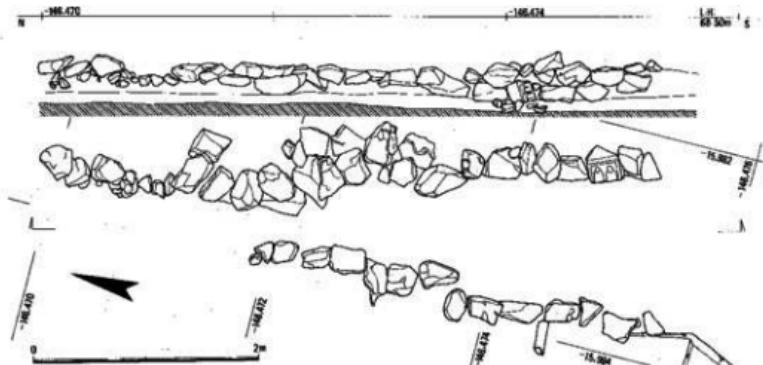
井戸SE03 平面・立面図 (1/50)

出土した。壺桶遺構 S X04は長径2.6m、短径1.9mの平面橢円形の掘形に、桶を据えた遺構である。桶側は底から0.7m分残存しているが、西側の桶側の一部が現代の擾乱で壊されている。桶は径1.57mの底板に桶側を立て、竹のタガが巻かれる。底板は厚さ約5cm、幅8cmから15cmの板を木の合釘でとめ、全部で14枚ある。桶側の内面には幅約5cm、長さ約15cm、厚さ約2cmの角材が鉄釘で10個以上打ち付けられている。角材は小口面の一方を底板に向かって、底板から5cm上の所にすべての小口面が揃うようにしている。埋土からは土器と共に獣骨等が出土している。

江戸時代の遺構 石組溝 S D05と土坑 S K06がある。S D05はS D02の埋没後ほぼ同じ位置に掘削された南北方向の溝で、長さ5.5m分、石組1～2段分（高さ0.2～0.4m分）を検出した。溝の内法の幅は北で約0.3m、南で約1.2mで、南に行くにつれて広くなる。発掘区北壁の土層観察から溝は深さ約1.2mあり、石組の上の部分は抜取られていることがわかる。石組には五輪塔や板碑仏等の石造物が使われる。S K06は東西3.4m、南北1.2m以上、深さ1.9mの平面方形になると考えらる土坑で、発掘区外北に続く。18世紀後半の土器が出土した。



壺桶遺構 S X04 平面・立面図 (1/40)



石組溝 S D05 平面・立面図 (1/50)

IV 出土遺物

土器類は、奈良・平安時代後期～江戸時代の各時期のものがみられる。土師器・瓦質土器・国産陶器・輸入磁器があり、大半は S D02 から出土した。

瓦類は軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、棟瓦がある。軒丸瓦は平安時代以降の巴紋瓦 4 点、型式不明 1 点、軒平瓦は平安時代以降の唐草紋 3 点である。
(中島和彦)

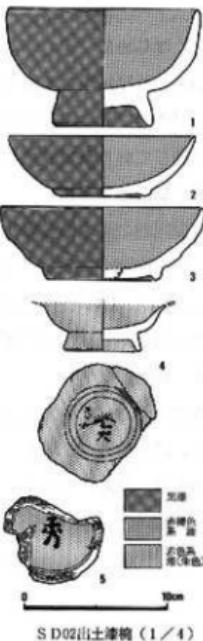
木製品は 16 世紀後半の溝 S D02A・B と、井戸 S E03・S

X04、江戸時代の石組造構 S D05・中近世の包含層から合計 30 点出土している。出土したのは漆碗（9 点）、曲物（8 点）、箸（7 点）、その他（6 点）である。

出土遺物のなかで溝 S D02A 上層出土の漆碗が比較的まとまった資料であるため、主なものを図化し、報告する。

溝 S D02 出土の漆碗はすべて高台付きである。漆の塗方から大きく 2 種類に分けられる。1～3 は厚手で、外面は黒漆、内面は赤褐色系漆を塗る。塗りは粗く漆の残存状況も不良である。1 は口径 13.6cm、器高 8.4cm。底面に「井」が線刻されている。2 は復元径 14.5cm、器高 5.1cm。3 は復元径 13.2cm、器高 4.3cm。4・5 はいずれも底部しか残存していないが、1～3 よりも薄手に仕上げ、内外面とも赤色系漆（朱色）を丁寧に塗る。共に底部に黒漆で字または文様がかれている。4 は高台径 5.5cm、残存高 3.2cm。5 は残存高 1.9cm。

動物遺存体 S X04、土坑 S K06、溝 S D01、S D05 から哺乳類、魚介類の動物依存体が出土している。そのうち、S X04 から比較的まとまりのある資料が出土しており、種類と部位、点数を以下の表としてまとめておく。
(久保邦江)



S D02出土漆碗 (1/4)

種類	部位	左右	点数	編 号	種 類	部位	左右	点数	備 考	種類	部位	左右	点数	備 考
イヌシ	頭骨	1	大型、脛を取り出している。	イノシシ	肩甲骨	右	1			ウマ	肋骨	1		
イヌシ	上腕骨	右	2	1点は多数の傷跡あり、表面であったことか判明。もう1点は中央で折れている。	〃	上腕骨	右	3	うち2点に刃物痕跡、うち2点に焼成未発育・過度化骨筋	カバ	大腿骨	右	1	近辺・位あるが中央を欠
〃	尺骨	左	1		〃	橈骨	右	1	老成化骨筋、過度化骨筋	〃	中足骨	右	1	
〃	桡骨	左	1		〃	尺骨	右	1	近・過度化骨筋	〃	脛骨	左右	各1	左のものは体部
〃	肋骨	左	1	1 刃物痕跡	ウマ	頭骨	1	半裁される	マグロ	前上頭骨	左	1		
〃	寛骨	左右	3	右1・刃物痕跡・左2・斧の痕	〃	基節骨	左右	3	右1・左2	〃	鳥口骨	1		
〃	大腿骨	左	1	骨端部未化骨	〃	中節骨	左	2		〃	脚指骨	左右	各1	
イノシシ	椎骨	1			〃	末節骨	左右	4	右2・左2	アワビ	貝殻	2	何れも破片。接着するか?	

S X04出土動物遺存体一覧表

10 平城京左京四条三坊六坪の調査 第355次

所在地 奈良市三条桧町168-1

調査期間・面積 平成8年8月2日～9月12日 380m²

調査原因 共同住宅建設（大西弘氏届出）

I はじめに

調査地は平城京の条坊復元では、左京四条三坊六坪の中央やや南西よりに位置する。また、同坪内で、平成6年度に奈良県立橿原考古学研究所が本調査地の北約50mで発掘調査を実施しており奈良時代の掘立柱建物、掘立柱塀、溝、土坑などの遺構を検出している。

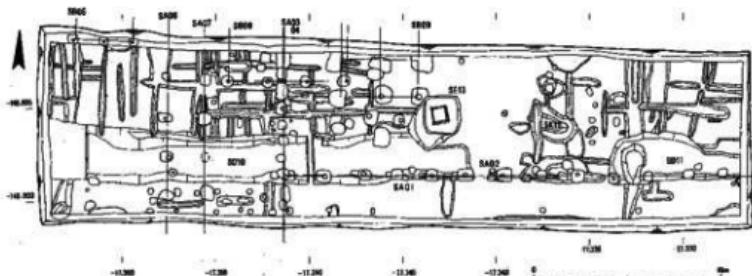
II 調査地の層相

発掘区内の基本的な層序は、黒色土（作土、厚さ0.1m）以下、明黄灰色砂質土（厚さ0.15m）、灰褐色粘質砂（厚さ0.2m）、灰褐色粘土（厚さ0.2m）、淡灰茶色シルト（厚さ0.1m）、青灰色粘土（厚さ0.2m）と続き、現地表下約1.0mで暗褐色粘土の地山に至る。奈良時代の遺構面は地山の上面で、標高は概ね59.1mである。

III 検出遺構

検出した遺構には、奈良時代の掘立柱建物3棟、掘立柱塀6条、井戸1基、溝、土坑がある。以下で概略を記す。

S A01 発掘区中央南で検出した東西塀。東西8間（14.4m）である。柱間寸法は1.8m（6尺）等間。西から2番目の柱穴はS A02の柱穴で壊されている。西は後述のS A03に取りつく。重複関係からS A02およびS D10・11より古い。



第355次調査 遺構平面図 (1/300)

S A02 発掘区南で検出した東西塀。13間（23.4m）分を検出した。西は後述の S A04 に取りつく。柱間寸法は西から2.1-2.1-1.8-1.8-1.8-2.1-2.1-1.8-2.1-2.1-1.8mである。重複関係から S A01より新しく S D10・11よりも古い。S A02は S A01にはば重複して建てられていることから、S A01を建て替えたものである。また、S A01・02ともに坪境小路心南から北へ3分の1付近の位置にある。

S A03 発掘区中央西で検出した南北塀。6間（10.8m）分を検出した。柱間寸法は1.8m（6尺）等間。重複関係から S A04、S D10よりも古い。

S A04 発掘区中央西で検出した南北塀。5間（9.0m）分を検出した。柱間寸法は1.8m（6尺）等間。重複関係から S A03よりも新しく、S D10よりも古い。S A04は S A03にはば重複するように建てられていることから、S A03を建て替えたものである。

S B05 発掘区北端で検出した東西2間（3.0m）の掘立柱建物。柱間寸法は1.5m（5尺）等間。発掘区外に続くため建物規模については不明である。

S A06 発掘区中央西で検出した南北塀。5間（10.5m）分を検出した。柱間寸法は2.1m（7尺）等間。重複関係から S D10よりも古い。

S A07 発掘区中央西で検出した南北塀。5間（10.5m）分を検出した。柱間寸法は2.1m（7尺）等間。北から3番目の柱穴は S D10に壊されている。重複関係から S D10よりも古い。

S B08 発掘区北辺で検出した東西3間（6.3m）の掘立柱建物。柱間寸法は2.1m（7尺）等間。発掘区外に続くため建物規模については不明である。

S B09 発掘区北辺で検出した南北1間（2.1m）以上、東西2間（4.2m）の総柱建物。柱間寸法は東西・南北とともに2.1m（7尺）等間。発掘区外に続くため建物規模については不明である。

S D10 発掘区中央で検出した東西方向の素掘りの溝。幅2.2m、検出面からの深さ0.3m、長さ23m分を検出した。西は発掘区外に続く。埋土から奈良時代中頃～後半の土師器・須恵器・製塙上器、軒平瓦6664D 1点、6721H 1点、6691A 1点、漆器が出土した。

S D11 S D10の東で検出した東西方向の素掘りの溝。幅1.5～2.5m、検出面からの深さ0.2m、長さ7.5m分を検出した。東は発掘区外に続く。S D10・11共に灰褐色粘土で埋まっており、幅も同じで位置的にみても S D10と一連の溝であると思われる。S D10・11とも坪境小路心南から北に3分の1付近の位置にある。

S K12 発掘区中央東で検出した平面が不整形の土坑。南北約2.0m、東西約2.6m、検出面からの深さ0.15mである。埋土から8世紀末頃の土師器片、須恵器甕・杯Bが出土した。

S E13 発掘区中央で検出した掘形の一辺が約2.0mの平面が隅丸方形を呈する井戸で

ある。検出面からの深さ1.4mである。枠組構造は縦板組隅柱横棟留めである。井戸枠内法は南北約0.68m、東西約0.65mで底部から約1.0mほどが残存する。横棟は3段分確認した。井戸枠の隅柱と横棟は柄で組み合うものではなく、井桁状に組んだ横棟の上に高さ0.4mの隅柱をのせるもので、2段分確認した。この枠で縦板を支持している。縦板は一边に8~12枚が使われている。枠内から8世紀末~9世紀初頭にかけての土師器、須恵器、墨書き土器、土馬、木錐、斎串、木把付き刀子などが出土した。

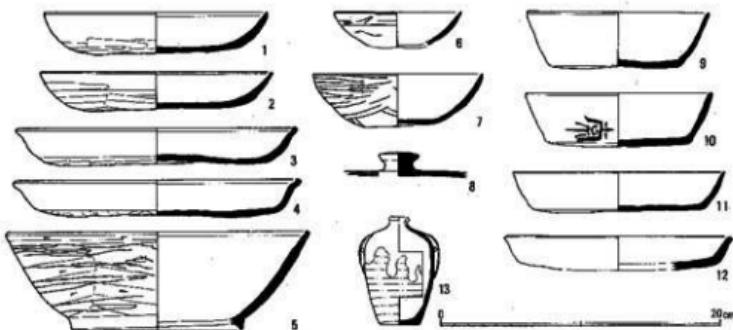
IV 出土遺物

今回の調査では、土師器、須恵器、丸瓦、平瓦、軒瓦、木製品、金属製品など遺物整理箱で15箱分が出士した。以下、SD10およびSE13から出土した遺物について概要を記す。

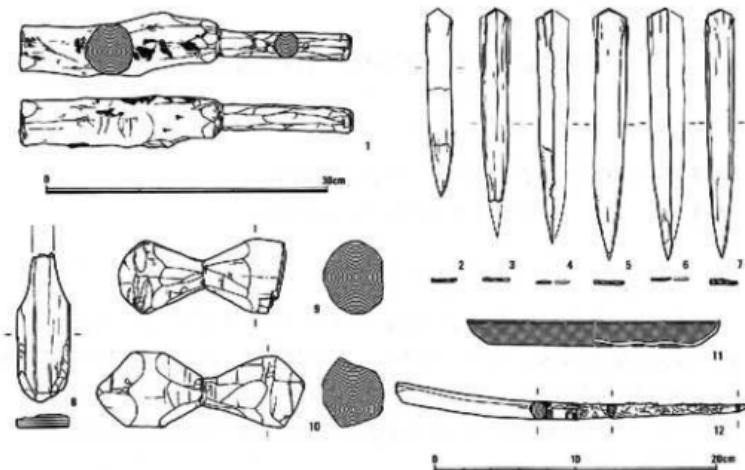
土器類 SE13井戸枠内から遺物整理箱で3箱分、掘形から1箱分の土師器・須恵器が出土した。これらは、南都I期中段階（8世紀末~9世紀初頭）の特徴をもつ土器群である。枠内出土の土師器には杯A・B、杯蓋、皿A・C、碗A、高杯、壺B、甕、製塩土器が、須恵器には杯A・B、皿A・C、ミニチュア甕、甕がある。その他に、土馬の顔面部分が1点出土した。掘形出土の土師器には甕、杯片、皿片、高杯、須恵器には甕、杯片、皿片がある。土師器皿類には、河内系の特徴をもつものが多く見られる。土師器皿A（3）と須恵器杯A（10）には、「鳳(常)」と読める文字が墨書きされている。
（三好美鶴）

木製品・金属製品 木製品は井戸SE13と、溝SD10（奈良時代中~後半）から出土している。SE13の掘形から匙状木製品1点、箸1点、糸巻き1点、斎串3点が出土、枠内から木錐2点、曲物底板1点、曲物蓋板1点、斎串9点が出土している。SD10からは黒漆塗りの皿1点が出土している。以下主なものについて概要を報告する。

1は横楕である。節の多い芯持ちの丸太材を使用している。身は両端に加工痕がある他は、樹皮を除いただけで、両面に敲打痕が残る。また、材質の強化のため黒く焦がした痕



井戸SE13枠内出土土器（1／4）



出土木製品・金属製品（1は1／6、2～12は1／4）

跡がある。身と柄の境目は明瞭で、その部分で折れて出土した。

2～7は斎串である。いずれも両端が主頭状で、上部の左右各一ヶ所に切り込みを入れるB II型式に属する。

8は匙状木器の身の部分である。先端の平面形は半円形で、先端を両側から削りだしている。表面は平滑に加工されているが、割り裂いた際にできた段差が残る。

9・10は木錐である。円柱状の材の側面中央を左右から荒く削り込み細くする。9は樹皮を除いた丸太材を用いている。片端は材を切り離した際の加工のままであるが、もう一方は材の角を取るように斜めに削り込まれている。10は両端の角を落としている。

11は漆器皿Aである。器壁は非常に薄く仕上げられており、黒漆を全面に丁寧に塗布する。木取は縦木取りである。

金属製品はSE13の枠内から木把付きの刀子が1点（12）出土した。刀身を固定するため、細い糸を幅1cmで2箇所に密に巻き付け漆で固めている。
（久保邦江）

Vまとめ

今回の調査では、坪内を南から3分の1に区画する東西塀SA01・02、東西溝SD10・11を検出した。重複関係からSA01→SA02→SD10・11の順で作られている。SD10からは奈良時代中頃～後半にかけての遺物が出土している。坪は分割され使用されていたことがわかる。またSD10とSD11の間には約7.5mの空閑地がある。通路として利用されていたと思われる。坪内を西から3分の1付近を南北に区画する溝や塀はない。SD10の国土座標はX=-146,897.730、Y=-17,355.000である。
（山前智敬）

11 平城京左京三条四坊一坪の調査 第357次

所在地 奈良市芝辻二丁目10-2・3

調査期間・面積 平成8年10月2日～10月23日 136m²

調査原因 事務所付共同住宅建設（西田綱氏届出）

I 調査の目的

調査地は、平城京の条坊復元では、左京三条四坊一坪の北東部にあたる。しかし、調査地の北側を佐保川が東流しており、氾濫によって遺構が損なわれている可能性があったため、試掘調査（96-5次調査）を行なったところ、北半部は損なわれていることが判明した。したがって、調査は、南半部に発掘区を設け、坪内の様相を知るために実施した。

II 調査地の層相

層序は、上から造成土（0.6～1m）、黒色土（作土）、灰色粗砂、灰色粘土（約0.5m）、明茶灰色砂質土、灰色砂上、茶灰色砂質土、暗褐色粘砂土とづく。明茶灰色砂質土上面で耕作に伴うと思われる数条の素掘りの溝を、茶灰色砂質土上面（標高64.0m）で奈良時代の遺構を、その下の暗褐色粘砂土上面（標高63.7m）で蛇行する溝を検出した。

III 検出遺構

時期不明の素掘りの溝数条、蛇行する溝1条と、奈良時代の掘立柱建物5棟、掘立柱塀2条、溝1条がある。

S D01 蛇行する東西方向の素掘りの溝。溝底は西に下る。幅0.8～1.0m。

S D02 東西方向の素掘りの溝。溝底は西に下る。幅1.2～1.8m。

S B03 東西2間（4.2m）以上、南北2間（3.6m）以上の掘立柱建物。東の1間は扇になると思われる。柱間は東西2.1m等間、南北1.8m等間。

S B04 S B03の東で検出した掘立柱列。南北2間（3.4m）を確認した。掘立柱建物の西側柱列と思われる。柱間は1.7m等間。

S B05 梁間2間（3.0m）、桁行2間（3.3m）以上の東西棟掘立柱建物。東の1間には間仕切りがある。柱間は桁行が西から1.6m、1.7m、梁間は北から1.6m、1.4m。

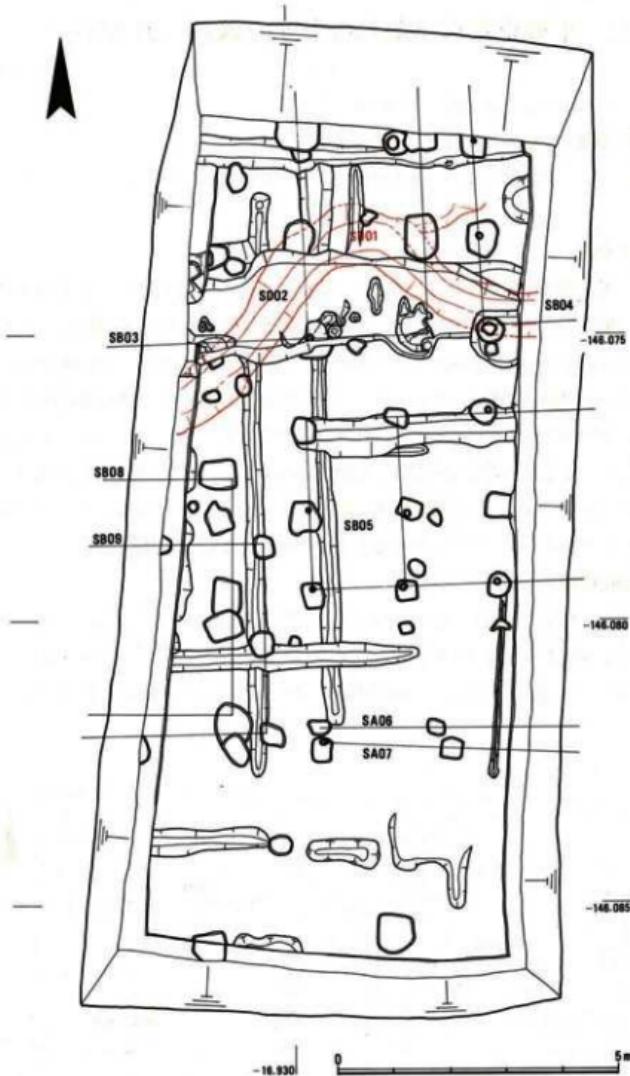
S A06 S B05と平行する東西方向の掘立柱塀。1間分（2.1m）を確認した。

S A07 S A06と平行する東西方向の掘立柱塀。1間分（2.4m）を確認した。

S B08 南北2間（4.2m）の掘立柱列。掘立柱建物の東側柱列。柱間は2.1m等間。

S B09 南北2間（3.3m）、東西1間（1.8m）以上の掘立柱建物。柱間は南北1.65m等間。

（森下浩行）



第357次調査 造構平面図 (1 / 100)

12 平城京左京二条六坊十坪の調査 第359次

所在地 奈良市法蓮南二丁目1144-1

調査期間・面積 平成8年9月25日～10月24日 189m²

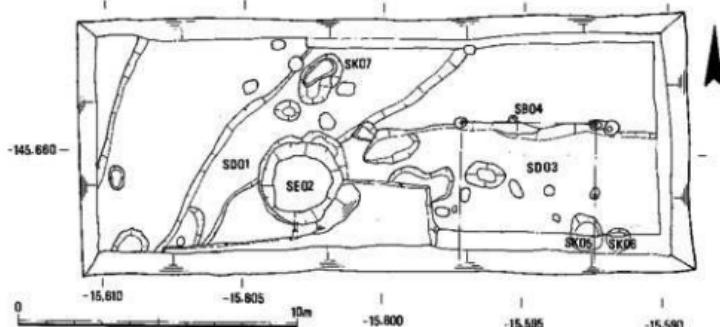
調査原因 共同住宅建設（五十鈴建設株式会社届山）

I 調査の目的

調査地は、現佐保川の北側に位置しており、地形からみて川の氾濫によって遺構が削平されている可能性が考えられた。そこで、奈良市教育委員会では96・4次調査として平成8年7月31日に、遺構の有無を確認するために3ヶ所にトレーナーを設定し試掘調査を行なった。その結果、届出地の北半で一段高くなっている部分のトレーナーで戸戸と思われる遺構を検出した。届出地の南半は川の氾濫をうけており遺構はなかった。その成果に基づき本調査を実施した。平城京の条坊復元では、左京二条六坊十坪のほぼ中央部に位置する。また、天地院が天喜元年（1053）に焼失以降に移建されたとされる法蓮寺や、江戸時代の絵図に描かれているエンマドウの推定地とされているが詳細は不明である。

II 調査地の層相

発掘区内の基本層序は、盛土（厚さ0.1m）以下、黒色土（作上、厚さ0.1m）、黄褐色土（厚さ0.3m）、灰褐色土（厚さ0.35m）、暗茶褐色粘土（厚さ0.45m）、灰茶色粘土（厚さ0.4m）と続き、現地表下約1.7mで茶灰色砂礫の地山に至る。地山の標高は概ね、75.0mである。



第359次調査 遺構平面図 (1/200)

III 検出遺構・遺物

弥生時代の自然流路1条、奈良時代の井戸1基、平安時代末～鎌倉時代にかけての土坑3基、溝1条、掘立柱建物1棟である。いずれも地山上面で検出した。

S D01 発掘区中央西で検出した弥生時代の流路。最大幅3.5m、深さ約0.2mの断面かまぼこ形を呈する。埋土は黄灰色粘土で畿内第V様式でも新しい様相を示す弥生土器の甕・高杯が出土した。

S E02 発掘区中央西で検出した掘形の一辺が約3.0mの平面隅丸方形を呈する井戸である。検山面からの深さは1.8mである。井戸枠は抜き取られて存在しない。抜き取りの埋土から奈良時代の土師器皿・皿、須恵器皿・壺が出土した。遺構の埋積時期の上限が奈良時代と考えることは可能である。

S D03 発掘区中央東で検出した東西方向の溝。南肩が発掘区外にあるため幅員は不明であるが、幅4.5m以上、深さ0.2m、長さ10m分を確認した。埋土は黄灰色粘土で奈良時代の須恵器片、12世紀前～後半にかけての瓦器椀、土師器皿、羽釜が出土した。

S B04 発掘区中央東で検出した桁行2間(4.8m)、架間2間以上の南北棟建物。重複関係より S D03より新しいことがわかる。

S K05 発掘区南辺東で検出した平面が隅丸方形の土坑。東西1.1m、南北1.4m、深さ0.2mである。埋土は暗灰色粘土で13世紀後半～末の土師器皿、羽釜が出土した。

S K06 発掘区南辺南で検出した平面が円形掘形の土坑。東西0.8m、南北0.9m、深さ0.2mである。埋土は暗灰色粘土で14世紀初頭の土師器皿、羽釜、須恵器鉢と、巴紋軒丸瓦1点が出土した。

S K07 発掘区北辺で検出した平面が不整形の土坑。東西1.3m、南北1.6m、深さ0.3mである。埋土は暗灰褐色粘土で13世紀末～14世紀初頭の土師器皿、羽釜、須恵器、国産陶器(常滑焼)が出土した。

IV まとめ

今回の調査地から北西約700mで行なわれた調査(市第264次)でも、同じように自然流路から弥生時代後期の上器が出土しているので、近接地に集落遺構が存在する可能性がある。また、調査地の南半は南側を流れる佐保川の氾濫によって、奈良時代の遺構面は削平されていることがわかった。この地域は13世紀後半に住居地として南都の一部として再度宅地化されたことがわかる。また、平安時代中頃以降に成立したとされる法連寺や、江戸時代のエンマドウにかかる遺構は検出できなかったが、今後の周辺地域の発掘調査成果を待って検討していきたい。

(山前智敬)

1) 奈良市『奈良市史 寺社編』1985 P.259

2) 永島福太郎氏に御教示頂いた。

13 平城京左京五条二坊十五・十六坪の調査 第361次

所在地 奈良市大安寺西一丁目

調査期間・面積 平成8年10月7日～11月15日 300m²

調査原因 大安寺西一丁目緑住まちづくり推進事業

I 調査の目的

本調査地は大安寺大池と呼ばれる明治時代に造られた溜池に位置し、奈良時代の条坊復元では平城京左京五条二坊十五・十六坪に相当する。また周辺の調査で弥生・古墳時代の遺跡が確認されており、これらの時代の遺跡が存在する可能性もある。本調査は、大安寺西一丁目緑住まちづくり推進事業に伴い、池内の遺跡残存有無確認を目的とした。このため第1・2・4・6・10発掘区（各50m²）、第3・5・7～9発掘区（各10m²）の計10箇所の試掘坑を設け、さらに図中に○印で示した地点で、検土杖によるボーリング調査を行った。

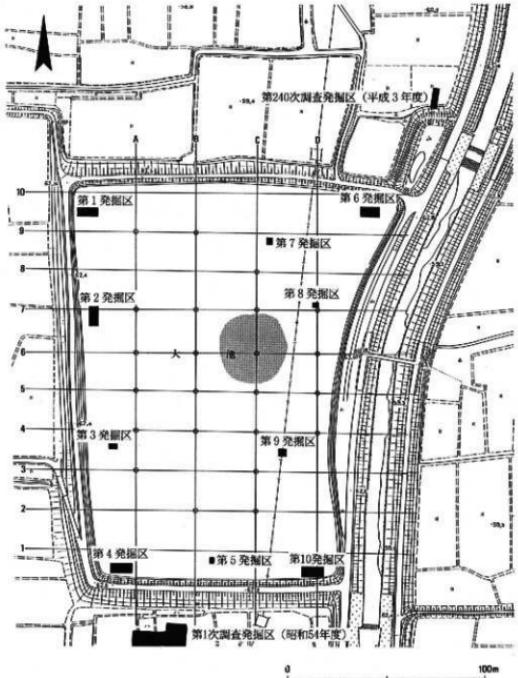
II 調査地の層相

第1～10発掘区においては、浅褐色細砂（表土）、灰色細砂、灰色砂質シルト（作土）、褐灰色砂質シルト（床土）、灰白色砂質シルト（作土）、暗褐色砂質シルト（床土）、褐灰色砂質シルト（遺物包含層）、浅褐色砂質シルト（奈良時代遺構面）、黄白色砂質シルト（弥生時代遺構面・地山）が基本である。これに対し、池の中心付近は大幅な削平のため、灰色泥（ヘドロ）直下に奈良時代遺構面、あるいは弥生時代遺構面があると考えられる。また奈良時代遺構面の検出レベルから、旧地形は池の西側中央部が最も低く、そこから周辺へ緩やかに高くなり、池の東側に向かって緩やかに低くなっていたと考えられる。

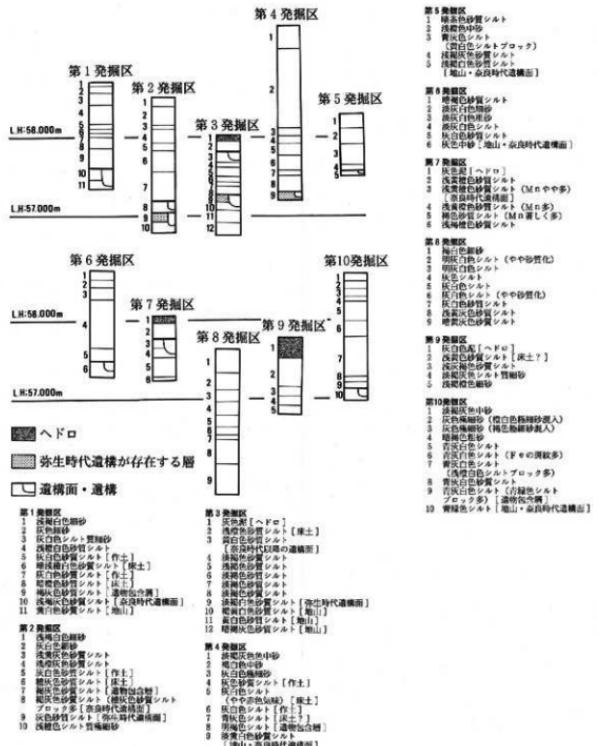
III 検出遺構

大きく分けて3時期の遺構がある。奈良時代の遺構としては第1・2・4～7発掘区で柱穴および上坑、第10発掘区で溝を検出した。奈良時代の遺構は、ほぼ池の全面に残存していると考えられる。ただ、C-6付近ではヘドロ層が厚く、遺構が20～30cm削られている可能性が高い。弥生時代の遺構としては第2・3発掘区に土坑、および第4発掘区に溝を検出している。なお第4発掘区では奈良時代の遺構面と同一面で、第2発掘区では奈良時代の遺構面のさらに下層でこれを検出した。奈良時代以降の遺構としては第3発掘区に土坑を検出した。これらの遺構は池内の地形から考えて、堤防付近にのみ残っていると考えられる。

（大庭淳司）



奉納部分は奈良時代道構面が20cm~30cm削平されていると考えられる。また、○印を付けた地点では検土杖によるボーリング調査を行なった。



第361次調査 発掘区位置図 (1/2,000)

第361次調査 各発掘区土性層状図 (1/50)

14 平城京左京四条五坊十三坪の調査 第360次

所在地 奈良市杉ヶ中町11-2他

調査期間・面積 平成8年10月1日～10月11日 80m²

調査原因 事務所ビル新築（松川公明氏届出）

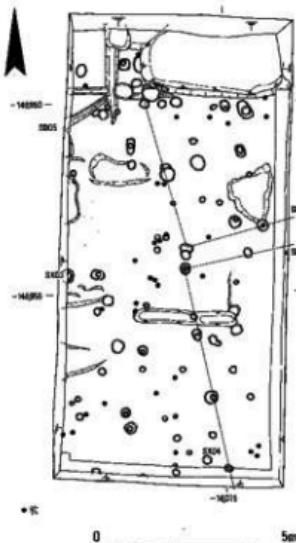
I 調査の目的 調査地は平城京左京四条五坊十三坪の北西隅にあたり、調査地の北端に十一・十四坪境小路が想定される。条坊造構と十三坪内の様相の確認を目的とした。

II 調査地の層相 畸序は上から暗灰色砂質土、茶灰色砂質土、淡黄灰色粘砂と続き、現地表下約0.6mで黄褐色粘土の地山となる。地山の標高は概ね67.8mである。造構はすべて地山上面で検出した。

III 検出造構・遺物 掘立柱建物2棟、土器埋納造構2、溝1条があるが、確認できるものはすべて古墳時代以前の造構である。そのほか、建物としてまとまらなかったが、多數の柱穴および小柱穴がある。SB01は南北2間(4.0m)、東西1間(2.1m)分を検出した。南北柱間寸法は2.0m等間である。SB02は南北3間(5.4m)、東西1間(1.8m)分を検出した。南北柱間寸法は1.8m等間である。

SB01・02とともに北で大きく西に振れる建物で、土師器片が出土した柱穴もあるが、時期は判然としなかった。SX03・04はいずれからも弥生時代後期～古墳時代初頭の高杯脚部、あるいは鉢底部の細片が出土した。特にSX04からは鉢1個体分がまとまって出土している。SD05は深さ約0.1mの素掘りの斜行溝で、長さ1.4m分を検出した。埋土は灰褐色粘砂であるが、造物がないため時期は不明である。そのほかの柱穴および小柱穴から、土師器片が出土したものもあるが、時期は特定できなかった。

条坊造構は確認できなかったが、造構の遺存状態から、坪境小路の南側溝が削平されたとは考え難く、発掘区外北にあると考える。また、周辺の奈良時代以降の造構は古墳時代以前に比べ、稀薄になることが判明した。（宮崎正裕）



第360次調査 造構平面図 (1/150)

15 平城京左京八条二坊三坪の調査 第362次

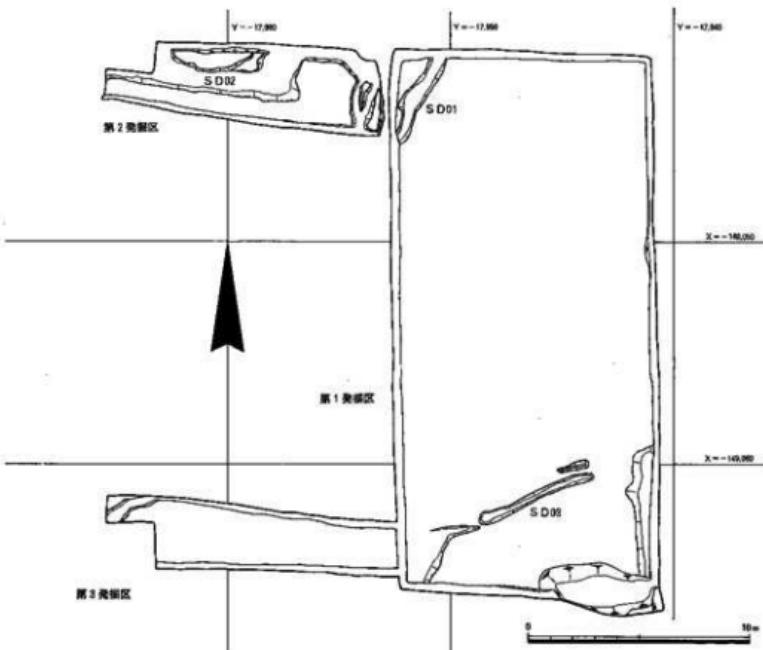
所在地 奈良市杏町427-1

調査期間・面積 平成8年10月23日～11月15日 323m²

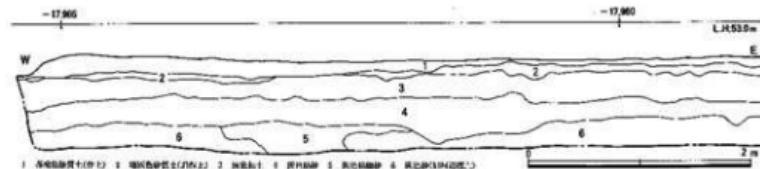
調査原因 杏南第11号市営住宅建替（奈良市長通知）

I 調査の目的

調査地は平城京の条坊復元によると左京八条二坊三坪の南西辺にあたる。また、このあたりには奈良時代の佐保川が流れていると想定されている。今回の調査は三坪内の様相の確認を目的とし、敷地内東側に第1発掘区を設けた。調査の結果、第1発掘区全体が旧河道であることが判明したため、西岸の検山を目的として、敷地内北西に第2発掘区を、敷地内南西に第3発掘区を設けた。



第362次調査 遺構平面図 (1/250)



第362次調査 第3発掘区北壁土壠図 (1/50)

II 調査地の地形と層相

いずれの発掘区もほぼ同じ層相で、茶褐色砂質土（作土）、暗灰色砂質土（旧作土）、灰色粘土、灰色粘砂と続き、現地表下約0.6mで灰色砂または灰色粗砂のIH河道堆積物となる。IH河道は東西約25m、南北約25m分を検出した。旧河道上面からの深さは約1.9mまで確認できたが、湧水とそれによる壁の崩壊のため、河底を確認することはできなかった。堆積物中には奈良時代から室町時代にかけての土器片を含む。旧河道上面の標高は51.9～52.1mである。

III 検出遺構・遺物

検出した遺構は溝7条で、すべて旧河道上面で検出した。主なものについて記す。

S D 01 第1発掘区で検出した北で東に振れる素掘りの溝である。第3発掘区で検出した溝と1連のものとおもわれる。幅は約1.0m、深さは0.1～0.15mである。埋土は灰色粘砂である。埋土から漆塗木椀が出土した。

S D 02 第2発掘区で検出した北から西へ屈曲する素掘りの溝である。幅は1.2～1.8m、深さは約0.18mで、長さ約10.0m分を検出した。埋土は緑灰色砂である。

S D 03 第1発掘区で検出した北で東に振れる素掘りの溝である。幅は約0.5m、深さは約0.1m、長さは約5.5mである。埋土は灰色粘砂である。

遺物は遺物整理箱で1箱分出土した。須恵器、土師器、瓦質土器、陶器、漆塗木椀がある。出土遺物の大半が旧河道出土のものである。

IVまとめ

平城京の条坊復元によると奈良時代の佐保川は、本調査地周辺では北東から南西方向に流れおり、今回検出した旧河道も佐保川の一部とおもわれる。旧河道埋土から14世紀代の土器が出土したことから、14世紀以降に耕作地に変わったと考えることができる。なお、今回の調査地の南西の調査でも、佐保川の一部と考えられる旧河道の南岸を検出しており、位置関係からみて一連のものと思われる。

(原田憲二郎)

註) 奈良市教育委員会「平城京左京八条二坊四坪の調査 第305次」「奈良市埋蔵文化財発掘調査概報 平成6年度」1995

16 松林苑跡の調査 第367次・第369次

第367次調査

所在地 奈良市佐紀東町内

調査期間・面積 平成8年11月18日 13m²

調査原因 市道中部194号線拡幅（奈良市長通知）

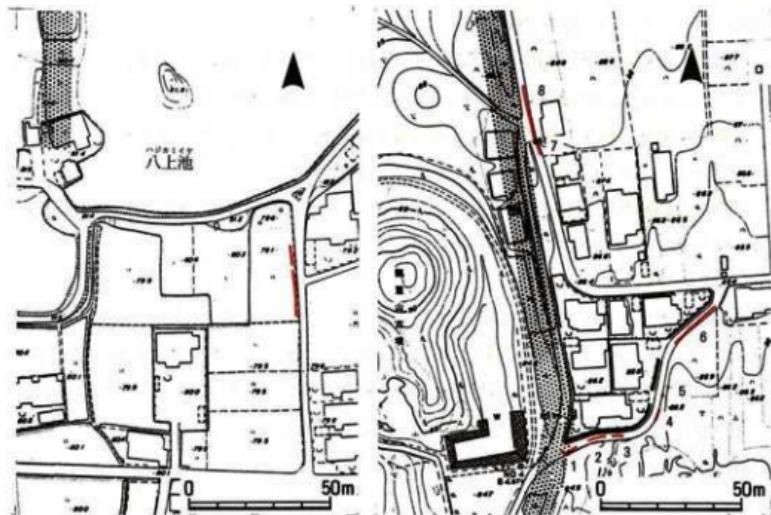
調査地は八上池から南へ延びる道路の北端部で、調査地の現状は水田である。約0.2mの作土直下が小礫の混る橙色粘土の地山となっており、地山面の標高は79.4m前後である。奈良時代以前の遺構・遺物は検出できなかった。

第369次調査

所在地 奈良市佐紀中町二丁目他

調査期間・面積 平成8年12月10日～12月13日 69m²

調査原因 公共下水道築造（奈良市長通知）



第367次調査位置図(1/2,000) 第369次調査位置図(1/2,000 網目は西面築地推定ライン)

調査地は瓢箪山古墳の東に建並ぶ住宅地内で、松林苑の西を画す築地が痕跡を残している地域である。下水道管埋設予定地に大小8ヶ所の発掘区を設定した。

第1発掘区 西面築地の推定延長上に設定した。厚さ約0.4mの、瓦片を含む褐色土の下に小砾と粘土の混じる橙褐色土

が1m以上続いている。橙褐色土層上面は標高84.3m前後で東へ緩やかに降っており、南へ急激に落ち込んでいる。櫻原考古学研究所の第2次調査の結果から考えると、この部分では築地本体は削平されているようであり、橙褐色土層が築地基壇部の盛土の一部と考えるのが妥当と思われる。築地の雨落溝や瓦の集中堆積は確認できなかった。

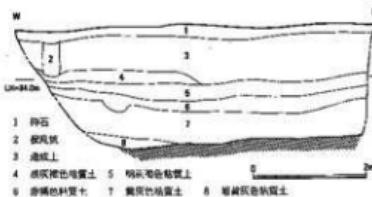
第2発掘区 第1発掘区から北東へ約4m離れた地点に設定した。ここでは瓦片を含む層が深さ約2mまで達している。地山は砂疊混じりの赤色粘質土で、上面の標高は82.8m前後である。しかし後述する第3発掘区から東は地山上面の標高が急激に上がっていることから、第2発掘区付近は谷状になっていたと推測される。このことは、この付近が猫塚古墳の周濠を利用した池の一部と推定されること一致するが、水が溜まっていたような状況は観察されなかった。第2発掘区の第5層には江戸時代の遺物が含まれており、ここが完全に埋まるのは近世になってからと考えられる。

第3～6発掘区 猫塚古墳の北部に設定した。これらの地点では、地山が削平されて現地表面となっている。標高は各発掘区とも85.0m前後であるが、第6発掘区北端は地山面が北に落ち込んでおり湧水も激しい。崩落のため掘削不可能となつたが、地山面は1m以上下がっているものと思われ、池がこの辺りまで広がっていたことが推測される。

第7・8発掘区 西面築地のすぐ東脇に沿う位置に設定した。地表下約0.7mで地山となり、上面の標高は87.5m前後である。その直上に瓦小片を含む橙褐色粘質土が約0.1m堆積しており、築地本体はもとより、基壇状盛土も確認できなかった。

松林苑跡については、県立櫻原考古学研究所が昭和54年から継続して調査を行なっているが、推定範囲が広大なこともあり、その大部分は未解明と言わざるを得ない。奈良市教育委員会においては、これまで試掘調査等を行なつたことはあったが、本調査としては今回が初めてである。ただし、いずれの調査も工事の性格上調査対象地が極めて制限されており、十分な成果を得るには至らなかった。ただ、少なくとも現道路部分は築地本体が全て削平されているものと思われる。

(松浦五輪美)



17 平城京左京四条五坊十二坪の調査 第372次

所在地 奈良市杉ヶ町23番地

調査面積・期間 平成9年1月10日～1月20日 144m²

調査原因 奈良市生涯学習センター建設（奈良市長通知）

I 調査の目的

調査地は平城京左京四条五坊十二坪の南辺部に相当し、四条大路の確認を主目的とした。

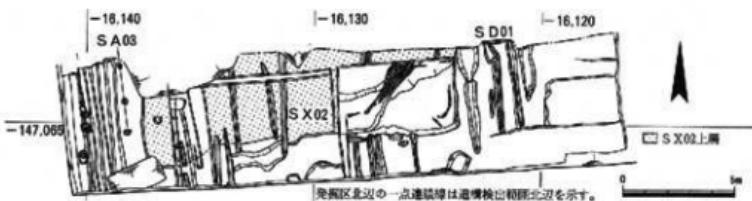
II 調査地の層相

層序は、造成土・作土の下、褐灰色砂質シルト、褐灰色砂質シルト（1～2cm礫多含）、明褐色砂質シルト（1～2cm礫多含）と続き、地表面下約0.9mで橙灰色シルト質極細砂（以下A層）に達する。この上面が奈良時代から平安時代の遺構面で、標高は概ね66.6mである。以下灰白色シルト質極細砂（以下B層）、灰色砂礫（以下C層）と続く。A・B層からは弥生時代後期から古墳時代前期の土器に加え、須恵器も出土しており、A層の形成時期の上限は古墳時代中期と考えられる。堆積状況からA・B・C層は河川等の水成堆積層と考えられる。河底は現地表面下約2mまで掘削したが、検出できなかった。

III 検出遺構

主な検出遺構は、奈良時代後半から平安時代初頭の素掘りの溝S D01、方形土坑S X02で、他に時期不明の掘立柱塗S A03、柱穴3基がある。四条大路に関連する遺構はなかった。S D01は幅0.3m、深さ0.1m。奈良時代中期以降の土器が出土した。S X02は東西13.9m、南北3.8m以上、深さ約0.4mであり発掘区外へ続く。東1/3部分を掘削したが、上層・中層（3層に分かれる）・下層があり、中・下層から奈良時代末から平安時代初頭の土器が出土した。また上馬の破片が4点あり、条坊関連の遺構の可能性もある。堆積状況からいずれも水成堆積層の可能性が高い。

（大庭淳司）



第372次調査 遺構平面図 (1/250)

18 平城京左京七条一坊五坪の調査 第374次

所在地 奈良市八条四丁目369-1、370-1、371-1、377-1、378-1、378-4、379-1、380

調査期間・面積 平成9年2月10日～2月25日 502m²

調査原因 (仮称) 奈良市灰からセンター建設(奈良市長通知)

I 調査の目的

調査地は佐保川と岩井川が合流する堤防上に位置し、運動場に造成される以前、敷地の東半部は溜池であったことが地籍図よりわかる。調査は遺構在存状況の確認のため、東と西の2ヶ所に第1・第2発掘区を設け行なった。

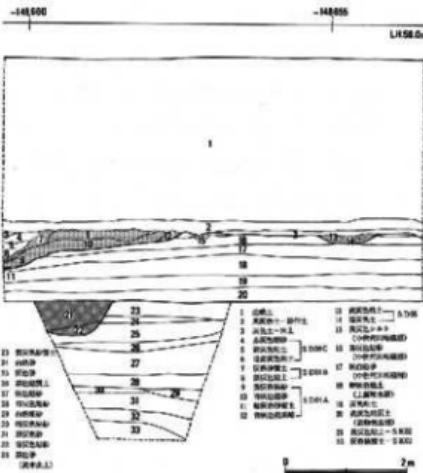
II 調査地の層相

第1発掘区 現地表から盛土(4.1m)、溜池埋土である黄灰色粘土(1.0m)、黒灰色粘土(0.2m)の順であり白色砂の地山に至る。地山は発掘区北東隅で標高53.1m、南東隅で標高52.0mで北から南へ下降する。

第2発掘区 現地表から盛土・作土・床土の下、黄灰色シルト、黄灰色粘土(中世河川堆積層)、灰白色砂(中世河川堆積層)、暗灰色粘土、灰色粘土、黄灰色粘質土(奈良時代造物包含層)、黄灰色粘質土、白色砂、灰色砂、黑色粘質土、灰色粘砂、青灰色粗砂、白色粗砂、暗灰色粘砂、黑灰色砂、青灰粘色砂、黑色砂の順で堆積する。遺構は黄灰色シルト上面(標高54.5m)で江戸時代の造構を、黄灰色粘質土上面



第374次調査 発掘区位置図 (1/5,000、網目は旧溜池)



第374次調査 第2発掘区西壁堆積土層図 (1/100)

標高53.4m)で奈良時代の土坑を確認した。

III 検出遺構・遺物

第1発掘区 発掘区全面で溜池S X01の南堤と池底を検出した。S X01は発掘区全域から発掘区南側へ広がり摺鉢状を呈する。池の埋土は上層が黄灰色粘土、下層が黒灰色粘土である。池底は、白色砂の地山である。遺物は出土しなかった。

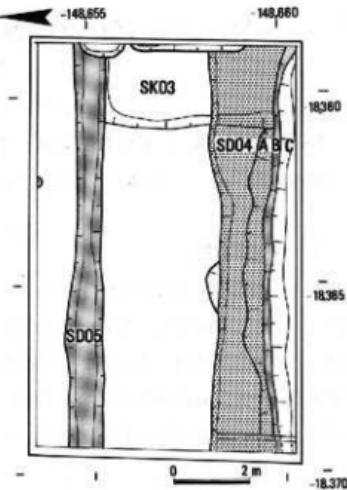
第2発掘区 奈良時代の土坑S K02、中世の河川堆積、江戸時代の土坑S K03と溝S D 04・05を検出した。S K02は黄灰色粘土質上面で検出した南北1.2m以上、深さ0.6mの断面U字形土坑である。埋土は上層が黄灰色粘土(0.5m)下層が灰色粘土(0.1m)である。遺物は奈良時代の土師器、須恵器が出土した。

S K03は、東辺と北辺が発掘区外へ広がるが、東西2.2m以上、南北4.6m以上、深さ0.2m以上の平面不整形掘形の土坑である。埋土は灰色粘土で江戸時代の土師器皿が出土した。重複関係からS D04・05より古いことがわかる。S D04は発掘区南で検出した幅3.0m分、深さ0.6m、長さ10.8m以上の南北方向の素掘りの溝で、南肩は発掘区外である。埋土の堆積状況から3時期に分けることができる。S D04Aは幅3.0m以上、検出面からの深さ0.6m。埋土から19世紀前半の伊万里焼染付け碗が出土した。S D04Bは幅0.9m以上、検出面からの深さ0.5m、断面U字形を呈す。S D04CはS D04Bを改修した溝である。幅0.6m以上、検出面からの深さ0.45m、断面U字形を呈す。埋土から18世紀後半の土師器皿・炮烙が出土した。S D05は発掘区北側で検出した幅1m、深さ0.15m、長さ10.8m以上、断面U字形を呈す東西方方向の素掘りの溝である。遺物は出土しなかった。重複関係から土坑S K03より新しいことがわかる。

IV まとめ

調査の結果、第1発掘区は運動場造成以前には溜池であったことがわかった。この池は、第2発掘区で検出した奈良時代の遺構面(標高53.4m)より深いことから、奈良時代の遺構面を掘削して築造されたものと思われる。また第2発掘区では、地表下4.0mの深さで奈良時代の土坑を確認し、地表下3.0mから3.3mの深さで中世の河川堆積、地表下2.8mの深さで江戸時代の溝を検出した。このことから、調査地東半は池のため奈良時代の遺構面が残っておらず、西半では奈良時代遺構面が残っていることを確認した。

(秋山成人)

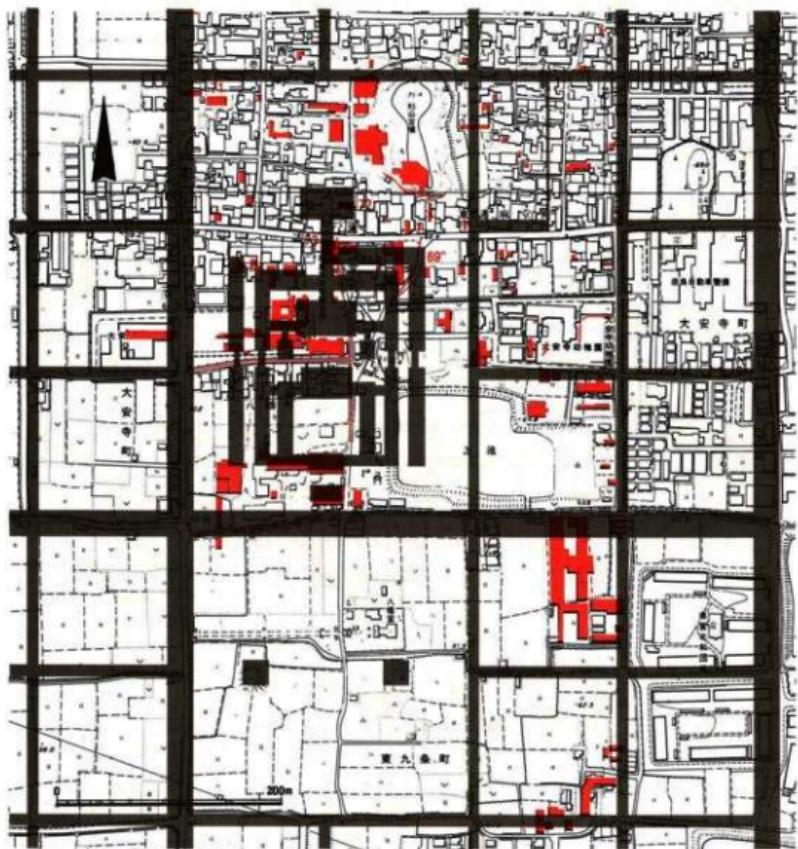


第374次調査 西発掘区遺構平面図 (1/150)

II 平城京内寺院の調査

1 史跡大安寺旧境内の調査

史跡大安寺旧境内では、本年度、第72・第73次調査の2件の発掘調査を実施した。第72次調査は食堂并大衆院地区で実施した現状変更許可申請に関わる調査である。第73次調査は保存整備事業に関わる調査で、北西中房の基壇東端部及び北東中房の基壇西端部を確認した。本書では、昨年度実施した第69・71次調査と本年度実施した第72次調査を報告する。なお、第73次調査の成果は保存整備事業完了時に報告する予定である。



史跡大安寺旧境内 発掘調査位置図 (1/5,000)

(1) 講堂、回廊、僧房の調査 第69次

所在地 奈良市大安寺一丁目地内

調査期間・規模 平成8年2月1日～3月8日 延239.4m(A:68.5m B:51.8m C:119m)

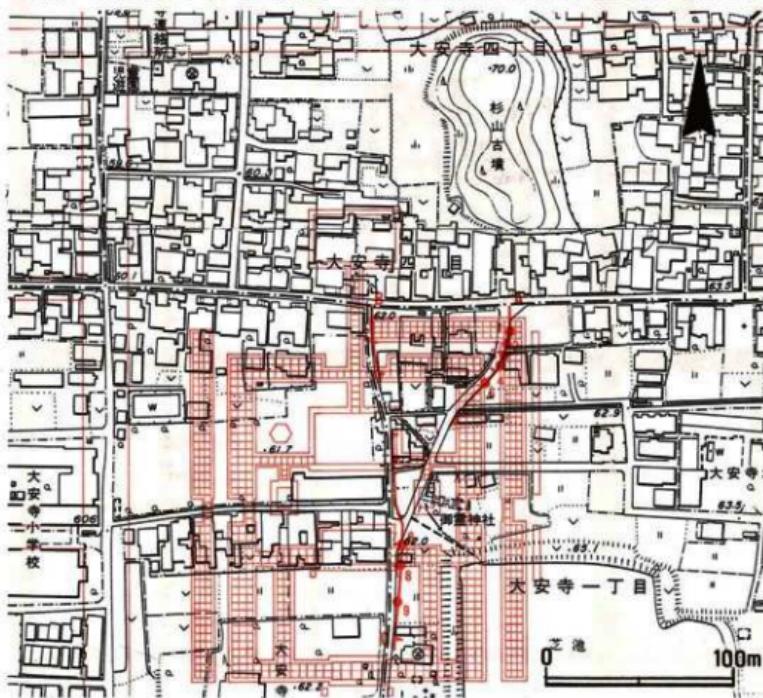
調査原因 公共下水道築造(現状変更等許可申請 奈良市長提出)

I 調査の目的

当該工事は、東面僧房地区(位置図A)、北面僧房地区(同B)、講堂・回廊地区(同C)の市道に公共下水道管を埋設するもので、主要伽藍に関連する遺構に影響が及ぶことが予測された。そこで、文化庁長官の指示に基づき、遺構の状況を確認する事前の発掘調査を実施した。発掘区は、工事の性格から工事の掘削範囲に設定した。

II 調査地の層相

遺構は地山上面もしくは伽藍構築時の整地土面で検出した。講堂回廊発掘区の層序は、



地表下0.34mまでは盛土、以下0.1mの暗灰色砂質土、0.25mの橙褐色土（焼土層）、0.14mの灰褐色砂質土、0.1mの黄褐色砂質土とつづき、地表下0.93m、標高62.46mで地山の黄褐色砂礫に達する。

地山の標高は東面僧房地区で61.7~62.1m、北面僧房地区で61.5~61.7m、講堂地区で61.3~61.9m、回廊地区で60.7~61.5mである。

III 検出遺構

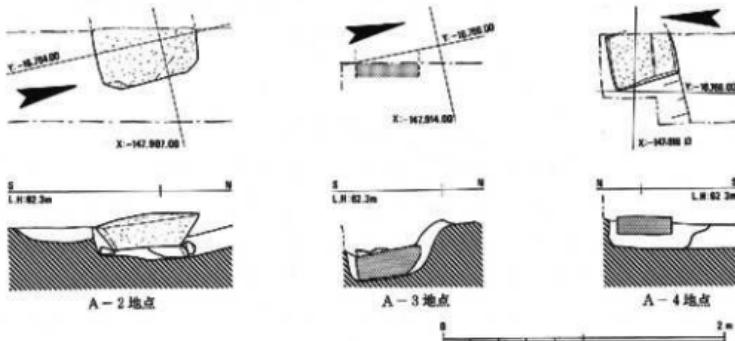
今回の調査で検出した主な遺構は、古墳時代の杉山古墳の外堤斜面の葺石と周濠、大安寺の基壇がある。杉山古墳外堤斜面の葺石は、東面僧房地区のA-1地点で確認した。大安寺の主要伽藍に関する調査成果は、以下のとおりである。

北東・東中房推定地 東面僧房地区では、A-2~4地点で凝灰岩の切石を検出した。各地点の検出状況は図に示すとおりである。位置関係から、いずれも東中房の礎石の可能性がある。なお、北面僧房地区では既存の水道管の掘形で遺構が破壊されていた。

北東・東太房推定地 東面僧房地区では、A-5地点で凝灰岩の切石を検出した。検出状況は図に示すとおりである。位置と形状から、東僧房東側の基壇外装の一部の可能性がある。なお、北面僧房地区では既存の水道管の掘形で遺構が破壊されていた。

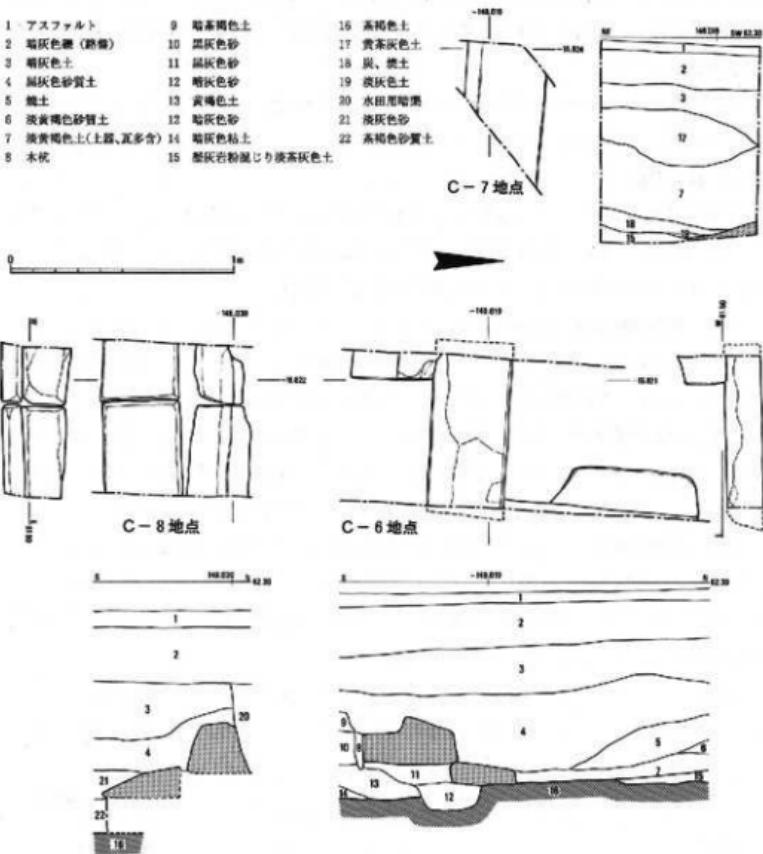
講堂・回廊推定地 推定講堂の東端から北面回廊東辺を横断し、回廊内部に達する位置にあたる。調査区の北半は既設の水道管の掘形と重複しており、講堂の遺構は検出できなかったが、講堂の推定位置で廃瓦を処理したと思われる瓦溜りと、講堂と金堂の間と推定される位置では厚さ25cmあまりの焼土層を確認した。

位置図のC-6~8地点で北面回廊東辺を検出した。C-6・7で基壇北辺を、C-8では南辺を検出した。いずれも延石と地覆石が遺存することから、基壇外装が凝灰岩切石



第69次調査 北東・東中房推定地凝灰岩切石検出状況 (1/40)

1 アスファルト	9 喀茶褐色土
2 基灰色礫(路盤)	10 黒灰色砂
3 基灰色土	11 淡灰色砂
4 淡灰色砂質土	12 暗灰色砂
5 鹿土	13 黄褐色土
6 淡黃褐色砂質土	14 暗灰色粘土
7 淡黃褐色土(上層、瓦多合)	15 基灰岩粉凝じ土基灰色土
8 木枕	16 蒸褐色土
	17 黑茶灰色土
	18 灰、紫土
	19 淡灰色土
	20 水田用階築
	21 淡灰色砂
	22 素褐色砂質土



第69次調査 北面回廊東辺基壇 (1/25)

の壇上積であったことがわかる。延石は幅35cm、厚さ10cm、長さは確認できたC-6のもので84cm。C-7・8のものは上面前角の風化が著しい。地覆石は幅29~40cm、厚さ22cm、長さは40cm以上。上面後角に、羽目石を納めるための幅10~20cm、深さ1~5cmの欠込みがある。基壇築成土は版築されていない。基壇北辺では地山上に数層の築成土を積上げる。基壇南辺では地山が南に向かって下降することから、地山の上に厚さ15cmほどの整地土を置き、そこに築成土を積上げている。基壇規模は、C-6とC-8地点間で地覆石外側間の幅員11.0m、羽目石、葛石が残っていないので高さは不明である。

また、C-6地点には、調査区外へつづくので全体は不明だが、基壇北辺の延石に直交する上下二段の凝灰岩切石がある。下段は幅19cm以上、長さ67cm以上、厚さ5cmの板状であるが、側縁が割れておりもとの形状は不明。上段は一部を下段に重ねて据えられ、長さ87cm、幅10cm、厚さ10cm。石階か軒廊の延石、地覆石と考えられなくはないが、下段が薄い板状であることと、上段を地覆石とした場合、その上面が回廊基壇の延石上面とそろっていることに疑問が残る。

南面回廊推定地 調査では、基壇上で礎石の据付け痕跡を、基壇北側では雨落を検出しているが、本発掘区ではどちらの痕跡もなかった。中門への取付き部での回廊の桁行柱間寸法は14.8尺であることがわかっているので、その成果からみて、本発掘区は柱筋に位置しておらず、桁行の柱間にあるものと思われる。

C-9地点以南は地山面が徐々に下降する。発掘区の南端では現地表下1.2m以下は軟弱な灰色粘土と砂層で、地表下1.5mまで確認したが地山には達しなかった。大きな窪地状の地形が伽藍構築時に埋められ、整地されたものと考えられる。

なお、この他に講堂・回廊地区において地山上面で占墳時代中期後半の土坑を検出した。
埋土中から須恵器蓋杯が出土している。 (安井宣也)

(2) 西面大垣推定地の調査 第71次

所在地	奈良市大安寺四丁口1037-3~9
調査期間・面積	平成8年3月15日~3月20日 22.5m ²
調査原因	住宅建設(現状変更等許可申請 森田真和氏提出)

I 調査の目的

申請地は史跡大安寺口境内の北辺西端にあたり、一部が寺域の西を限る東二坊大路にかかる可能性があることから、これの確認と北辺西端の様相の確認を目的とした。

II 調査地の層相

調査区内の基本層序は、現在の表土である厚さ0.2mの淡黄色土、0.2mの暗灰色粘質土の順で、地表下0.4mで地山の黄褐色砂質土に達する。地山の標高は概ね60.5mである。

III 検出遺構

東二坊大路東側溝が想定される発掘区西端で、幅3.3m以上、深さ1.3mの南北方向の溝を検出した。溝内の堆積物は6層ある。最上層は緑灰色砂質土で染付磁器片を含む。以下灰色の泥質土が4層あり、最下層は灰色砂疊である。上から3層目以下には奈良時代の瓦・土器片を含む。調査面積が小さく、東側溝かどうか断定できない。 (安井宣也)

(3) 食堂推定地の調査 第72次

所在地 奈良市大安寺四丁目1127-1・4

調査期間・面積 平成8年7月16日～8月13日 98m²

調査原因 個人住宅建設（現状変更等許可申請 植谷鉢氏提出）

I 調査の目的

調査地は、大安寺の伽藍復元によると、講堂の北、食堂の推定地にあたる。しかし、これまでの周辺の調査ではそれに相当する遺構は検出されておらず、また、食堂の位置を講堂の東と考える意見もある。したがって、今回の調査は、食堂にあたる遺構の確認を目的とした。また、調査地は杉山古墳から西へ約50mの位置にあり、これと関連する遺構も予想された。また、杉山古墳の周濠および外周にもあたるため、今回の調査は、これらの遺構の確認も目的とした。

II 調査地の層相

発掘区内は、近現代の搅乱によって大きく乱されているが、基本的な層序は、上から、表土（0.1～0.5m）、中世の茶褐色整地土（0.2～0.5m）、平安時代の灰褐色あるいは黄褐色整地土（0.1～0.2m）で、黄褐色粘土の地山に至る。平安時代の遺構面は、最も残りの良いところで、地表下約0.3m、標高約62.0mである。

III 検出遺構

検出した遺構の時代は、古墳時代、平安時代、中世、近世である。

古墳時代の遺構 杉山古墳の周濠S D01の外岸を検出した。周濠は平安時代に埋められており、埋土を部分的に掘り下げ、底、及び外岸の葺石を確認した。底面には凸凹があり、深さは最深部で0.9mである。葺石は、南半部は搅乱されていたが、北半部の岸斜面上半部に遺存していた。斜面中腹には、基底石と思われるやや大きな石が葺かれており、下半部には当初より存在しなかったものと思われる。周濠底にたまつた暗茶褐色土から、外堤あるいは外周に置かれたと思われる円筒埴輪、形象埴輪が出土した。

平安時代の遺構 杉山古墳の周濠S D01は、平安時代に暗灰色砂土、灰色砂で埋められ、さらに灰褐色あるいは黄褐色整地土が、地山上、及び周濠外岸上端から東へ幅約5mまでを覆っていた。周濠上の整地土中には、部分的に平瓦、丸瓦の破片を散きつめ、東端では、周濠外岸に沿って軒平瓦を瓦当面を東側に向けて並べてあった。おそらく整地を行なう範囲を示した区画であろう。なお、整地土中から、奈良三彩の破片が散らばった状態で山上した。

発掘区の西端では、整地土上面で、掘立柱穴2個からなる掘立柱列S X02を検出した。

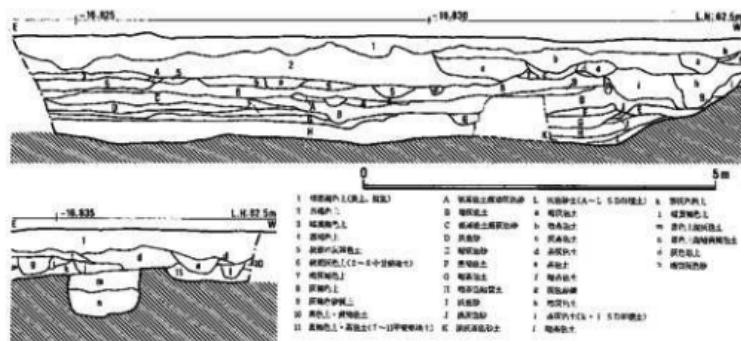
発掘区外に続いているものと思われる。掘立柱建物の東側柱列であろうか。掘形は、ともに平面隅丸方形で、一辺1.2mである。柱間は2.7m（9尺）である。建物主軸は北でやや東に振れる。

掘立柱列S X02のすぐ東の、杉山古墳の外周部分で、土坑群S K03を検出した。杉山古墳の外岸上端に沿って、一列あるいは二列に重なるように掘られている。土坑はいずれも平面円形で、直径は1.5mほどである。深さは0.3～0.5m残存する。粘土探査坑と思われる。杉山瓦窯操業時の粘土探査坑であった可能性が高い。掘立柱列S X02と重複しており、それよりも新しい。

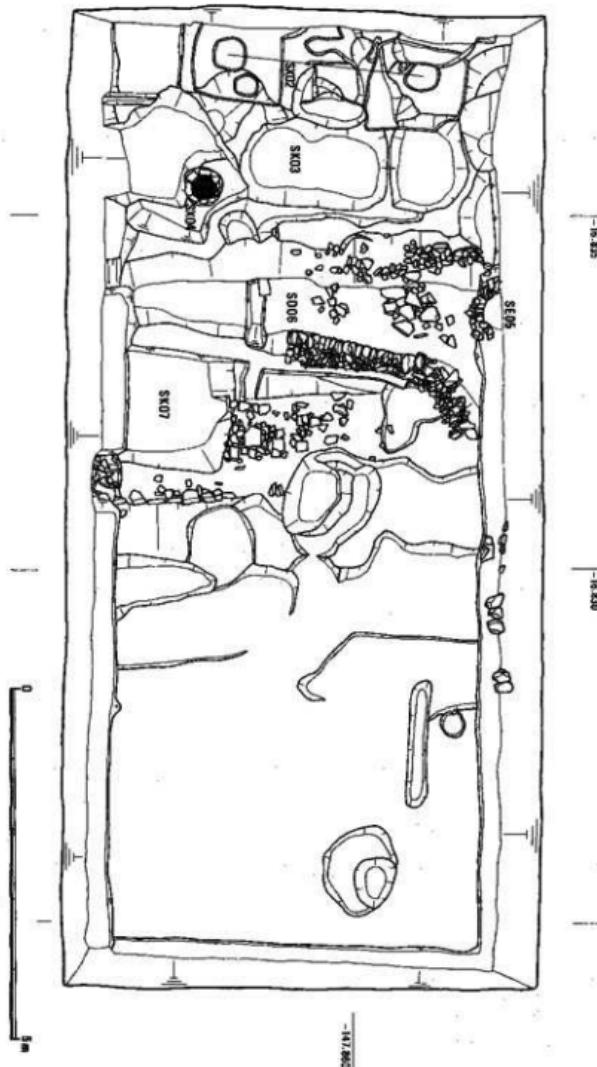
また、土坑群S K03の底で、平面円形掘形の土坑S X04を検出した。直径0.55m、深さはわずかに0.06m残存する。底には、掘形の内側に沿って、長方形あるいは三角形に打ち欠いた平瓦を置き、さらにその内側に、バラスを敷きつめている。土坑群S K03によって、上部は大部分が破壊されていると思われ、瓦は少なくとも数段は積まれていた可能性がある。性格は不明である。

中世の遺構 杉山古墳周濠埋土上面で土坑、溝を検出した。なお、周濠埋土の一部から14～15世紀の土師器皿が集中して出土した。遺構は認識できなかったが、土坑あるいは落ち込みが存在したものと理解する。

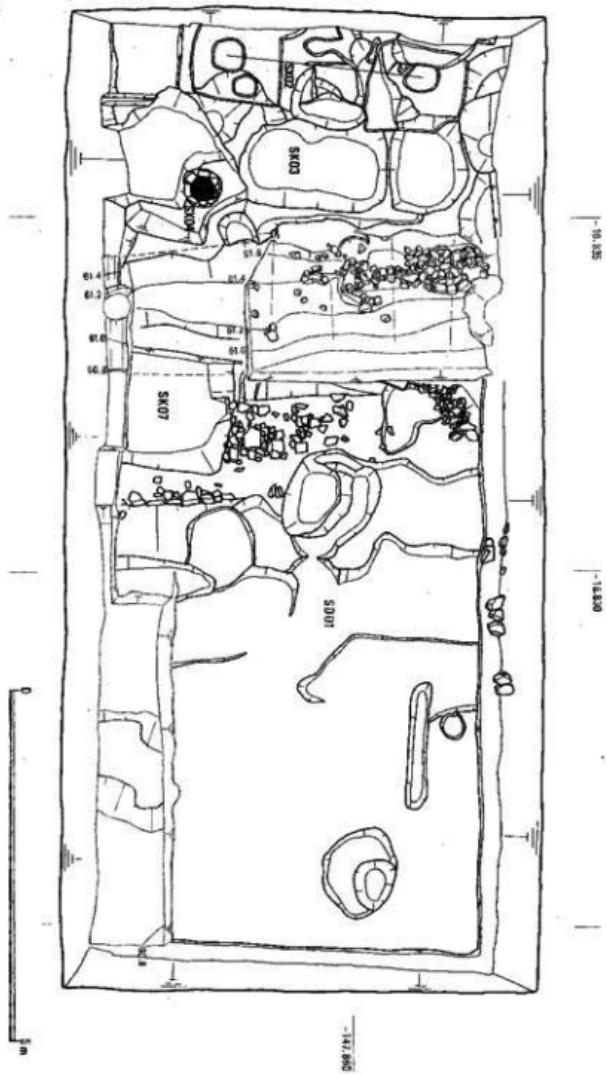
また、発掘区北端の周濠外岸で、平面円形掘形の井戸S E05を検出した。掘形の半分以上が発掘区北壁にかかるため、底まで掘り下げることができなかった。したがって、出土遺物は皆無だが、奈良、あるいは平安時代の瓦を小口積みして井戸側を作っており、付近の調査例からみて、中世のものと思われる。掘形の直径は1.1m、井戸側の直径は0.7mである。



第72次調査 北壁土堀（1/80）



第72次調査 縱横平面図 (1/80)



第72次調査 杉山古墳周辺平面図 (1 / 80)

近世の遺構 発掘区のほぼ中央で、南北方向の溝S D06A・Bと平面方形の土坑S K07を検出した。溝S D06は改修されており、新しい溝Bは、南半部は素掘りであるが、東岸の北半部に護岸の石積みをともなう。石積みは小口積みで、掘形との間に小蝶を充填している。西岸では、東岸の石積みに対応するように、北半部に杉山古墳の葺石が残存しており、あるいは、そのまま護岸の石積みとして利用したのかもしれない。溝Bは南北に直線的にのび、底には部分的に平瓦が敷かれている。幅は0.9m、深さ0.25mである。また、古い溝Aは発掘区の北端で大きく東に曲がる。溝Aも、溝Bと重複していない溝曲部の岸に、やや乱れているが、護岸の石積みと思われるものが残っている。

土坑S K07は東西1.6m以上、南北1.7m、深さ0.4m。遺構の重複があり、S K07がS D06より古い。

IV 出土遺物

古墳時代の埴輪・奈良時代の瓦類・土師器・須恵器・奈良三彩・銅箸・水晶玉、平安時代の瓦類・土師器・黒色土器・綠釉陶器、中世の土師器、近世の土師器・瓦質土器があり、ほかに鉄釘・鉄滓・石製硯・砥石がある。遺物整理箱140箱分出土した。

このうち、122箱分は瓦類で、大半は丸瓦・平瓦である。ほかに、軒丸瓦・軒平瓦・凸面布引瓦・博がある。軒丸瓦は、奈良時代のもの5型式6種12点、型式不明のものが5点、平安時代以降のもの3点である。軒平瓦は、奈良時代のもの5型式8種27点、型式不明のもの5点、三重弧紋1点、平安時代以降のもの8点である。軒丸瓦の型式、種、数量の内訳は、6091A 1点、6137A 3点、6138C 4点（うちC a 2点、C b 1点）、6138J 1点、6231C 1点、6304D 2点である。軒平瓦の内訳は、6664A 5点、6690A 1点、6712A 9点、6712B 1点、6712C 1点、6716C 4点、6716F 1点、6717A 5点である。

また、奈良三彩は整理箱1箱分である。また、銅箸2点、水晶丸玉1点は周濠埋土の暗灰色砂土、灰色砂から出土した。なお、山上遺物の詳細については、『史跡大安寺旧境内I』奈良市教育委員会、1997年に報告している。

V まとめ

これまでの食堂推定地の調査では、奈良時代の遺構は検出されていなかったが、今回の調査でも、奈良時代の遺構は検出できなかった。今回の調査地では、奈良時代でも依然として杉山古墳の周濠が存在し、平安時代になって初めて、周濠が埋められ、整地されて掘立柱建物あるいは塀が建っている状況がうかがえる。食堂の位置をめぐっては、講堂の北に配されたとする説と講堂の東に配されたとする説があるが、奈良時代の食堂が想定される位置では、杉山古墳の周濠が埋まっていることから、少なくとも講堂の真北に想定するのは困難なようと思われる。講堂の北に配されたと考えるならば、これまでの想定位置よりも、杉山古墳の周濠から離れた、西に想定せざるをえないだろう。

（森下浩行）